
勇者の妹と温和な兄

とんび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の妹と温和な兄

【Nコード】

N8541W

【作者名】

とんび

【あらすじ】

兄と妹の二人は異世界に召喚されてしまった。魔王を倒してほしいとのことだが・・・

兄は最初から強いですが、ハーレム、ご都合主義が多々あります。苦手という方はご遠慮ください。

プロローグ（前書き）

はじめまして、初投稿になりますゆえ、誤字脱字等があるとおもいます。

そのときは、遠慮なくもうしつけください。

プロローグ

「お兄ちゃん外にでかけようよ〜!」

そんな声が、どこからか聞こえてきた。僕の名前は、三城みしろ 秀太しゅうた 17歳で高校生だ。

ドタドタと階段をのぼる音が聞こえ、パンツ!!と扉が開いた。

「お兄ちゃん今日くらい外に出かけようよ〜」と声をかけてきたのは、僕の妹、麻衣まいだ。

絶世の美少女で誰もが振り向く。俺とは、違う人だ。ちなみに麻衣は16歳で俺より一つ下だ。

「なんで〜?今日は昼寝の日だからいきたくないな〜」と僕は言った。

「いつもお昼寝してるでしょ!今日はお兄ちゃんの誕生日だから、いいでしょ今日くらい!〜」と少し困り顔でいつてくる。

「…わかったよ〜」といいながら着替えをしようとする。

「お兄ちゃん、女の人が居る時は着替えちゃダメでしょ」と怒られる。

「家族だからいいと思っけど…」と言つと

「家族でもダメ!」と胸のまえでビシッとバツ印をつくる。

「わかった、んじゃ先に行つてて〜」と僕が言うと

「じゃあ、玄関で待つてるね〜」と笑顔で答えて出ていった。

俺はため息をつきながら、着替えをする。正直、麻衣とは出かけたくない。いろんな人に絡まれるのだ。

ヤンキー、いけ好かないナンパ野郎、美人な女の人、高校生など色んな人に…正直うんざりだ。

そうなるなら、家でラノベや音楽を聴いたり、昼寝をしていたほうが、絶対いい。

そう考えながら、部屋を出て玄関に行くと、麻衣が箱に包まれたモノを差し出してきた。

「お誕生日おめでとう、お兄ちゃん」と笑顔でいつてきた。

「あ〜、うん、ありがとう」と受け取った。

「あけていい？」と聞くと

「いいよ〜」と言うのであけた。

箱の中身は黒のプレスレッドだった。

「お兄ちゃんは黒が似合うでしょだからそれにしたの」と言いながら俺を見る。

「まあ、黒好きだし服はほとんど黒色ばっかだしな〜」と苦笑いで自分を見る。

秀太の格好は黒をベースとした服装だ。黒のスボン、Ｔシャツ、上着、ひとつだけ違うと言えばベルトが白だ。

「アクセサリーが欲しいなと思っていたところだったんだ。今日はこれつけて出かけるね」と言つと

「ほんと！？気にいってくれたの？ありがとう！！」と俺に飛びつく。

「重いよ」と困りながら言つと

「女の人に重いつていうのダメ！重くてもそこは軽く受け止めて、軽いね」って言つてあげる！！」と憤慨しながら言ってくる。

「わかった。今度からそうするよ」と欠伸しながら言つと。

「もうっ！じゃあ、早速行こうっ！」と俺の手を引きながら玄関を一緒に出た瞬間、光に包まれた。

1話 異世界にきた

三城 麻衣 視点

「あれ？ここはどこだろう？」私は思ったことをそのまま言った。

「日本ではなさそうだな」とのんきにお兄ちゃんは言う。

私たちがいたのは、洞窟だった。壁にあるたいまつがあたりを照らしていた。

「あなたが、勇者ですね！」と声がする。

振り返ると、そこには、綺麗な金髪と碧眼で巫女の服を着た美少女がいた。

「初めまして、私はスフィード王国第一王女、レイ＝スフィードと申します。あなたたちには、魔王を倒してもらいたいです」と唐突に言ってきた。

「勇者？僕たちが？」と首をかしげながらお兄ちゃんは言った

「ははは、はい、そ、そうです。でも、あにや、たには【魔力】を感じま、しえんね」と顔を赤くして王女様は囁みながら言う。

私は王女様の反応を見て惚れたかな、と思った。ウチのお兄ちゃんは顔立ちが良すぎるのだ。

しかもタチが悪いことに自覚がない。二人で街を歩くと注目を浴び

るのだ。

お兄ちゃんはそれを私のせいになっているが、実際、お兄ちゃんも悪い。

それでさらに、どこかが抜けている。

「【魔力】？それって何ですか？」と私が首をかしげて言うと

「おおっ！あなたには凄い【魔力】を感じます！あなたが勇者なのですわ！」と私の言葉を無視して少し興奮しながら言ってきた。

「えっと、レイ王女様あの～勇者とはなんですか説明してもらわないと……」と少し困ったふうに言うと

「も、申し訳ございません。…えーと、勇者様、魔王と言うのはこのイヴァードの世界を滅ぼそうとする邪悪な存在です」と言う。

「あ、私の名前は三城 麻衣です。麻衣とお呼びください」と私は言った。

「僕の名前は三城 秀太。秀太と呼んでいいよ」と無敵スマイルで言う。

「うっ！…わ、わかりました。私のこともレイでいいですわ。シュ…シュウタ、マイ」と顔を赤くしながら言ってきた。

「レイ様、馬車の準備が出来たので二人を連れて行きましょう」と騎士の服を着たショートカットの赤髪で碧眼美女が言ってきた。

「レイ、その人は??」とお兄ちゃんが言つと

「あ、はいこの人は、私の側近で魔法騎士団隊長シャル＝アースレイドです」と言つ。

「魔法騎士団隊長シャル＝アースレイドです。シャルで構いません」と私たちに一礼する。

「私は三城 麻衣です。麻衣とお呼びくださいシャル」

「僕は三城 秀太。秀太でいいよ」シャル。そういえば、魔法キシダンつてことは、魔法がつかえるの!？」

「あ、はい使えますが…」とシャル言つた。…おお!お兄ちゃんの攻撃が効いてない

「見せてくれない？」

「…し、しかし今から」シユウ私が見せてあげます」「とレイが突然言つてきた。

…我慢しきれず言つた感じだった。

「レ、レイ様あまり時間がないのでは??」と少し不満顔で言つと

「問題ありません!」ときっぱり言つた。

「シユウタ今から、魔法を出しますね」とうれしそうにお兄ちゃんを見ると

「うん!」と笑顔一杯にお兄ちゃんは頷く。

「ででで、では、いきましゅ！」と動揺しながら魔法を放つ

【火よその姿を変え、我に力を貸したまえ、いでよ火炎玉】
ファイアーボール

ボウツ！ ドツカッーン！

という音を立てて馬車が燃えた。

「レ、レ、レイ様！！」とシャルは驚愕して言った。

「す、すみません、方向を間違えました」とレイは恐縮しながら言った。

まああからさまに動揺してたからなーと思いつつながらシャルに尋ねる。

「えーと、どうします？」

「とりあえず…歩きましょう申し訳ない」と頭を下げるシャル。

「いえ、うちの兄もあんなことをいったので…こちらにも負がありますし…」と言いつつながらお兄ちゃんを睨む。

「えっ？僕が悪いの？」

「シユ、シユウタは悪くありません。すべての責任は私にあります！」とお兄ちゃんのためならなんでもという感じでレイは言った。

はあ〜とシャルがため息をついて

「お城までは近いので大丈夫です。では行きましようか」

こうして私たちは城に向かって歩きだした。

三城 秀太 視点

城につくと、僕たちは部屋に案内された。王様に会うために着替えをするとのこと一度、麻衣とは別れて着替えることにした。

「わゝ！黒の装備だゝ！それにローブとブーツもー！」僕は素直に喜んだ。

着ている服を脱ぎ早速着て鏡の前に立った。…冒険者になっていた。

「これで旅に出るのか…でも気になることをレイは言っていたな
」

レイは僕には【魔力】がないと言っていた。後で聞いてみたところ普通の人のなかには【魔力】があり個人差はあるが、誰でもあるものとのこと。

【魔力】があれば空気中の精霊や粒子を媒介して魔法が使えて【魔力】は魔法を使えば消費をし、休んだら回復する。

あと、魔法には精霊魔法と創造魔法がある。精霊魔法は安定しているけど使える魔法が固定される。創造魔法は自分で創れて使い勝手がいいが魔法の制御が安定しないことが多い。

この国では魔法を創れる人が、一人もいないらしい…

なのでこの国の人は精霊魔法を使うとのこと。…余談だが一般の人は一つ精霊が操れば良いほうで、二つ使えると国の宮廷魔法師に選ばれるとのこと。

ちなみにレイは火と水が操れるらしい

なんとか使える方法ないの？とレイに聞いたが彼女は無言だった…

ようするに、僕は、魔法が使えない。落ち込んだ死ぬほど…麻衣とレイが慰めてくれた。…感謝します。

コンコンと音がしたので、はいと言いながら出ると、可愛らしい自分と同じ年くらいのメイドさんが立っていた。

「初めまして、シユウ様あなたに務めさせていただくメイドアックレイアと申します」と笑顔で言ってきた。

「初めまして、メイドアさん三城 秀太です。秀太でいいよ〜後、敬語もなしで〜」と笑顔で軽く言つと、

「ッ！…いい、いえ私はメイドの身でありましてそのような無礼な行為は…」と何故か顔を赤くしながら言ってきた。

「いやいや、そんなの気にしなくていいんだよ？僕、ここに来たばかりだから、色々教えてね〜」と笑顔で握手した。

「ッ！…エッ！あの…よ、よ、よろひいくシユウタ私もメイドアでいいかりゃ…」と顔がリングゴみたいで真っ赤だった。…マズイ

「あ〜ごめんね不謹慎だよ。女の人の手に触るなんて」と少し反省しながら言つと

「ツツ！！！ひゃ、そんなことないでひゅー！！！」と言いな
がら自分に突進してきた。

「おわっ！つと危ない危ないあくやっぱり怒ってたんだ…」と心の
奥底から反省した。

「みゃう！！あ…も…うダメ」と自分の胸の中で気絶してしまった。
するとドアから、

「おにーちゃん、どうどう？私の白の…って、ええっ！？」と素
つ頓狂な声を麻衣があげた。

「お兄ちゃんの胸の中で女の子が…お兄ちゃんまたやったの？」と
呆れていた。

「おっ！やっぱり麻衣は白が似合うね」

麻衣は喜んで「ホントに！？ありがとう…じゃなくて、どうしたの
その子？」

「いきなり突進してきて腕の中で気絶したんだ…そんなに握手が嫌
だったのかな？」はあく…とため息をついた。

「まあとりあえずベットに寝かして置けば？」と言ってきた。

「そうだね、んじゃ」と言ってメディアをベットで寝かせた瞬間

「準備できましたか？ではこれから…シュウ？」とレイが綺麗なド
レスを着て呆然としていた。

「どうしたんだい？」と首をかしげる

「シユ、シユウ！！いきなりメイドをお、お、押し倒すなどいけません！！」と剣幕顔で言っつて僕をベットから引きはがす。

「そ、そ、そんなにしたいのであればわた「いけませんレイ様！」「とレイの後ろからセリナが言っつてきた。

「あっ！シャル来てたんだ。」僕がそう言っつと

「ええ、私は彼女の側近でもあるし…レイ様あなたは皇女なのです。もう少し相応な態度を…」とレイに言っつ。

「わかりましたわ、それでは行きましようか」と何事もなかったのよう言っつてきた。

シャルは、はあく息を吐きながらっついて行く。僕たちも後に続いた。…シャル大変だなど同情した。

1話 異世界にきた(後書き)

10 / 1 魔法の詠唱と魔法の設定をかえました。

2話 王様に会おう

三城 麻衣 視点

「お父様、勇者である。ミシロ マイ様とその兄であるミシロ シュウタ様を連れてまいりました」とレイが言う。

「うむ、ご苦勞であった。ではレイ今日はもう下がってよいぞ」と威厳のある声で言ってきた。

「わかりましたお父様、それでは失礼します」

「お初めに掛かります。私は三城 麻衣と申します。魔王を倒すために呼ばれたと存じます」と丁寧に答えた。

「初めまして、麻衣の兄の秀太です。秀太でいいですよ」と無敵スマイルをかます。

すると、「まあ、なんて可愛らしい子なんでしょうシュウタ君はいくつなの？」と王様の隣にいた美しい王妃様が、言ってくる。

「エ、エリーシャ、今はわた「あなたは黙っていて」「はい」「王様を一喝して黙らせる美しい王妃様

ああ王様の威厳がなくなっている…

「僕は17になります。王妃様」

「まあ！17歳！？もう成人しているのですか！シュウタ君なら私

と結婚しない？」とんでもない発言をしてきた
そうこの国では16歳で成人なのだ。

「エ、エリーシャ！？私「離婚よ」はい…ってエッ!?」王様が慌
てている。理不尽すぎると思う。

…もう王様がただあわてているオジサンにしか見えないよ。

「結婚はお断りします。王の仕事は忙しいと聞きますし…」と駄々
をこねる攻撃をお兄ちゃんは繰り出した。

「心配しなくても大丈夫だわ、あなたは必要な時だけ座っていれば
いいのよ」と微笑むレイナル王妃様

…無理だと思っな〜お兄ちゃんを落とすのは、と私は冷静にかん
がえる。

「えっと…じゃあそれ以外は、何してもいいのですか!？」と目を
輝かせながら言う。

…まさかの食いついた!?

「ええ！もちろん食事とかそういうものも心配しないでいいわ…そ
れじゃあ、けっ「お待ちくださいお母様!」「チッ」王妃は舌打ち
?をしながら声の主の方を見る。

「お母様、さすがにそれはいけません王妃様は相応の態度でしめさ
ないとみんなが動揺してしまいます」と金髪で縦ロールの赤のドレ
スをきた美少女が言う。

…うんさつきから周りがざわついているもんね。とその意見に納得
した。

「う…ゴホン…大変失礼いたしました。王、続けてください」「どう

やら周りの雰囲気にはきずいたらしい。

「あつ…ああ、えーと、私は、アレイス…スフィードだ。よろしく頼む」一番最初と同じ態度で言ってきた。

…無理しないでいいよ王様

「私は王妃のエリーシャ…スフィードですわ」と微笑みながら言う。
…あれがなければな…と勝手に思う。

「私は第二王女のファーム…スフィードよ」と金髪縦ロールの子が言った。

…さつきはありがとう。でもお兄ちゃんの方を見て赤く顔を染めるのは気のせいかな？

「ほら、セリー又あなたの番よ」とエリーシャさんに言われて後ろから顔を出す。…かわいい

「わ、わ、私はセ、セ、セリー又…5歳です」と小さく金髪で青い目の美少女が答えた。

そしたら、お兄ちゃんが「セリー又ちゃんこっちにおいて飴あげるよ」と笑顔でこたえて、片膝をつく

…ああ、お兄ちゃん子供を見るとすぐこれだから

「アメ？あめってな…に？」と首をかしげて答える。…ヤバイかわいい！欲しいかも

「あま…い食べ物だよ。甘いものは嫌い？」とこちらも首をかしげて答える…いい勝負だ

「甘いものしゅき〜!!」と言いながら階段を急いで降りようとする…危ない!!

「セ、セリーヌ!!」驚愕の顔でエリーシャさんが叫ぶ。

.....

10段位の階段を顔から落ちようとした瞬間お兄ちゃんが動いた。
…いや動いていた

「……えっ!?!」「」

あまりにも速すぎる行動に誰も何が起こっているか分かっていない状態だ。

セリーヌちゃんまでの距離は約15メートルだった。

ざわざわとざわめく会場…しかしお兄ちゃんは気にすることなく

「こらこら〜だめだよ〜階段を急いで降りようとしたら〜」と優しく微笑む。

「ごめんなしゃい、…お兄ちゃん」と泣きそうな顔でそう言った。

「うん、いいよ、いいよ、それじゃあ、はいこれ」そう言ってお兄ちゃんは飴をわたす。

「おいし〜い!!」ありがとうお兄ちゃん「そういってお兄ちゃんに抱きつく

…ムッ、いかなそれは…ちょっと嫉妬した。

「は〜いどういたしまして、セリーヌちゃん偉いね〜」そういって頭を撫でていた。とても嬉しそうだ

…いいな〜そのポジション変わった〜

なぜだろう…女性の人たちが嫉妬と羨望の眼差しをセリーヌちゃんに送っているのは…気のせいだと願う。

三城 秀太 視点

騒動も一段落ひとだんらくついて、僕たちは、世界の情勢について聞いた。

「今、世界では魔物が多くおる」と王様は睨みながら言う。

どうやら、大変なことになっているな〜僕は思う。

「…お兄ちゃんそろそろおろしたら？」と麻衣が心配そうに僕をみてる。

「セリーヌ、こちらに来なさい。私が抱っこしてあげるから」と王様は言う

「イヤだ、ここがいい。と〜さまのところはイヤ」とセリーヌちゃんは王様から顔をそむけながら言う。

「ぬ、ぬうつ！？そ、そうか…」と僕の方を見ながら王様は言う。

「まあ、僕は別に気にしてないし、それにセリーヌちゃん軽いから」と麻衣から習った。体重軽いよアピールを使う。<プロローグ参照>

「えっ！？今それここで使う！？」とかなり驚かれた。

「えっ？…褒めるんじゃないの？」と不満をぶつける

「いやいや、気づいてよ。てか何で気づかないの？」と意味のわからないことを言ってくる。

麻衣がそう言っただけでようやく気がついた。兵士やお偉いさん達が麻衣をぼーっとしながら見つめていたのだ。…けしからんなるほど、これは後で一言いわないと。と思った。

「心配するな、麻衣。僕がなんとかするさ」と自信満々に言った。

「いや無理でしょ！？…ああ、お兄ちゃん勘違いしてるでしょ？」と呆れ顔で言ってくる。

「何で僕がしょうがない子だなみたいな顔をされなきゃいけないの？」

「ゴホンッ！お主たちそろそろいいかね」と王様は何故か僕を睨みながら言う。…なんで？

とりあえず僕たちは謝り質問をする。

「この国の他に勇者はいないのですか？」僕が言った。

「いや、勇者はこの国だけのものだ。ほかの国にはない」

「魔王は勇者以外には倒せるのですか？」麻衣が言った。

「それが…恥ずかしいことに私は魔王の前までたどり着けないのだ」

と申し訳なさそうに言ってきた。

「そうなんですか…」と麻衣は落ち込んで言った。

「あ、そういえば勇者を召喚したのは何回目なんですか」場の雰囲気を変えるため僕は言った。

「あ、ああ、今回で三回目だ」と王様は言った。

「ふうん、ということは魔王も今回で三回目ということか」と僕は言った。

「お兄ちゃん、何当たり前のことを言ってるの？」

「んっ？お主たち何をいつとる、魔王はまだ死んでおらんぞ？レイから聞いておらんのか？」と眉を潜めて王様が言った。

「…へ〜」

「えええー！！！！！！」と麻衣が叫んだ。

「ううん、お姉ちゃん、うるさい〜」セリーヌちゃんが不満顔で言ってきた。

「あっごめんねセリーヌちゃん」麻衣はセリーヌちゃんに頭を下げる。

「ごめんよ〜セリーヌちゃん」そういいながら、僕は頭をなでる。
…嬉しそうだ。

何かみんなに睨まれてるようなく…

「…それで勇者はどうなったんです？」と麻衣が聞いた。

「うむ…そのな…死んでしまった」と言いにくそうに王様は言った。

「なっ！？そんな…魔王に殺されたのですか？」と僕は言った

「いや、このあいだ魔物に殺された…」と王様は言った。

「えっと…なんですか？最近殺されましたよみたいな感じなのは…」僕は言った。

「うむ、一回目の勇者は一ヶ月前、二回目は五日前だ」きっぱり、はっきり言った。

「……あの洞窟にある魔法陣は最近出来たのですか？」麻衣が言った。

「いや、あれは最近になって、起動しだしてそれを使ったのだ。勇者が来るのをレイだけが感じてな、あそこの洞窟は、レイ意外のものを入れないように結界が張ってある」と王様は言った。

「でも、心配しなくて大丈夫よ。マイちゃんから感じる【魔力】は前の二人と比べ物にならないとレイが言っていたわ」と王妃様が微笑みながら言ってくる。

「うむ、そうだ。お主はただならぬ感じがするからな」と王様は言った。

「はあ〜…そうですね」「麻衣は納得のいかない様子で言っていた。

3話 模擬戦をやるう

三城 麻衣 視点

王様の謁見が終わった。正直ものすごく疲れた。王妃様はご乱心になるわ、王の間にいた。女の人達を虜にするわ、王女様達の心を驚かすわ、など、とんでもないことをお兄ちゃんはやらかし続けた。

このあとは宝物庫で武器を選べるというので、私たちは、宝物庫に案内された。

「ここの中から好きなものを選んでくださいますようお願い申し上げます」とメイドさんが丁寧に答えた。

「おお〜すっごーい！」お兄ちゃんはワクワクしながら言っていた。

…あ〜あ〜メイドさんが愛おしそうに見てますよ〜気づいて〜お兄ちゃん。

まあ、気づくはずもなくお兄ちゃんはサクサク奥に進んでいく。

「あつ、待ってよ〜お兄ちゃん！」私はそう言いながら後に続く。

「う〜ん、ないな〜」

「何を探しているの?」

「えっとね、刀だよ」

「この国にあるのかな？聞いてみれば？」と私は言った。

「うん、そうだね。んじゃ、さっそく！」と言ってピューっと入口まで走って行った。

「相変わらずだなくお兄ちゃん…」私はそう言いながら苦笑いをする。

そう言って私は考え事をする。

私は恐いのだ。魔物というのが…勇者を殺したという魔物が…正直に言っただけ出したい。元の世界に帰りたい。でもそんな我侭は言えない。…私があの時、外にでなければこんなことにはならなかった。…今更ながら後悔する。

お兄ちゃんは、怒ってないのかな？恨んでないのかな？どうなんだろう…

「おい麻衣なんかね。ないらし…麻衣？」なんかお兄ちゃんが真剣な顔で私を見てくる。

「なんで泣いているんだ？…何かされたのか？」お兄ちゃんが周りを警戒しながら言う。

「えっ？泣いてるの？私？」泣いてることに私は今、気がついた。

「いやいや、何でもないよ！心配してくれてありがとねお兄ちゃん」私は笑顔でごまかした。

「…そうか、わかった。でも何かあったらすぐに僕に言ってね」笑顔でお兄ちゃんが言うてきた。

「うん！」私はそう言ってもらうのが嬉しくて元気よく頷いた。

話が戻りどうやら刀はないらしい。…仕方ないよ元気出してお兄ちゃん。

「うーん、そしたらあとはナイフみたいな…あっ！！」お兄ちゃんは突然さげんだ。

「ど、どうしたの」

「そういえばね、僕、ナイフ持ってきてたんだ。」と嬉しそうにお兄ちゃんは言った。

「えっ？…なんで持ってきてるの？」驚いて私は聞く。

「いつも、護身用のために持ってるよ？」当然だよって感じで言うてきた。

「そ、そうなんだ…それで今どこにあるの？」

「部屋の中だよ、それじゃ早速」「あっ…お兄ちゃんそれならあと…行っちゃった」私は苦笑いでそう言った。

「うーんどれにしようかな」「私は迷った。

「やっぱり、持ちやすい片手剣かな」そう言っつて一つの片手剣を手に取る。

全体が白で統一されたものでよくわからないが剣の刃の部分だけ黒

色だった。

「なんか、色に惹かれたしこれでいいか」 適当に決めた。… 適当一番 by お兄ちゃん

「おつ、麻衣それにしたのかい？」とお兄ちゃんが言ってくる。

「あつ、お兄ちゃんナイフあったの？」

「うん、ここに来るときに着ていた服の裏ポケットに」 素晴らしいながらナイフをみせてくる

全体が黒色のサバイバルナイフだった。

「それで本当にいいの？」 私は眉をひそめて言う。

「うん、これ愛着あるしね」 そう言ってお兄ちゃんはナイフを見る。

「ああ、そういえば、シャルが模擬戦を中庭でやるつって言ったよ」 とかるゝく、ゆるゝく言ってきた。

「えっ！？ 模擬戦！？ いきなり！？」 私は突然のことではびっくりする。

「まあ、とにかく中庭に試してみようよ」 お兄ちゃんは私の手を引いて連れ出した。

中庭にメイドさんに案内してもらつと、… なんかたくさん人がいた。

「おお、勇者様のおでした。」

「綺麗〜！かわいい〜！」

「俺と結婚してくれ〜〜〜！！！」

「前の勇者様よりぜんぜんいいわ〜」などと、あちらこちら声がある。…やめてほしい

「麻衣、まっていますました！」とレイが声をかけてくる。

「いったいこれはどういうこと？」わたしは慌てて声をかける。

「何って模擬戦の会場作りですけど…！」

「いや、これはいくらなんでも人がおおすぎ…」と私は呆れながら言う。

「きたか、では麻衣、早速はじめるぞ」とシャルが言うてくる。

「えっ！？あつ…うん」さすがに断れなかった。

シャルは、私から3mくらい離れたところに立った。

「レイ…そういえばシャルはどのくらい強いの？」立ち去ろうとするレイに声をかける。

「えっと…一般の兵士を10人くらい一気に相手できるくらいですけど」と普通に答える。

「…強すぎじゃん」シャルはとんでもない人だった。

「あ！そうそう麻衣ちょっと耳かして〜」とお兄ちゃんが言うてくる。

「何？お兄ちゃん」

「うん、あのねいきなり本気で戦わないほうがいいよ」

「えっ！？何で？」

「セリー又ちゃんを助けたとき、明らかに身体能力が上がっていたんだ。だから、体が慣れてから本気をだしたほうがいいよ」と言ってくる。

「へえ、そうだったんだ」と納得する。…もつと早くそんなこととは言っつてよ。とは言わなかった。お兄ちゃんだから許す。

「なんだ、作戦会議はもういいのか？」シャルがにやつと笑って言うってくる。

「うん、もついいよ」

「では、ルール説明を致します。相手に直接剣を当ててはいけません。それと剣を落とした時点で負けとします。降参はあります」と審判をする人が言った。

「はじめ！」「審判の掛け声と共に二つの剣がぶつかりあった

「うん、本気で来たと思ったから…」と落ち込みながら言う。

「まあ、そんなに落ち込むな。剣の技量が私より上だったら確実に麻衣が勝っていたぞ?」と言ってくれた。

「ありがとうございます。今度よかったら剣を教えてね?」と私は手を差し出す。

「ああ、もちろんだ」シャルも手を出して握手をした。

「…さてと、次はシユウタお前だな」シャルはそう言って真っ直ぐお兄ちゃんを見る。

「えっ?…ぼくもやるの?」めちやくちや嫌そうだ。

「当たり前だ。お前の実力も知っておきたいしな」

「いや、でも…僕はシャルより強いよ」とゆる〜く言ってきた。

「何?それは本気で言っているのか?」と少し怒った感じだ。…どうしよう

「シユウタ…無理です。シャルにはかてませんよ?」とレイが心配そうに見つめる。

「お兄ちゃん…さすがに謝ったほうが…」

「えっ?でも…事実だし…」

「そうか…なら本気の殺りあいしよう」「シャルが我慢の限界と言
う感じだった。

「シャル！？あなたは自分が何を言っているのか分かっているの
ですか！？」レイが驚愕を露にしながら言った。

「ええ無論分かっております。大丈夫です。私は負けません」そう
シャルは言い放った。

「…僕またやらかした？」お兄ちゃんが私に聞いてくる。…うん、
もう今回ばかりはもう知らない。

「はあ…もう本気でやっちゃえば？」

「…わかった」お兄ちゃんが、いつもと違う雰囲気ですべてくる。

私はその瞬間、しまったと思った。

「おにいちゃ」「おい、シャル…本気でやってやるよ」「ッ！」「…もう
遅かった。

「シュウタ？お前どうしたんだ？」「シャルが眉をひそめて言うてく
る。

お兄ちゃんはそれを無視して、「おい、審判さっさと始める」と冷
たく言う。

「し、しかし、…殺しとなると」「オロオロしながら言った。

「聞こえなかったのか？さっさと始める…二度目はねえぞ」冷たく静かに審判を睨む。

「ヒッ！ヒイイイイー！！」そう言いながら審判は逃げ出す。

「ちっ、腰抜けが…まあいい。…いつでもいいぜシャル」

「ほう…それがお前の本性か、だが…武器も何も持たずに本気とは笑わしてくれるー！」そう言って一気にお兄ちゃんに詰め寄る。

しかし、お兄ちゃんは居なかった…いつの間にかシャルを通り過ぎていた。

バタツッと倒れる音がする。…シャルがうつ伏せで倒れていた。

シーン々と中庭が静まり返る。少しして「なんだ？…何が起こった」「どういうこと？」「何をした？」とざわざわとする。

「あ…あれが、…シユウタの本気なのですか？」とレイが呆然としていた。

「えっと…うんそうだよ」

「そ、そうなのですか…しかし恐ろしいですね。シユウタ…」

「嫌いになった？」

「いえ、そんなことはありませんむしろ好きになりました」と私にカミングアウト…モテる男はつらいね」

「ふ〜ん、お兄ちゃんのこと好きなんだ〜？」とレイをからかう
「ツツ！ーい、今の、なしです！な〜し〜！ー！」と顔を真っ赤にし
ながら言ってくる。

「お兄ちゃんレイがね〜、おにいちゃ「何でもありませんよ〜！
！シユウタ〜！！」「ムツ！」

お兄ちゃんはシャルのケガの具合を見ていたみたいで顔をこちらに
向け「何？」といったもの調子で首をかしげていた。

中庭の騒ぎから、数時間たち今は夜…壮絶な一日だったと我ながら
思う。これが毎日続くとなると…死んじやうよ〜
今は、部屋で就寝だけど眠れない…

う〜んどうしよう…あっ！そっだお兄ちゃんと寝よう。私はそう思
って自分の部屋を出てお兄ちゃんの部屋を訪れた。
ノックをしようとしたら部屋の中から声が聞こえてきた。

「シユウタわたしのほうが…いいですよ」

「私の方がいいもん」

「いや〜そんなとこ…ダメです！」

「あつ!?そこもダメ!」

「別に・・・いいじゃん・・・」

「くくくあゝゝ!!ダメゝゝゝ!」

「パンツ!」お、お兄ちゃん!?「素つ頓狂な声をあげて私は扉を開ける。

…そこには三人のネグリジェ姿をした皇女たちがベットのの上にいた。

「…いつたいそこで何をしてたの?」と少し怖い口調で言った。

「いや、これはその…って麻衣も何しに来たんですか?」と慌てながらレイが言ってきた。

「私はお兄ちゃんと一緒に寝ようと思って」

「えっ!? シュウタと…い、一緒に寝るんですか…」と恨めしそうにレイが見てくる。

「なんだい? 眠れないのかい?」とソファでくつろいでいるお兄ちゃんが言ってくる。

「うん、それにお兄ちゃんに話したいこともあるし…」そう言っ
て俯く。

それを察したのかお兄ちゃんは「ごめんね、大事な話があるから今日は帰ってくるかい?」と三人の皇女達に言った。

レイもそれが分かったらしく駄々をこねている妹達を言い聞かせて「それでは、おやすみなさい」と言っ
て出ていった。

「…ねえお兄ちゃん何でレイ達がいたの?」

「んっ？ああ、セリー又ちゃんがここに来たかったらしくてねそれで付き添いでついて来たらしいよ」

「そう…でも何でベッドの上で？」

「なんかここで寝るってセリー又ちゃんが言い出してね。それなら自分たちもここで寝るって言ってね。僕をどこの位置にするかレイ達が揉めていたのさ、僕は別にソファでいいって言ったけど、それも却下されてね」と微笑みながら言ってきた。

私はふーっと息を吐いて

「…お兄ちゃん、私を恨んでない？」 勇気を出して聞いてみた。

「いきなりどうしたんだい？…恨む？何をさ？」

「私がお兄ちゃん外に連れ出したせいで、ここに来んだよ！？」 私は強く言った。

「そんなわけないよ」とソファから立ち上がる。

「でも…でも…！！」

お兄ちゃんはそつと私を抱きしめて、「なんだい？そんなことを気にしていたのかい？優しいね」麻衣は「

私はそこで泣いた。声を出さずに静かに

「いいよ、いっぱい泣きなさい。僕がいつでも麻衣を守るからね」

「おうち…かえ…りた…いよ」

「大丈夫、僕が絶対になんとかするから、…絶対に」お兄ちゃんは
そう言っつて、私をベットまで運んで

「おやすみなさい麻衣、今日はいい夢が見れるよ」そう言っつて微笑
んだ顔を見ながら私は眠りについた。

5話 覚醒

三城 秀太 視点

ここはどこだろう…僕はそう思いながら、なにもない世界にたたずんでいた。

『あなたを待っていましたたよ秀太』
そんな声がきこえてきた。

あなたは誰？

『わたし？わたしは よ』つと黒髪黒目の妖艶な女の人がかたえる。

ごめん名前が聞き取れなかった。もう一回言ってくれろ？

『よ…その様子じゃまだ聞き取れないみたいね』すこし悲しそうに言ってきた。

えっと、ごめん？

『いいえ、あなたが気にすることではないわ』

ここはどこなの？

『ここは、そうね…』【狭間】とでもかたえておくわ』

【狭間】？そこに何で僕がいるの？

『それはね、わたしがここに呼んだから』悲しそうに言ってくる。
どうしてそんなに悲しそうなの？

『…ここからでられないからよ、そしてあなたに力を与えるために呼んだの』

力？

『そう、あの【七柱神】セブンスコクトを倒すための力よ？さっそく与えるわ』

【七柱神】セブンスコクト？何それってうわっ！！

僕の中黒い光が入ってくる。そして…

『使い方は分かったはずだわ、もう時間がないの。ごめんなさい。』
彼女は悲しそうに微笑みながら言った。

待ってまだ話したいことが！

『また、会えるわ心配しないで』

そうして、俺は意識をなくす。

「おに…ちゃん、お兄ちゃん」

誰だ？

「お兄ちゃん！お兄ちゃん朝だよ起きてよ〜！」

「ん…朝か…おはよう麻衣」

「うん、おはよう…お兄ちゃん大丈夫？ずいぶんうなされていたけど…」

「えっ？うなされていた？…そうか、心配してくれてありがとね」「僕はそう言っつて、麻衣の頭を撫でた。」

「えっ…うん、どういたしまして」「そう言っつて、目を細めながら喜んでた。」

「さてと、今日はなににするんだっけ？」

「もう忘れたの？今日は常識のお勉強と魔法の訓練って昨日言われたでしょ…」

「ああ、そうだったね、とりあえず、準備しますか。」

コンコン、「失礼します。朝食の準備ができましたので…」メデイアが入ってきた。

「し、し、失礼しました！！」ボタンツ！！とドアを勢いよく閉めて、メディアは出て行った。

「あゝ！！ちよっと待って色々と間違っているからメディアさん！！」麻衣はなぜかそう叫びながら出て行った。

「いったい、なんなんだ？」理解不能であった。

とりあえず、朝食をすませて、王城の図書室に向かう。…お勉強だ。図書館に着くとメディアとメディアのそっくりさんがいた。

「はじめまして、シユウタ様。わたしは、メディアの姉でマイ様の専属メイドのメープル・クレイアです」ニコニコでふわふわしている感じの人

だ。

「あ、どうも三城 秀太です。秀太でいいですよあと敬語はなしでもいいですよ」

「…ええ、しかし敬語は自然口調なのでお気になさらないでください。よろしくお願いします…シユウタ」

「こちらこそ、よろしく」僕はそう言った。

(どづいつことですのメディア？握手してくれないのですが…)

(そんなはずは…もしかしたらわたしだけ特別かも…)

(それはいけませんね、抜け駆けは許しませんよメディア)

(お姉さま、あきらめてください)

「二人とも！そこまでだよ！」麻衣が怒りながら言う。

「「申し訳ございません」「二人は麻衣に頭を下げる。

二人はなにかこそそ言っていたが…僕は何か間違えたのだろうか。

「二人ともすまない、気を悪くしてしまって…」

「「いや！…ち、違うよ(ます)！！そんな顔しないで(ください)

」「ほとんど揃って言われた。

「そうか…気を使って「お兄ちゃんは黙ってて！！」「ッ！」「…なぜか麻衣に怒られた。

「とりあえず、はやく常識について教えてもらおうね」麻衣は笑顔でいったが…目が笑ってない。

「わかりました、まずは世界の国ついて教えます」メーブルさんはそう言って説明をはじめ。

…うん、なるほどねこの世界は5つの国があるわけで獣人の国、リムール王国、エルフの国、ユイシャル神国、竜人の国、シュバーツ帝国、魔人の国、テリユート魔国

今回戦争の原因になったこのテリユート魔国の魔王を倒せと

…あれ僕が想像していたものと違うようなまあいいか。

「えっと、次は通貨について、はなすね」メディアがそう言って説明をはじめめる。

…お〜け〜理解した。要するに、銅貨100枚で銀貨1枚、銀貨10枚で金貨1枚、金貨10枚で白金貨1枚となり、そして、平民の1ヶ月の収入が1金貨か…うん、分かった。

「まあこのくらいですかね〜後は魔法についてですけど…」ドンッ！と本の山を置く。

「まずは、これをよんでください」メーブルが言った。

「や〜、よかったな麻衣まあ頑張れよ」

「え…お兄ちゃん読まないの!？」悲痛な顔で言うてくる。

…

「今回ばかりは無理でしょ僕これは扱えないし…」

「うっつ…今日中に終わるかな」めっちゃ泣きそうだった。

「とりあえず俺は部屋にもどるよ…頑張ってね」

「あっ！待って〜シユウタ〜！」

僕とメディアは図書室をでた…さあて、もらった力でも試みますかね〜

部屋に着いて、僕はもらった力について考える。

あの黒い光が体に入ってきて、力の使い方や、能力についての知識が頭に流れ込んできた。あの人がくれた力の名前は【終始魔法】^{エンディレス}と言う。

この魔法は対象をなかったことにすることができる。つまり、この場から移動させたり、跡形もなく消しさせることができる。他にはケガをなかったことにするなど応用も利く。

…そして、もうひとつが対象をあつたことにするだ。

これは対象が死んでいたり、この場にいなかったりしても、生き返らせたり、近くに呼び寄せたりする。これも、ケガがあつたことにするなど、こちらも応用も利く。

さらに制限がない…どこでもできるのだ。

この魔法を使えば、瞬間移動ができる。…便利だね

この魔法を使えばあらゆる場所が把握できるのでいけないところがない。しかし、問題が一つ…この異世界から移動できない。何でだろう？

宇宙は行けるみたいだけど…絶対に酸素ないよね

というわけで、魔王をなかったことにしようかな（にやにや）…
いかんいかん思わず顔が

まあ、魔王の顔くらい見てあげようかな。

「メディアア〜」

「はい、何？シユウタ？」どうやら、部屋の掃除をしていたらしい

「ちょっと、散歩してくるね〜」

「私もついていっていいですか」メディアは上目遣いで聞いてきた。

「ごめんね〜散歩ついても用事なんだ〜2時間くらいしたらもどるよ」「とかる〜く嘘をつく

「そうなんですか…」「少し俯いて言ってきた。

「ごめんね〜じゃあさ、今度一緒にどこかに買い物に行く？」

「ほ、ホントですか！ー！無論、雨が降ろうと、嵐が来ようとも絶対いきますよ！ー！ヤッターー！ー！」なんかかなり喜ばれた。…なんか高いの買わ

されるのかな〜。…ぶるぶる

そして、喜んでいるメディアから見えない位置で瞬間移動を使った。
…さあはじめようか魔王狩りを

三城 麻衣 視点

あゝ、つかれるなぐでも、色々と分かったことがある。

魔法は、【火】【水】【風】【雷】【光】【闇】で構成されている。これを操るには精霊と契約を交わすか、魔法を自分で作るしかない。精霊で契約するには、自分の【魔力】を外に放出して、精霊にあたえる。気に入られたら、精霊が契約に応じてくれる。契約はどこでもできるら

しい。ちなみに、メーブルは【火】と契約をしているらしい
…まだこの本半分しか読んでないけど分かった。

「実際にやってみていいかな？」私はメーブルに聞いた。

「最初に精霊と契約をかわさないダメだと思えますけど…」

「精霊ってどこにもいるからここでもいいよね？」

「まあ、そうですが…できるんですか？」怪訝な表情で聞いてくる。

「たぶん…え〜と、不安だからやっぱり中庭に行こう」そう言って

中庭に移動をした。

「んじゃ、やってみますか」私はそう言って、【魔力】を放出するイメージを作る。

「す、すごいですわ…【魔力】が相当量でているのが肉眼でもわかります!!」メーブルは興奮しながら言った。

精霊？が私の目ではつきりとみえた…【光】？かな

私は光っている物体をじゅっと見つめる。そしたら、急に私の中に入った。

「わわ、は、入ってきたよ!!」私はかなり慌てた。

「えっ!? 精霊が見えるんですか！私は見たことなんてありませんわ！」メーブルは驚きながら言った。

「いや、なんか体の中に入っていた…」

「とりあえず魔法を使ってみたらどうですか？」メーブルはそう言っ
つて木の方を指す。

「よし、いくよ！」ファイアランス【火槍】「私が出した数本の火の槍は数本の木々に刺さった瞬間、一瞬にして炭化した。

「…短詠唱でしかも創造魔法に匹敵するほどの威力…規格外ですね麻衣…」驚きを通り越して呆れていた。

「いや、ちょっとやりすぎちゃったね、ごめんね」

「これは、育てがいがありますね、これからもがんばりましょ麻衣」
「メイプルはそう言ってる私に言ったが、目が笑ってないのはなぜ？」

この後、麻衣は宮廷魔法師に色々聞かれ揉みくちゃにされた。
なんで遠くから笑ってるの？助けてよメイプル…

やっと、宮廷魔法師に解放されたときは…もう夕方だった。…そんなに珍しいのかな

ここに来て二日目だ、つと部屋のベッドの上でぼーっと思っ
ると

「麻衣！シュウタ知らない？」なんかメディアが慌てているよう
だった。

「メディア、ノックはきちんとしないといけないでしょ？」と
メイプルが注意をする。

「お説教は後で聞きます。お姉さま。それよりもシユウタが…!!」

「お兄ちゃんがどうかしたの〜?」私は疲れている体を無理やり起こした。

「朝からずっと帰ってきてないの。2時間くらいで帰って来ると言ったのにまだ…!!」悲痛な顔で言ってきた。

「うそ!?…お兄ちゃん言ったことは大概守るのに…」

今は夕方だから…8時間くらい帰ってきてない…何か巻き込まれたのだろうか

「お兄ちゃんは何かに何か言っていなかった?」

「分かりません…2時間でもどることに意外は…」メディアはしゅんつとうなだれた。

「メディアこのことは、王様たちに報告しましょう!」メーブルはそう言って落ち込むメディアを引っ張って颯爽と出て行った。

お兄ちゃん絶対に無事でいてね…もしもなんて絶対私は嫌だよ!!
私はそう思いながら、部屋を急いで出た。

5話 覚醒（後書き）

9 / 2 2 火の槍 火槍に変更しました

6話 魔王狩り(前書き)

お気に入りにしてくださった方、評価をしてくださった方
本当にありがとうございます。これを励みに頑張りたいと思います。

6話 魔王狩り

三城 秀太 視点

「よつと」

僕は魔王城の前に降り立った。なぜ魔王城の前だつて？それはね、魔王城の構造が把握できなかったんだ。

でも、今はそのことは正直どうでもいいです。なんか居るんだよね。

「ガルアアア！！」

犬？いや、これは狼だね。しかも真っ白なんだよ。∴全長100mくらいかな？

「ガルアアア！！」あつ、突撃してきた。僕は横によける。狼が正面を向いたので、あれを使う。

キツ！！

∴睨みつけました

狼は急に止まり、僕の前でひれ伏す。∴震えてるよ。

「大丈夫、君には何もしないよ∴その首輪は拘束具みたいだから外

すね」僕は優しく声をかけた。

【その首輪をなかったことにする】

狼の首輪が跡形もなく消え去った。

「さあ、君は自由だ。どこでも好きなところへお行き」

「ガウツ」なぜか狼は僕の前から動かない…もしかして

「一緒に行きたいの？」

「ガウ」狼は首を縦に動かす。

「うん、別に僕は構わないけど、その大きさじゃ不便だな」

「ガウガウ！」そう言って狼はみるみる小さくなって、50cm位になった。

「おお！それなら、持ち運びができるよ。そうだ、ここにおいで」

僕はそう言って胸の中に入るように促す。

狼はトテトテ歩いてきて、僕の胸の中に入る。首だけをちょこんと出しているのが可愛い。そして、毛がふわふわのもふもふだ。

最高すぎて眠く…いかにいかに、目的を果たさなきゃ。

さてと、…どうやら魔王城は結界が張られている感じだった。…だから構造把握できなかった訳ね。この魔法、意外に欠点あるんだな

」。

邪魔なんで消しますか。

【その結界をなかったことにする】

結界は壊れる音も立てず消え去った。

「さて、魔王狩りはじめますか。」

「ガウガウ！」

そして僕は瞬間移動を使った。

「なにものだ、そのアリよ」静かに響きわたる声が聞こえた。

僕は周りをゆっくり見渡す。正面に王座に座る魔王が居て両脇に……
女の人を抱えている。うん、ハーレム
そして横には側近が居て、王座に続く道は、兵士がずらりと並んで
いる。

「聞こえなかったのか、人間のアリよ。貴様はなにものだと聞いている」魔王が言ってきた。

「ああ、それ僕のこと？」

「貴様以外に誰がいると言うのだ？人間のアリよ」魔王は僕を見下してくる。…もう消そうかな

「人間なのか、アリなのかはっきりしてほしいんだけど…」もう少し遊ぶことにした。

「ならば、アリよ貴様はどうやってここに来た？」

「えっ？僕がアリに見えるの？…医者を紹介しようか？」心配なので聞いてみる。

「…馬鹿にしてるのか貴様は！！」

「馬鹿にはしてないけど（嘘）」

「馬鹿にしてるではないか！…こいつを殺せ！！」魔王が兵士たちに指示を出す。

【お前の存在をなかったことにする】

僕は兵士達が襲いかかる前に魔王を消した。…いや、あつけない。

「魔王様？」側近が訳がわからないという感じだった。

「あなたは一体何をしたんです？…あれ落ち着いてる？」

「いや、魔王をこの世から消しただけだけど…」

「「「ワアアアアーーーー！！！！」」」

城中から大歓声があがる。…えっ？へっ…？

「あ、ありがとうございます。あなたは私たちの救世主です！」「側近さんになんか感謝された。

「い、いや…よかったね」「…なんで？

「はい！これでこの国にも平和が訪れます。おい、お前たち宴の準備だ」

「「「はい！！」」」

「えっと、僕はこれで…」「そう言って、城を出ようとするが…あれ？使えない？

…瞬間移動が使えなかった。どういうことだ？。…あれ、なんか暗く…

僕はそこから覚えていない。

ここはまたあそこ？

僕は周りを見渡す…いた。黒髪黒目の女の人

『お久しぶり、でいいのかしら？』女の方はくすくす笑いながら言うてくる。

いやそうでもないと思うけど…

『あらそう、あなたには言わなくてはいけませんね』唐突に言うてくる。

何をさ？

『あなたにあげた魔法はすごく魔力を消費するということよ』

今更ですか？遅いですよ

『あら？怒らないの』女の方は不思議そうな顔で聞いてくる。

あの時は時間がなかったって言ってたし、この魔法を使い切れてない僕も悪いし…

『あなた優しいのね。ホントあなたでよかったわ』嬉しそうに言うてくる。

僕でよかった？どういふこと？

『それはまた今度ね』僕の頬に手で触れてくる…暖かい

『それじゃあ、またね。シユウタ』寂しそうにこちらを見ていた。

そこで僕は意識を失った。

目が覚めた。ここはどこだろう？

「あつ目が覚めましたか？」浅黒い肌の綺麗な顔立ちの少女がそこに居た。

「…あなたは誰？」

「申し遅れました。私はテリユート魔国王女、ナーレス＝テリユートと申します。英雄王」…はい？

「英雄王？僕が？」

「はい！そうですわ、あなたはこの国を救ってくれた英雄ですわ」嬉しそうに言ってくる。

話を聞いてみると、どうやらナーレスのお父さんを僕が倒した魔王が殺したらしい。そこで絶対的な力をもってこの国を支配していた

らしい。

魔王は戦争を起こしたり、国民に重い税金を課せたりなど、酷いことをやっていたらしい。…まったく迷惑な野郎だ。

「そ、そうなんだ。あつ！僕の中にいた狼は？」

「はい、それならあそこに」彼女が指差す先にいた。…すやすや寝ていたよ。可愛いよ〜

「あの子は、あなたの傍にずっといたんですよ？」

「ずっと？…そういえば僕が倒れてどのくらいたつの？」

「え〜と二日ですね」

…「やばいやばいやばい！！麻衣が皆が絶対に心配してる！

「えっと、一旦国に帰っていいかな？」

「えっ！？かえられるんですか？まだ何もお礼をしていませんのに…」寂しそうな表情で言ってくる。

「また来るからさ、待っていてよ。お礼はその時でもいいでしょ？」

「…わかりました。お急ぎのようですし…でも絶対にまた来てくださいよ」上目遣いで言ってくる。

「もちろんだよ。また来るね」

僕は寝ている狼…もうシロでいいや、シロを連れて魔王城を後にした。

自分の部屋に着いた。ああ〜いいね〜このベットも。僕はシロをおろして、ベットでまた寝ようよ…

「お兄ちゃん？どこに行っていたの？」

そこには笑顔で立っている麻衣がいました。…目が笑ってないよ

「さ、散歩？かな」僕はおそろおそろ言った。

「そうか〜へえ〜二日間も散歩するんだ〜そんな散歩があるんだ〜知らなかったな〜」ニコニコ

「い、いや〜こんなに長くなるなんて思わなかったな〜」

「お兄ちゃんのバカー…！！！！」麻衣はそう言って僕に殴りかかる。

「ぐほっ…！！」素直に拳を受け取りました。…うん、ごめん悪かった。

「うぐ、ひぐっ…！！うっうっ誘拐されたと思ってたよ〜」麻衣はそう言って僕に抱きついた。

7話 騒がしい日常

三城 秀太 視点

魔王倒して、あれから五日がたった。その間僕は、例のボコボコ事件により寝込んでいました。

…二日間、目を覚ましませんでした。

腫れは、宮廷魔法師による治療で治ったらしいけど…今、僕は監禁生活を送っている。…なんで？

正直かなり暇です。抜け出したいけど…無理だよ。常時監視がついてまわる。…さすがに部屋の中まではついてこないけど

なので、自分が使っている。【終始魔法】エンディレスについて考えたいと思う。

この間、魔王の城の位置を把握するとき、城の位置だけ把握しようとした。要するに他の情報は入ってこなかった。

全体を把握できると言ったが、実際どこまで正確に把握できるかわからない。

なので、今から試してみたいと思います。

「よっ」「スーッと頭の中に情報が入ってくる。部屋の外にいる見張りの兵士、メイドさんの数、城の構造、城の外の様子、城下町の様…

「ぐあー!!」僕はあまりの頭の痛さに声を出した。

パンツ！！」「どうかなさいましたか！？」兵士たちが慌てて部屋に入ってくる。

「いや、大丈夫だよ何でもないよ」

「そ、そうですか、顔色が悪いですが…本当に…」

「いや、大丈夫だよ。心配してくれてありがとうね」

「ハッ！それでは、失礼いたします」

兵士たちが出て行った後、シロが飛び出してきて僕を心配そうに見つめてきた。

「ありがとねシロ」僕はそう言ってシロの頭を撫でてあげる。

シロは「きゅん」と言いながら、喜んでいた。

…魔法を使った結果だけど、城下町に入った辺りから頭が痛くなつた。ここからの距離は300mだ。

たぶん予想だけど、人間の脳の許容量を超えかけたから、拒絶反応を示したんだと思う。

「なるほどね」僕はそう言いながらベットに倒れこむ。…便利な魔法はリスクも高いね。

僕には【魔力】がないと言われていたが、あの女の人はある？みたいな口調で話していた。

何が正しくて、何が間違っているのか…分からない、判断材料が足りなさすぎる。

…当面の目標はもう決まっている。元の世界に帰ること、そのためにもまずは情報収集かな…今は無理か

そう言ってまた眠りにつく。

三城 麻衣 視点

お兄ちゃんが帰ってきて、五日がたったけど、お兄ちゃんが気絶した後が大変だった。

お兄ちゃんがボコボコにされて、倒れたあとベットのしたから白色の小さな狼がでてきた。

狼が出てきた後、みんなの顔が引き攣った。

「こ、これは、【白銀狼】シルバールフではありませんか!」レイが驚いて言ってきた。

「【白銀狼】?何それ?」

「こ、この狼は魔獣の中でもトップクラスに入る魔獣なんですよ!全長は100mにもなるんですよ!」

「でも、なんでお兄ちゃんに懐いているんだろう?」私はかわいい威嚇を続けている。【白銀狼】に触ろうとする。

「い、いけませんマイ!この子がいつ大きくなるかわからないですよ!」メープルがとめようと私の前に割り込む。

「えっ?かわいいからいいでしょ?別に」私はそれでも触ろうとするが、やはりとめられる。

「とりあえず、シユウタが起きなければ、ことが進みませんね」シヤルがそう言って、宮廷魔法師を呼びに部屋を出て行った。

宮廷魔法師が来たが:【白銀狼】がお兄ちゃんから退こうとしなかったため、治療が行えずにいた。

私は痺れを切らして、【白銀狼】に近づいて

「あなたは、お兄ちゃんのお友達?」私は尋ねた。

「この人は私の恩人だよ」

そんな声が私の頭の中に響いた。

「えっ！？しゃべれるのシロちゃん！？」私は体の特徴から思わず言ってしまった。

『えっ？なんで私の名前を知ってるの？』

「えっ？もしかしてシロが名前なの？」

『うん、この人が名前をつけてくれたの！』シロは尻尾をパタパタさせながら喜んでいた。

「へえ〜お兄ちゃんが名づけたんだ〜」私は感心して頷いていると、「マイお前は誰に話しているんだ？」シャルが怪訝な表情で聞いてくる。

「えっと…この子と話しているだけだけど…」

『他の人達にはきこえないよ』

「えっ？何で？」

『あなたは【魔力】が私の声が聞こえるレベルまで達しているけど、他の人達はダメみたいね〜』

「そういえば、自己紹介がまだだったね。私は三城 麻衣、麻衣でいいよ」

『よろしくねマイ』シロはそう言って、私に抱きついた。…ふわふわのもふもふだった。

みんなはその様子を見てびっくりしていたけど、宮廷魔法師の人はホツとした様子で、お兄ちゃんの治療を始めた。

傷は癒えたけど、意識はまだ回復していなかった。：疲労が溜まっていたのだろうとのこと。

みんなはやりすぎたかもしれないと、反省していた。

そんなこんなでお兄ちゃんが目が覚めて、事情を聞いたが、怪我をしていたので手当てをしてあげただけつと言った。

みんなはそれを疑わなかったけど、私にはお兄ちゃんが嘘をついているしか思えなかった。：妹何年やってると思ってるの？

こんな感じで大変だったけど、お兄ちゃんは何を隠しているんだろう？直接聞いてもダメだろうし、どうしようっと考えていてここ数日悩んでいる。：はやく強くなって魔王を倒さなきゃ。

だが、状況は一変する。

お兄ちゃんが帰ってきて六日の朝、城中なんだか慌ただしかった。何かあったの？とメーブルに聞いてみる。

「あ、それがですね。テリユート魔国を名乗る使いが国にきたんですよ」

「えっ！？魔王がいる人の国がどうして？」

「…どうやら、魔王が何者かに殺されたらしんです。詳しい話は私には分かりませんが…」

「…うそ、じゃあ何のために私達はここによばれたのよ…」

「…申し訳ございませんマイ」悲しそうにメーブルが言ってきた

「いや、ごめんね。魔王が倒されたのは嬉しいよね」

「それと、王様が王の間に来てほしいとのことなんです…」

「なんで？」

「マイとシユウタに聞きたいことがあるとか」

私はなんだろう？と思いつつ、王の間に足を運んだ。

三城 秀太 視点

「おお、きたか二人とも」王様はそう言ってきた。

「何か用ですか？」

「うむ、この者が黒髪黒目の人はいないかと聞いてきたからの」
よく見てみたらいつぞやの側近さんだった。

「あ、あなたは英雄様ではありませんか？」…爆弾が投下されました。

「……はっ？」「……みんなが声をあげる。

僕はすぐさま、側近さんの近くに行き、耳うちをする。

（僕が倒したことは黙っていてくれないかな）

（どうしてです？）

（僕的能力はみんなには内緒なんだよ）

（わかりました。それでは、魔王を倒した記念の招待状なんです）

（わかった、必ず行くからこの場をなんとか誤魔化してほしい）

（お安い御用です）そう言って側近さんは立ち上がる。

「申し訳ございません。どうやらこの人ではありませんでした」

「うむ、そうであったか。」苦勞であった」

「ハッ！それでは、記念式典の件どうぞよろしくお願いいたします」
そう言つて側近さんは出て行った。

「ねえ、お兄ちゃん一体あの人と何を話していたの？」麻衣が疑いの視線を向けてきた。

「いや、ただね誤解を解いただけだよ」

「誤解？」

「うん、なんか僕が魔王を倒したんじゃないかって」

「えっ！？お兄ちゃん魔王をたおしたの！？」麻衣が大声で言ったため、大勢の視線が刺さる。

「あはは、違うよ麻衣、いいかい、ここから魔王の城までいったい何日かかると思ふんだい？」

「え〜と急いで行つて六日、普通に言つて八日くらいだよね？」

「僕が居なかつたのはたったの二日、物理的に考えて無理でしょ？」

「う〜ん確かにそうだね〜」…なんとか納得してくれたようだ。

「だから、僕は違いますよ〜って言つてあげたんだよ」

「そうだったんだ」

どうやら、今の説明でみんなも納得してくれたらしい。…良かった

こうして、なんとか誤魔化すことができた。そして次からは変装してから行動しようとして心に誓った。

7話 騒がしい日常（後書き）

今回は日常を描いただけです。退屈だったでしょうか？

8話 契約と能力

三城 秀太 視点

王の間での騒動が終わり、僕は今、中庭にいる。なぜかって？それはシロと契約するからです。

唐突すぎるのも困ると思うので説明すると、契約をしないと本来の力の半分も出せないらしい。

魔獣たちのほとんどは、契約をして主人と力を共有し合うとのことなので、力を取り戻して、恩返しをしたいとシロは言っていたらしい。あつ、ついでに麻衣に通訳してわかったことだよ。

契約すると言葉が通じ合うことだから、【魔力】なくてもいいらしい。

「じゃあ、契約を始めようか」僕はそう言って、指を軽く切って血をシロに飲ませる。

ピカアーっとシロの体が光ってすぐにおさまった。…どうやら契約完了のようだった。

『私の声わかる？』シロが言ってきた。

「ああ、分かるよシロていうかメスだったんだね」

『レディに対してそれは失礼なんじゃない?』

「ごめんよ」僕はそう言っつてシロを撫でてやった。

『くすぐつたいよ』そう言いながらも身を寄せてくる。

「どうやら、終わったみたいですね。シロが…とても羨ましいです」
レイがそう言っつてきた。

「やっぱり、かわいいよなシロは」

『ご主人、定位置に入りたいたんだが』シロがそう言っつてきたので胸の中に入れる。

するとレイが「な、なんてうらやま…じゃなくて、なんでそこに入れているんですか!!」

「だつて、ここがシロの定位置だし…」

『ご主人、なぜ気づかない?』シロがおかしなことを言っつてくる。

「うん?何に気づくかはいまいち分からないが、とりあえず部屋に戻ろうか」

『やれやれ、今度のご主人は大変だな』

シロはそんなことを言っつていたが僕は気にせず部屋に戻つた。

監視何時になったらはずれるのかな

部屋に着いて、どうやって抜け出そうか考えていたが…すぐに思いついた。

「魔法を使って、変装すればいいか」そう言って早速取り掛かる。

【僕に金髪碧眼があったことにする】

僕は鏡の前に行くと…イケメンがそこにいました。

「えっ…これ僕!？」

『ご主人なかなかだぞ?もともと容姿がいいからな』

「うん、ありがとう?」シロはよく分からないが褒めてくれたのだろっ

「よし、ではでかけようかな」

『ご主人私は連れていってくれないのか?』シロは寂しそうな表情で言うてくる。

「そうだな…そのままの姿じゃまずいから…そうだシロを人間にすればいいのか」

【シロを人間であったことにする】

シロはみるみる人の姿になった。銀色の瞳に腰まである髪、整った顔立ちの女の子になった。

「ではご主人早速行くぞ」

「いやいや、待とうよその姿で外に出たらいくらなんでもまずいよ
シロは裸だったのだ。それはさすがにダメだよね。」

僕は魔法でワンピース、と男用の服をだした。ついでに僕の方も出した。

「ご主人ゴワゴワする、脱ぎたい」そう言って脱ごうとする

「いや、脱いだら城下町につれていけないよ？」

「…わかった我慢する」

「では、城下町に出発！」

僕とシロは城下町に向かった。

城下町についた。人目のつかないところに瞬間移動したけど…女の子が三人組の男の人に絡まれていました。

「いいじゃねえか、オレらといいことして遊ぼうぜ」
「下品な笑みを浮かべていう。」

「や、やめてください」

「いいじゃんすこしグベバツッ!!」僕はとりあえず殴った。…理由はキモイから

「な、なんだこのガキは!!ぶつ殺してやる」二人目の男…いや、変態二号は僕に殴りかかってくる。

しかし、シロが殴ってくる手を利用してそのまま、捻って手首を折った。ベキッ!って音が路地裏に響き。

「ギャー!!腕、俺のうでゲブツ!」シロは男の腹を蹴り上げた

…7m位飛んでそのままグシャッといって地面に落ちてきた。…シロ容赦ないね

変態二号は逃げようとしたが、シロに捕まり、ボコボコにされた。…「」愁傷さまです。

「大丈夫?」僕はうずくまっている女の子に優しく声をかけた。

「あ、はい私は大丈夫ですけど…そのありがとございました」

可愛らしい女の子でした。…この世界はかわいい子しかいないのか

な〜？

「あ、あのお礼がしたいんですけど…」女の子は遠慮気味に言う。

「え〜っと城下町を案内してほしいんですけどいいかな？え〜と」

「あ、申し遅れました。私はティア＝トーエルと申します。ティアで構いません」

「僕はシュウ、シュウでいいよ」

「私はシロだ私もシロで構わない」

「よ、よろしくお願いします。シュウ、シロ」「ティアはペコリと一礼する。

「よろしくねティア」

「よろしく頼むティア」

僕たちは案内をもらうことになった。

「とりあえず、道具屋から行ってみます？私の父が経営しているんですよ」

「そうなのかい？じゃあぜひお願いしますよ」

「はい、わかりました」ティアは嬉しそうに言った。

道具屋について店に入ると、大柄の男の人がいた。

「おお、ティアおかえり、その人たちはお客さんかい？」

「はい、そうです。男の人に絡まれているところを、シユウとシロに助けてもらったんです」

「そうだったのか！ありがとうな娘を助けてもらって！」

「いえ、こちらこそ娘さんに町を案内してもらったわけですし……」

「ガツハハ！若者が謙遜するもんじゃないぞ？今日は娘が助けてもらったんだサービスするよ」

「ありがとうございますえ」と

「ガイだ。よろしくなボウズ、嬢ちゃん」

「はい、よろしく願います」

「よろしく頼む」

僕は並んでいる商品を見た…やくそう？

「これ一ついいですか？」

「やくそう？まあいいがそんなのでいいのか？」

「ええ、これがいいです！」

「一つ銅貨だがもう一つオマケでつけてやる」

「ありがとうございます」

僕はさっそく、やくそくを食べた。

「「えっ!？」」「三人に何故か驚かれた。

「マ、マズイ…」味は苦くて美味しくなかった

「ボ、ボウズ何をしているんだ」

「シュ、シュウどうしたんです!？」

「ご主人、頭を打ったのか？」

三者三様の言葉を並べた。：何か間違えた？

「食べたら、回復するんじゃないの？」

「ボウズ、やくそくは、すりつぶして傷口に塗るもんだ。一体そんな知識どこで仕入れた？」

「…自己流？」

みんなに笑われた…何で？

三城 麻衣 視点

ここに、来てからお兄ちゃんはずくと忙しいそう。城内を歩き回ってメイドさんたちに食べ物もらったり、騎士さんたちの指導をしたり、お偉いさんたちの悪行を摘発したりなど、この国にとってなくてはならない存在になったりしてる。∴前半は置いといて

とにかく、私の相手をしてくれない。∴寂しい

お兄ちゃんに会いたいな〜とっていると、私の目の前に金髪碧眼の王子様？がいろんな食べ物を抱えていた。

「誰？不審者？」私は警戒体勢をとる。

「ひどいな〜実の兄に対してそれはないよ〜」

「へえ！？お兄ちゃん！？」私はかなり慌てた。目の前のイケメンが∴いや、元の容姿から納得した。

「これ、おいしいよ〜」そう言いながら私に食べ物を差し出す。

「ありがとう∴じゃなくて、なんでお兄ちゃんがここにいるの！？」

「麻衣の声が聞こえた〜っと思ったらここにいた」

「…私そういえば、お兄ちゃんがここに居ればな〜って思ってた」

「…ねえ、麻衣今ほしいものない？」突然聞いてきた。

「えっ？ほしいもの？…そうだな〜ここに来てお風呂入ってないからお風呂に入りたい！」

「この国は湯船につかると言う習慣がなく、湯浴みしかない。

「それを自分の中で創造してみて〜」

「えっ？うん」

私は言われるままに、広〜い湯船を創造した…えっ！？

自分の目の前に広〜い湯船が広がっていた。…どういうこと？

「たぶん、麻衣の魔法は創造するだけで、なんでもできるんじゃない？」
「い？」

「…すごいね」それしか言葉が出なかった。

「とりあえず、入ったら？」

「いや、丸見えだからね！？ここ中庭だよ！？」

「作ればいいと思うけど…」

「あっ！そうか」

私は創造して大浴場みたいな家を作りました。

「男湯、女湯も作っておいたから」私がそういってお兄ちゃんはとも喜んでいた。

「マイ〜！これはいったいなんですか？」レイが中庭に走ってきた。

「お風呂だよ。入ってみれば分かるよ。一緒に入る？」

「ええ、ぜひ。マイその隣のお方は？」

「お兄ちゃんだけど？」

「えっ！？マイにはもう一人お兄ちゃんがいたんですか！？」

「レイ、僕だよ。シュウタだよ。やっぱり、こんなイケメンだったら、わからないよね」お兄ちゃんは落ち込みながら言う。

「いえいえ！！ち、違っんですよ？かつこよすぎて、じゃなくて、ああ、もう」レイが壊れていた。

「とりあえず、入ろうよ？ね？」私は悪い雰囲気壊すため促した。

「うん、そうだね。ってあっ！！シロを忘れてた！！」お兄ちゃんはそう言って城の中に走っていった。

…こうして、私は自分の魔法について分かった。…【創造魔法】^{クレイェイト}と呼ぶことにした。

浴場は人気があがり、美肌効果があるとのことで、女性達には大人

気であったため、もう二、三個作った。

あのあと、お兄ちゃんが頭にシロに噛み付かれながら戻ってきたのはどうしてだろう？

8話 契約と能力（後書き）

妹はチートを手に入れました。それに気付くお兄ちゃんは何者？

9話 パーティー（前書き）

累計PV 11939 ユニーク 2137人 ありがとうございます。

これを糧に精進していきたいとおもいます。

ちなみに前回シロちゃんの口調が、契約の後変わっているの気付きました？

9話 パーティー

三城 秀太

パーティーそれは、楽しめるのもの。

パーティーそれは、お偉いさんたちの顔のうかがいあい。

パーティーそれは、人々の交流をはかり、出会いの場。

「お兄ちゃん準備できた？」

「できてるよ。それじゃ、行こうか」

麻衣は白のドレスに包まれて、綺麗な清楚のイメージを出す。うん
うん、さすが麻衣。

僕？黒のタキシードだけど？説明いらないでしょ

麻衣をエスコートしながら、会場に入る。

「ミシロ シュウタ殿 ミシロ マイ殿、お入りになられます」執
事さんの声で扉が開いて、中に入る。

「綺麗く天使みたい」

「女神様みたい」

「素敵く嫉妬するわ」

会場が麻衣を見てざわつく。男の人たちは口をポカンっと開けたまま立っていた。

ダンスのお誘い多そうだな。僕は苦笑いしながらその様子を見ていた。

「これは、これはシユウタ殿お久しぶりです。マイ殿もご機嫌麗しゆう」側近さんが話しかけてきた。

「お久しぶりです。え」と

「これは失礼いたしました。アーサー＝ノーウェルと申します。どうぞアーサーとお呼びください」

僕たちはアーサーとの挨拶を済ませ麻衣をレイのところに行くように促し。本題に入る。

「誰にも言っていないよね？」

「もちろんですよ。そんなことを言ってしまうとは立場が危ないでしょう？」

「僕だけでなく、他の人達に被害がおよぶのは嫌だからね」

「分かっておりますとも」

「あなた意外に顔がわかる人は？」

「私とナーレス様だけです。大丈夫ですナーレス様には見ついても声に出さないように言っておりますので」

「あゝ、僕が倒れて目が覚めたときにいた王女様のことね」

「そうでございます。あの、マイ様がお困りの様子ですが…」

麻衣の方を見ると男たちに囲まれていた。…さあ狩りの時間だ

「失礼します」僕はそう言って麻衣のもとに行き、騎士の務めを果たした。…殴つてないよ？

しばらくしたら、ナーレスが出てきて出てきてみんなに向けて挨拶をする。

「お集まりのみなさん、今日はこのような会に来ていただき誠にありがとうございます。本日は魔王を倒されたシュウタ様が来ておられます」

「がはっごほっ！」喉にジュースを詰まらせた。

会場がざわつく。アーサーを見たら、啞然としていて、放心状態だった。

「今回、魔王を倒されたシュウタ様に乾杯」そう言って締めくくる。

「ちょっと、具合が悪くなったから、席を…はずせませんよね」麻衣とレイの形相に何も言えなくなった。

「お兄ちゃん、ぜんぶ話そうか」麻衣がにこにこで言うてくる。
…あれ、死亡フラグ？

「シユウタ？全部話したほうが身のためですわよ？」レイもにこにこで言うてくる。…目笑ってないよ

「何を言ってるんだい？話すことなんて何もないよ」無駄な抵抗をこころみる。

「お兄ちゃん？私の魔法どんなのか知ってるよね？ほとんど何でもできるんだよ？」

「そ、そうかいでも」【**自白**】「ああ、実は魔王倒したの僕なんだよね」途中、麻衣に魔法をかけられた。

「どうやって、倒したの」

「何いつてるんだい？た」【**自白**】「僕の【**終始魔法**】エンテイレスでだよ」…もう諦めた。

「それは、一体どんなのです」レイが聞いてくる。

「ここで、話すのはマズイ、あと、麻衣ここで魔法つかっちゃダメでしょ？」

「しめんなさい」

…とりあえず、いろいろな人が麻衣の魔法を聞いたみたいだし、俺たちに関する記憶を消すか。

【スフィード王国以外の人達に僕たち二人に関する記憶を消す】

一見変わってないように見えるが、これで、魔王が僕が倒したこと、麻衣の魔法のことも消えただろう。

「お兄ちゃん、何をしたの？」

「とりあえず、二人とも僕について来て」

会場を出るとシャルがいた。

「シャルこんなところで何をしているんだい？」

「いや、そ、その、何でもない」

シャルは赤色のドレスに包まれていて、大人の女性を存分にだしていた。

「綺麗だね〜中に入ったら誰もが話しかけてくると思うよ？」

「そ、そうか！ありがとうシュウタ」シャルは顔を赤くしながらも喜んでいた。

「そつだ、シャルにも話したほうがいいね。ついて来て」

三城 麻衣 視点

「お兄ちゃん、で【終始魔法】^{エンディレス}って何？」

お兄ちゃんが淡々と説明をして、それを聞いた私たちは青ざめた。

「それでは、シュウタは国を消せるんですか！？」レイが驚愕しながら言ってくる。

「消せるって言う確証があるだけで、僕の【魔力】が持つかかわからないよ」

「お兄ちゃんは【魔力】なかったんじゃないの？」

「…僕の中に何かがあるんだけど、それが何か分からないから【魔力】って仮定してる」

「シュウタ、お前はさつき会場にいる人達の記憶を消したが良かったのか？」シャルが心配そうに言う。

「僕だけが狙われるのは別に構わないけど、僕のせいでの人は巻き込めないよ」

「しかし、魔王を倒したことも、思い出もなくなるんだぞ？」

「問題ないよ。所詮、僕に関しての記憶だしどうでもいいと思うけど？間違ってた？」

「…なっ！？」「レイとシャルは驚いた。」

「心配しなくていいよ。麻衣だけに危害を加えなければそんなことしないよ」

またか〜お兄ちゃんまだダメなんだね。

「シユウタは…他の人達にとって、大切な人かもしれないよ!？」
レイが叫ぶ。

「…麻衣かレイどっちかを選ばないとどちらかが死ぬ。というのがあつたでしょう」

「お兄ちゃんもういいよ。そこまで」私はそこで止めた。

「麻衣?どうしたんだい?」不思議そうにこちらをみってくる。

「レイ、お兄ちゃんはそんな状況に絶対にさせないし、ならないよ」
泣きそうなレイにそう言う。

「たとえそんな状況になつたとしても、絶対最後の最後まで二人が助かる方法を探すと思うよ」

レイはその場から、走り去っていった。

「レイ様お待ちください」シャルもそう言いながら、レイに続いた。

そして、お兄ちゃんと二人つきりになった。

「どうして、あんな突き放すこと言ったの?」

「…自分との距離を縮めてくる前に突き放したほうが楽かと…」

「お兄ちゃんのバカ！！なんで気づかないの？」

「気づかない？何を言ってるんだい？」本当に気づいてない様子だった。

「…レイに聞いてみたら？お兄ちゃんのことをどう思っているか？」

「レイに？僕のこと？」

「そう、聞いてきて今から！」そう言っただけはお兄ちゃんの背中を押す。

三城 秀太 視点

レイに聞けって言われたけど、どこにいるんだろう？会場に再び入り、レイを探す。

「いた」レイは外のテラスで空を見上げていた。

「レイちょっと話したいことがあるんだけど」

「シユウタさっきあのようなことを言って、よくレイ様の前に現れたな」シャルは静かに怒っていた。

「シャル、席をはずしてもらえませんか？」レイが言う。

「しかし…わかりました」シャルはそう言って出て行った。

「話ってなんですか？」…ちょっと怒ってる？

「さっきはごめん、言いすぎたよ」僕はそう言って頭を下げる。

「いえ、もういいですわ」レイはそう言ってこちらを向く。

「えっと、そのレイは僕のことどう思ってる？」

「えっ！？へっ！？いや、その…」かなりうろたえていた。

「やっぱり、嫌いなのかい？」

僕がそういうとレイは抱きついてきた。

「そんなはずがありません。私はシユウタのことは好きですよ。大切な人です」

「そうなんだ…ありがとう」

僕はまた、人を信じていいのだろうか？

こうしてパーティーは幕を閉じた。

9話 パーティー（後書き）

お兄ちゃん何があったんでしょっか？

10話 過去と決意（前書き）

スイマセン、今回は短いです。

10話 過去と決意

三城 秀太 視点

過去、いい思い出や、思い出したくもないものさまざまある。

今回は僕の過去について、話そう。

僕には生まれつきの、呪いがある。それを僕は【戦者】^{ファイター}とよんでいる。

これは二段階に分けられていて、一段階目は本気を出そうとすると
きに出るものでシャルと戦ったときにでるやつだ。

これは【冷者】^{アイス}とよんでいる。このときの僕は集中力がかなり上がり、冷静に対応できる。

二段階目は戦闘でテンションが上がってきたり、感情が爆発したときに出る。

これを【狂者】^{バーサーカー}とよんでいる。

これはただ純粹に戦闘を楽しみ、戦闘以外どうでもよくなる。対象が倒れる、戦闘不能になるまでいたぶる。

正直知らない。これが分かったのは、5歳の頃で自分の家の道場になったらしい。そのときは覚えていない。

言い忘れていたけど、僕の家では道場をしている。国公認の武術で警察や警備関係の人が多い。∴女性もなぜが多い。

僕の父は僕とよく似ていると言われる。兄弟？と間違われたりしたりする。性格も同じらしい。∴自分ではよく分からない。

僕の母は麻衣とよく似ていて、姉妹？によく間違えられる。いつもにこにこだけど怒った時は、世界で一番強い父を子供扱いするほどになる。∴怖すぎる。

僕は守らないといけない約束がある。

1、家族が本気を出していいと許可しないと出してはいけない

2、むやみに戦闘をしてはいけない

3、自分が危険な時、困っている人を助けるときは使ってい

これをいつも守っている。

家族はみんな優しくて、大好きだ。僕はずっと守りたいと思う。

だけど、友達はいらない。あんな辛い思いをするくらいなら、作らないほうがいい。

あれは、中学二年生の時だった。僕は放課後忘れ物を取りに教室に戻っていた。

ドアの向こうに人がいたので、声をかけようと思ったがみんなが真剣に何かを話していたのでそれが終わるまで、廊下で待っていていようと思った。

教室には小学校からの親友T君と数名の男子がいた。

「なあ、あいつのことどう思う？」 T君が言った。

「あいつ？ああ、三城のこと？」

「ああ、俺あいつのこと嫌いなんだよね」僕はこのことを聞いて驚いた。

俺も俺も〜とみんなT君に賛同していた。

「だって、あいつがいるとき〜好きな子、みんなあいつのところに行くんだぜ？」

「しかも、仲良くしないと女子に睨まれるしな〜」

何で？僕は疑問に思う。みんな、楽しそうに笑うし、小学校のときも同じだったのに…

「あ〜あ、あいつ消えてくれないかな〜転校でもいいからさ〜」T君がそんなことを言う。

みんながぞろぞろと教室から出てきた。

「しゅ、秀太？お前まさか…」T君が驚いていた。

「僕は、みんなのこと友達だと思っていたけど、僕の勘違いみたいだったね」

「違う！そ、そんなことはない。あ、あれはおふざけだ」そう言ってくるが、そうは思えなかった。

「…もうどうでもいいや」僕はそう言って、走ってその場から逃げた。

何かT君が言ってくるのが聞こえたけど、無視をして学校を出た。

小学校からみんなと一緒に遊んでとても楽しかった。中学校もそんな感じだろうと思っていたけど、どうやら違ったみたいだ。

夜になるとT君から電話がかかってきた。あまり出たくなかったけどでた。

内容は今までと変わらないで接してほしい。…ふざけるな、僕はそう言ったがT君は泣きながら、懇願してきたので承諾した。

次の日の学校、苦痛でしかなかった。嘘、嘘、嘘、偽りの世界でしかなかった。

僕は自分に嘘の仮面をつけた。いつしか僕は嘘をつくのが得意になっってしまった。

僕は考える。この世で本当の絆はあるのだろうか？

そして、僕は見つけた。そう、家族だ。

いつも、みんな優しくしてくれたし、傍にいてくれた。

そして、家族を守ることを決意し、嫌だった道場の稽古をした。感情のコントロール、近接格闘の技術を学んだ。

麻衣が中学生になったあたりから、いろんな男が絡むようになったので、僕は全てから守った。そして、稽古をつけて半年、当主である父を越した。

父は笑いながら「僕の数十年がこうも崩れるとはね」と言っていた。…少し寂しそうでもあった。

そして、僕は心に誓う。家族を何があっても守り、助ける。

それが、僕の定めだ。

『いい話だったわ』黒髪黒目の女の人言う。

なんで、ここに僕がいるの？てか、いつから聞いてたの？

『最初からずっと聞いてたわ』

恥ずかしいな

『でも、辛い過去があったのね』女の人が悲しそうな表情で言うてくる。

そうかい？

『私はあなたを裏切ることなんて絶対にないわ』

ありがとう、うれしいよ…そろそろ名前ないと不便だね。

『聞けるかしら？私の名前はローズ よ』

ローズだけ聞こえた。

『ホントに？うれしいわ、私のことはローズでいいわよ？』

わかったよ、ローズ。最近ここにいる時間が延びたような？

『ええ、延びているわ。これもあなたのおかげね』うれしそうに言うってくる。

ねえ君はいつたい何なの？

『私はあなたを助けるため、ここにいるの』

この間言っていた。【七神柱】セブンスコッドって何？

『それは、組織の名前。私を閉じ込めた組織よ』

そうなんだ。…それじゃこの異世界から帰る方法は？

『ごめんなさい、それはわからないわ』悲しそうに言った。

そうなんだ。じゃ、自分で探すしかなさそうだね。

『私もできる限り協力するわ。そろそろみたいね。じゃあまたねシユウタ』

またね〜

僕は意識をおとした。

目が覚めると夜だった。え〜と昼から寝てたから…かなり寝たね。

ここは、自分の部屋だ。あのパーティーから八日過ぎている。今日の昼に城についてそのままばかりとベットで寝てしまった。

んっ？窓の外に人影が…

僕は気になって、窓を開ける。するとそこには、ふわふわ浮かんでいる。青髪青目の少年がいた。

「はじめまして、シユウタ。僕は【七神柱】セブンスゴッド水柱所属 ウオータネス ケイブリッチ
チチスワンだよ」

「…【七神柱】がいったい何のよう？」

「君を組織に入れにきた」

「僕にその組織に入るメリットは？」

「願いを一つ叶えてあげるかな」

「もとの世界に帰るは？」

「ん〜、それはわからない君たちをよんだのは組織だし」

「…君たちの組織が僕たちを呼んだ？」

「正確には、君だけをよんだつもりだったらしいけどね」

「なんのためにこんなことを？」

「さあ〜？たぶん暇つぶしなんじゃないかな？上の人たちが考えていることなんて知らないよ？」

「暇つぶし？そんなことのために、ここによばれたのか…」

「まあどうでもいいじゃないか、それよりどうするの？」

「断る。そんな狂った組織なんかに入りたくない」

「そうかい、残念だね〜。まあ、今回は話合いだけが目的だしこれで失礼するよ」

「逃がすと思う？」

「捕まえないと思うよ？」

【その存在をなかったことにする】

消えた。と思っただが正体は水だった。…あれは水でできた分身だったんだ。

でも、いろいろと分かったことがある。…とりあえず、【七神柱】なんか帰る方法を知ってそうだな。

僕をよんだことを後悔させてやる。

10話 過去と決意（後書き）

9 / 26 嫌だった。 嫌だった に修正しました

11話 依頼を受けよう

三城 麻衣 視点

最近、お兄ちゃんの様子がおかしい。あの、パーティーから帰ってきてから何か隠している気がする。

心配なので、監視の魔法をお兄ちゃんにばれないようにかけた。

大丈夫かな？お兄ちゃん…

三城 秀太 視点

とりあえず、【七神柱】セブンスコッドについて色々調べまわったが、手がかりがない。

少数派で動いているのだろうか？それとも、別の組織の名前で動いているのか分からない。目的がはっきりしていれば探しようもあるが…

『ご主人、少し休んだらどうだ？』

「いや、大丈夫だよ。心配しないで」

『そうか、でもあまり無理はしないでほしい』

「ほどほどにするよ。…それよりもこの国では情報が得られないか

ら、この国を出ようと思っただけど」

『そうか、私はご主人の意向に従うよ』

「そのためには、武器をそろえなきゃな」

ナイフを持っているが、これ一本というわけにはいかないだろう。

「作るしかないかな。…やってみるか」

【刀と銃があつたことにする】

僕がそう唱えると刀が出てきたが…あれ？銃…は？

そのまま、意識を失った。

『ご主人！ご主人しっかりせんか』

そんな声が聞こえてきたので、ゆっくりと目を覚ます。

「あれ？何で寝てたの？」

『…たぶん、【魔力】が一時無くなったのだろう』

「なくなったのか。二つ同時は難しかったかな」

『一つ分できる【魔力】がご主人の今の限界なんだろうな』

「そうなんだ。まだまだだな」

『その剣は使えるのか?』

「ああ、多分大丈夫なんじゃないかな。僕が愛用していた刀と同じだし」

『ほう、そうなのか、ご主人の国は変わってるな』

「とりあえず、実戦で使ってみたいな。あとお金も稼がないといけないし」

『なぜお金がいるのだ?』

「それは、この国を出るからさ。お金は旅にはいるだろう?」

『そうか、ではギルドに行ってみてはどうだ?』

「ギルド?もしかして、依頼をこなしたら報酬がもらえるやつ?」

『そうだ、行ってみるか?ギルドに』

「うん、行ってみよう。実戦で刀使えて、お金も稼げる。一石二鳥だね」

『しかし、ご主人はお金も作れるのでは?』

「…そうだった。そうだよな」

『ご主人、考えればすぐわかるのでは?』

「でも、今は【魔力】ないから無理だね。ギルド行くしかないよ

」

『あいかわらずゆるいなご主人』

「ありがとう?…とりあえず、人の姿になつて」

『褒めてないぞご主人、まあいいか』そう言つて人の姿になり、服を着る。

シロに魔法をいちちかけるのは、面倒なので人の姿になれるスキルをつけた。これは人の姿になつても、普段の身体能力と変わらない。

ついでに僕も金髪碧眼に変わる。

「では、行くかご主人」

「りよ〜かい」

僕は瞬間移動でギルドに向かった。

ギルドに着き、中に入るとたくさんの人で賑わっていた。

受付の女の人の所に行き、説明を受ける。

ギルドには、ランクがありG、F、E、D、C、B、A、Sと分かれており、ある特定のギルドポイントが溜まるとランクが上がる。

Dは一般でCがベテランと言う感じで、Sは国に数人といったころらしい。依頼はG〜Dは誰でも受けれる。C〜AはD以上が受けれる。

当たり前だが、死んだら自己責任だ。

「こちらが、証明書です。なくしたら、再発行に5銀かかります」

僕とシロは生徒手帳くらいの大サイズの証明書を受け取る。ちなみに登録した名前はそれぞれ、シュウタとシロだ。

「あちらがギルドの依頼の掲示板です。あちらから持ってきてください」

「わかりました」

僕達はさっそく依頼をさがす。…なんだこれ？

僕は張り紙をじっと見る。

ランクD 討伐 グリンポス

報酬 4金貨 パーティー必須

これは、みんな宛という感じがなく。パーティーかどうしようかな？

「あなた達、この依頼を受けるの？」そんな声が聞こえたので振り返るとブロンドのポニーテールの少女がいた。

「そうしようと思ったけど…パーティーが…」

「ならよかった!!!私も今探していたの!!!」いきなり手をつかまれる。そしてシロに睨まれる。…どうして?」

「と、とりあえず落ち着いて?君は一人なの?」

「いいえ、もう二人いるわ!よかった数が揃えば勝てそうだし」

そのまま、少女に手を引かれ、仲間のもとに連れて行かれる。

美少年とフードを被った少女?がいた。

「紹介するわ、こっちが私の兄のアレクスと妹のライムよ」

「はじめまして、兄のアレクスです。よろしくお願いしますね」爽やかボーイ、イケメンボーイのアレクスに挨拶される。

「わ、私はライム…です」フード越しからちらっと顔が見えたが、顔整ってましたよね?

「そして、私がファンよ。短い間だけどよろしくね」

「僕はシュウタ、こちらこそよろしくね」

「私はシロだ。よろしく」

この三兄妹さんはみんな、顔が整ってますね。僕ら兄妹と大違い。…イケメンいいな」

「あの〜イケメンいいな〜ってあなたの方が顔整ってますよ?」「アレクスがわけが分からないことを言ってくる。

「ありがとう。お世辞でもうれしいよ」

「いや、あの…」

「アレクス、この人に何を言っても無駄だぞ?」「シロが言う。

「…シユウタ、あんたもしかして天然?」「ファンが言う。

「天然?どう見ても違うと思うけど…」

「…そう、でも今の発言で確信したわ」

「そうかい?」

「…とりあえず、今後について話し合おう」「アレクスが言う。

出発は明日の明朝で集合場所はここの外、馬車はアレクスが用意するらしい。

「じゃあ、今日は解散ね。また明日」「ファンはそう言つと兄妹たちと出て行った。

「とりあえず、銃が作れそうだな〜明日までなら」

「そうだな、とりあえず今日は帰ろう」

「わかった」

僕たちもギルドを出て瞬間移動で部屋にもどった。とりあえず、明日は出かけるね〜と麻衣とメディアに伝えた。

麻衣は私も行く！〜！〜と言ってきたが今回はダメ〜！〜と言ってあきらめさせた。…二時間かかりましたよ？

部屋に戻って、銃を作った。ハンドレーザーガンにした。威力はどのくらいか知らない。…ダメだよね？

すべて明日しだいということで、寝ようとしたら、レイが入ってきた。

「あの〜、一緒に寝ていいですか？」何故か顔が真っ赤だった。

「いいけど…眠れないのかい？」

「は、はいそうです。そうなんです」しきりに首を縦に振っていたが顔は真っ赤のままだ。

「どうぞ〜」そう言って隣をあける。

「し、し、失礼します」そう言って横に入る。

「じゃあ、お休み〜」

「えっ！？はいお休みなさい…ぐすんっ」

僕はそうして眠りに着いた。…ベッドの下からものすごいプレッシ

ヤーがきたが、なかったことにした。…平和が一番

次の日の明朝、レイを起こさないようにそ〜と抜け出して、城を出た。

…部屋を出る前シロに頭を噛まれた。痛かった。どうして噛んだの？と聞いてもそっぽを向いて教えてくれなかった。

「おそ〜い！！なんでおくれたのよ！！」ファンが怒ってた。

「いやシロに…僕が寝坊しました」シロに睨まれたので言い直す。

「あんたね〜…まあいいわ、早く乗りなさい！」

「おはようございますシュウタ」アレクスが声をかけてくれた。

「おはよう、アレクス」

「その、お、おはようございます。シロさん」顔を少し赤くしながら言う。…フラグだったね〜

「ああ、おはよう」シロは気付いていない様子だった。

馬車に乗り込むとフードをとったライムちゃんがいた。

「おはよ〜う」

「…おはよ」小さく挨拶を返してくれた。

「さあ、出発！」「ファンの号令とともに馬車が動き出す。

ちなみに、アレクスが運転してくれてる。

「ねえ、そういえば、なんで三人で旅してるの？」僕は言う。

「旅ではないわ、修行よ」「ファンが言う。

「修行？それは強くなるため？」

「そう、強くなって憧れの魔法騎士団に入るのよ！！」

「三人とも？」

「いや、ライムは宮廷魔法師、アレクス兄は騎士団よ」

「お、お姉ちゃん、恥ずかしいからあんまり言わないで……」

「あら？いいじゃない、減るもんじゃないし」

「そ、そういうことじゃなくて……」……苦勞してるなライムちゃん。
助けてあげよう。

「へえ〜三人とも立派だね〜。なんでまたファンは魔法騎士団に？」

「隊長のシャーサル様に憧れているからよ！……でも最近誰かに負け
たって聞いたわ」

「負けたんだ。一体誰に負けたんだろ？」…僕かな？

「知らない、けど、勝ったやつはインチキに決まってる。私がぶっ倒してやる！！」目をキラキラ燃やしながら言ってきた。

「応援するよ。頑張ってね」

「うん！ありがとう。…そういえば二人はどのくらい強いの？できれば戦ってみたいな」わくわく顔で言ってくる。

…魔王は直接すぎだし、てか魔王の名前なんだっけ？ハーレムだったし…それでいいか

「ハーレム王より強いよ」

「誰よその人！？基準が分からないわよ！！」

…変態王とも言う「付け加えておいた。

「知らないわよ！！あんた何言ってるのよ！？…シロは？」僕をじと目で見てシロにふる。…正直に言っただけだよ。

「変態王の次に強い」シロはどうやら分かってくれたようだ。

…私、選ぶ人間違えたかしら…」目頭を指で押さえながら言う。

「シロちゃんはそういえば普通の服なの？」ライムちゃんが言う。

「動きやすいからだ。…本音を言えば服もいらぬ」

「えっ！？はっ！？」ライムちゃんは顔を真っ赤にしていた。

「ご主人が無理やり服を着せたんだ」

「ご、ご主人！？あ、あんたそういう趣味？」ファンが蔑んだ目で見てくる。

「いや、シロがそう言っているだけで、僕が呼ばせているわけじゃないよ」

「うむ、そうだ。…ご主人、その…今度からシュウタと呼んでいいだろうか？」

「うんいいけど、それは別に」

「そ、そうか！ありがとう」なんか、かなりうれしそうだ。

「しかし、普段から着てない服を急に着るのはなれないものだな」
…そこでそれを言います？

「ッ！」「二人とも声にならない声を出して、ファンがシロを抱き寄せながら僕から離れる。

「シロ…あんた普段は服着てないの！？」

「ん？着てないが、それが普通ではないか？」

「…最悪最低、女の敵！！変態王はお前だ！！！」めっちゃ睨まれ、怒られました。

「こいつ、降ろそう!!今すぐ降ろそう!!」

「まてまて、誤解だ。いろいろと間違っている」

「間違っているのは、お前だ〜〜!!!!」

「…シユウタ最低」ライムちゃんに、ぼそっと傷つくことを言われた。

アレクスには聞こえていないからよかったのかな？

12話 依頼を受けよう(前書き)

最近、テスト勉強が忙しすぎて死にそうです。

12話 依頼を受けよう

三城 秀太 視点

二時間ほどしてから、馬車を降りて今は森の中を歩いている。

「あの…その…」僕はそう言っただけを何度もみんなに掛ける。

ギンツ！っと何回も睨みつけられています。…誤解だよ？

今は馬車を降りて、森の中を歩いている。グリンポスは森に生息しているらしい。

「シユウタが何かしたのか？みんな様子がさっきからおかしいぞ？」シロが困り顔で言う。

「いいんです！何も言わないでください。まさかこんな人とはおもいませんでしたよ！」アレクスが僕を軽蔑な目で見る。

馬車を降りた後、ファンが僕が変態王と言っただけを伝えた。アレクスはシロを僕から守るように行動をする。

誤解なんですよ〜っと何回も言っても聞いてもらえず。5mくらい離れたところからちよこちよこ僕はついていってる。

ついでに、図書館で調べた売れる薬草を見つけるので結構うれしい。

「いた！！あそこよ」ファンが指で示す。

指を示した先には、体長5mの緑色の恐竜がいた。

「作戦を立てるわ…あんた抜きで」僕を睨みながら言う。

「なぜシュウタを除け者にするのだ！それはおかしいぞ！」ついにシロが怒った。

「あの人はあなたに変態的行動をさせていたのよ！？どうしてそれがわからないの？」ファンが言う。

「服を着ていないのが何が悪いと言うのだ。私はシュウタを味方するぞ！！」

「…あなたそこまで洗脳されているのね」

「シロさん、大丈夫ですよ？僕がいますから、あの人をここから追い出しても構いませんし」アレクスが言う。

『シュウタもう我慢ならん！！あのことを言っていていいか？』シロが念話で伝えてくる。

『ダメだ。僕はいくらけな貶されてもいいからよ。シロがこのことで危険になるよりいいよ』

『お前は悔しくはないのか！？』

『悔しくないよ。どうも思わない』

『…そうか、わかった』そう言ってシロがしょんぼりとする。

「お、お姉ちゃんあれ!!」ライムちゃんが急に叫ぶ。

「あ、あれは…グリーンドラゴンだわ!!」

全長は50mくらいある緑色のドラゴンだった。

グリーンドラゴンはグリーンポスの前に着地して、ガブリッとそのまま食べた。

そして、こっちに顔を向ける。…僕たちおいしそうですか？

「ギャオオオオオオオ!!!!」っと咆哮をあげてこっちに走ってくる。

「やばい、みんな逃げて!!」ファンがそう言ったのと同時にみんな走り始める。

しかし、ドラゴンのほうが足がはやく、300mくらいの距離が200mくらいになっていた。

「きゃ!」そう言ってライムちゃんがこけた。

「ライム!!」「アレクスとファンがライムちゃんに駆け寄る。

そうしているうちに100mくらいになる。

「私たち死ぬのかな…嫌だよ…」ファンが涙を見せる。

「死なないよ」僕は言う。

「えっ？」ファンがこちらを見る。

「僕が死なせない。困った人は助ける！」僕はそう言って刀を抜き、50m先にいたドラゴンの片足を速攻で斬る。

ドラゴンそのままバランスを崩し横に倒れる。

「おい、トカゲ野郎。…そのままだったほうがいいぜ？」【冷者】
アイス

「ギヤオオオオオ！」片足ながら立ち上がるうとした瞬間、もう片方の足を斬って、俺はドラゴンの首に移動して首を斬った。

ドンっと思が地面に落ちて、戦闘が終わった。

ファン視点

ライムがつまずいてこけて、駆け寄ったときドラゴンは50mと近くに来ていた。

「私たちここで死ぬのかな…嫌だよ」我慢できなくて泣いた。

「死なないよ」そんな声が聞こえた。

「えっ？」

私が振り返ると変態野郎がいた。

「僕が死なせない。困った人は助ける！！」そう言って、一瞬でドラゴンの片足を斬った。

何？あの人？いったい何者？どうやってあそこまで移動したの？

いろいろと疑問が浮かんだが、ドラゴンが立ち上がるうとしたとき、もう片方の足を斬ったと思ったらいつの間にか首まで切れていた。

「ねっ？いったでしよ死なないって」「いつもの優しい雰囲気ですべてくる。」

「えっ？えっと？その・・・」

「ごめんね？怖いよね、あんなもの見たら」「悲しそうな表情で言うてくる。」

「ちがっ違うわよ！あなたのこと怖くなんかない！」

「そうかい？ありがとうね。…シロも帰るっか」

「…そうかわかった」

「ま、待って！！」私は必死に声を掛ける。

二人は振り返る。

「そ、その…助けてくれてありがとう。それと疑ってごめんなさい」私はそう言っ頭を下げる。

「ありがとうございます。シュウタそれとご迷惑かけてすみませんでした！」

「シュウタお兄ちゃんありがとう。そしてごめんなさい」

「いいよ。気にしてない。兄妹三人仲良くね」そういって手を振ってくる。

そしていつの間にか姿が消えていた。

またあえるよね？シュウタ

三城 秀太 視点

部屋に瞬間移動してソファに座った。シロはもとの姿にもどって僕の横にくる。

『シュウタ、どうして助けたのだ？助けなくてもよかつただろう？』

「ああ、そうだね。でも世界でたった一つの兄妹でしょ？僕は妹がいるからわかるんだ」

『ほう、それはいつたいなんだ？』

「絆だよ。僕は三人の絆が見えたから助けたんだ」

『絆か…私とシュウタにも絆はあるのか？』シロが不安そうに見つめてくる。

「あるよ。ちゃんとある。いつもありがとねシロ」僕はそう言っ
て頭を撫でてあげる。

『ど、どういたしまして』うれしそうに目を細める。

「シュウタ！帰ってきたの？」部屋の外からメディアの声が聞こえ
た。

「ああ、帰っているよ」

「失礼します。シュウタ帰ってきたのなら声をかけてよ！」顔を
膨らませながら言うてくる。

「ごめんよ、次から気をつけるよ」

「あら、声がすると思ったたらおかえりになられたんですね？」メー
ブルがそう言うて入ってきた。

「シュウタ！帰ってきてたんですか！」レイも入ってきた。

「シュウタ、いたのか。居たのなら訓練に顔をだせ」シャルがレイ
と一緒に入ってきた。

「ああ、今帰ってきたんだ。訓練は後で行くよ」

「だまっつていなくなるから心配したんですよ？」レイが言う。

「一応、麻衣には昨日言っていたんだけど…そういうば麻衣は？」

「お兄ちゃん！？レイと昨日一緒に寝たんだったって？」麻衣がそう言いながら入ってくる。

「…はっ？」「…レイ以外の三人が声をあげる。

「ああ、そうだが…レイから聞いたのか？」

「えっ？私言っつてませんよそんなこと」

「えっと…それはその…」ばつ悪そうに下を向く。

「そ、そんなことより、ほ、本当に一緒に寝たんですか！？」メーブルが顔を真っ赤にしながら聞いてくる。

「そうだけど…何か悪いのか？」

「…シユウタ、貴様レイ様を連れ込んだのか！？」シャルは剣を抜き僕の首筋にあてる。

「いやいや、レイが眠れないからってきたんだよ」

「レ、レイ様？」

「そ、そのやましいことは何一つされてないし、してないよ！？」

「うらやま…じゃなくて、権力乱用ですね。レイ様」メーブルが笑

顔で言う。…目が笑っていないよ？

「いくらレイ様でも、許しがたい行為ですね？」メディアも笑顔で言う。…こわいよ？

「そのまま寝ただけだよ？」

「それでもつらやましいというか」メディアがぶつぶつ何か言った。

「麻衣、私には魅力がないのでしょうか？」

「そんなことはないよ。お兄ちゃんは誰であつてもしないから」

麻衣とレイがなんか話していたが聞こえない。

「そつだ！今日はみんなで一緒に寝ましょう」メープルが提案してくる。

「……さんせうい」「……シャル以外は賛成のようだった。

「レイ様！さすがにそれは……」シャルが言う。

「あれ？シャルと一緒に寝たくないの？」レイが悲しそうな表情をする。

「そんなことはありません！ご一緒させていただきます」即答した。

「んじゃ、ベットとか準備しませんとね」メープルは部屋から出て行った。

少しすると、城の使用人たちがベットの抱えて部屋に入ってきた。

『シユ、シユウタなんの騒ぎだ!?!』シロが起きた。…撫でていた
らいつの間にか寝ていた。

「今日、みんなここで寝るらしいよ」

『な、なんだと!?!』シロはかなり驚いていた。

そして、ベットの設置が完了した。

「これで、みんな寝れますね」メイプルが言う。

「シユウタ、訓練に行くぞ」

「ああ、わかった」僕はそう言って部屋を出た。

13話 一つのミス

三城 秀太 視点

「シユウタ…その髪と目の色…変えたらどうだ？」シャルが顔を赤くしながら言う。

「…忘れてたよ」僕はそう言って、髪と目を元に戻した。

フツフツとシャルが息をついた。

「どうしたの？何かあった？」

「い、いや何でもない！」手を顔の前でブンブン横に振る。

「そう？ならいいけど」

そっぴいながら、訓練所に向かった。

魔法騎士団の訓練所に着くと、豪華な装備をしているおじさんが見えた。

「シャル、あの人は誰？」

「ああ、また来ているのか。あの人はマイゼル公爵だ」

マイゼル公爵は訓練をしている女の人にべたべたさわっている。

「何あの人？変態さん？」

「ああ、いつも教えてやると言っただたさわってくる。一週間に三回は必ず来る」シャルは怒りながら言った。

「倒さないの？」

「そんなことをしたら、何をされるかわからない」

「…僕が何とかしようか？」

「できるのか？無茶なことをするなよ」

「大丈夫。なんとかできるから」

僕はそう言って、マイゼル公爵に近づく

「むっ？なんだ貴様は？関係者以外立ち入り禁止だぞ？」…あなたもな！つと言っつのは堪える。

「申し遅れました。私はシュウタと申します」そう言って軽く一礼する。…頭、眩しいね〜光ってるよ〜

「シュウタ？聞いたことないな。とつと立ち去れ！」そう言いながらもすっかり女の人をさわっているマイゼ…いや、太陽さん

…女の人めっちゃ嫌がつているよ〜。

「いえいえ、私はたいよ…マイゼル公爵に用があつて来たんですよ」…太陽さんって言いかけたよ〜あぶない、あぶない。

「私に？　いつたい何のようだ？」　少し不機嫌に言う。

「私は魔法騎士団隊長さんより強いと噂されるマイゼルさんにお手合わせを願いたいと思ひまして」

「ほう、そうだったのか。　うん、そうだ私はこの隊長よりも強いぞ！」　嬉しそうに言う。

ブチッと切れる音が聞こえてきそうなほど、シャルは怒っていたが、太陽さんはそのことは知らず。

「いいだろう、私が手合わせしてやるう」　めっちゃくちや上機嫌に言った。　…　チヨロすぎ

「ええ、お願いいたします。　マイゼル公爵」

「いつでも来い」　そう言って剣を構えないで言う。

「わかりました」

僕はそう言って静かに言う。　【対象の胸に剣で刺された痛みがあったことにする】

「ぐああああああ！　…！！」　そう言って胸をおさえる太陽さん。

「どうかなくなさいましたか！？」　僕はそう言って太陽さんに駆け寄る。

「胸が…　痛い…　うぐっ…！！」　そう言って悶える。

「ここは試合を中断…いや、大丈夫だ！！もう治った」

「そうですか、そういうえばマイゼル公爵はここに通ってどのくらいになるんですか？」

「むっ？ここに来てから一ヶ月になるが…それがどうかしたのか？」

魔法騎士団ができたのは二ヶ月前だから…おいおい、半分もいたのかよ。

魔法騎士団は女性だけでなくまれたものだ。騎士団は男。なぜ魔法騎士団にしたかと言うと、女性騎士団にするとバカにされるかららしい。

僕が会わなかったのは、朝、ここで教えて、昼から騎士団のほうにいくから太陽さんには会わなかった。

「実はですね。ここの訓練所では女の人が男の人に胸を刺されて殺されているですよ。噂なんです、ここで女性に対して嫌がらせをしたら、胸に痛みが走って死ぬと言われているんですよ」

サーッと太陽さんの血の気が引いていた。

「ま、まあ、わ、私は悪いことはしてないし、関係ないな」そう言いながらも震えている。

「まあ、そうですね。単なる。噂ですよ」

【対象の胸に剣で刺された痛みが二倍であったことにする】

「ぐあああああああ……!!」 さつきよりも苦しい表情で叫ぶ太陽さん。

「だ、大丈夫ですか!? マイゼル公爵」

「ま、まさか…わたしは…死ぬ…うわあああ……!!」 そう言っ
てマイゼル公爵は逃げていった。

「ま、これでここに二度と近づかないと思うよ」

「……キヤ……!!」「……」 と女性人たちは声をあげる

「救世主よ」

「やっと解放されたわ」

「しかも、軽々とやってのけて」

「かっこいい……!!」

そっぴいながら、僕に近づいて握手したり、頭撫でたりなど、もみくちやにされた。

「シユウタ…その、ありがとう!!」 シャルはそう言って頭を下げる。

「いいよ、今度、なんか困ったことがあったら相談してね」

「ああ、ありがとう!!」 シャルは今まで見たことないくらいの笑顔でいた。

「隊長の笑顔はじめてみた」

「満面の笑み」

「かわいい隊長の一面をみれた」

「その原因をつくったシユウタさんは何者？」

「お前たち！！バカにするな！！」顔を真っ赤にさせて怒る。

「「「「きゃ〜〜〜」」」」とあきらかに楽しみながら逃げていった。

「お前たち！！訓練は終わってないぞ！！」

これを機会にシユウタは女の敵を追い払った王子様。

さらにあの魔法騎士団の隊長に笑顔をもたらした紳士という噂が広まり、女性達にさらなる熱い視線を送られることになるのは本人は知る由もない。

三城 麻衣 視点

「あ〜あ、またきてるよ〜」私は心底うんざりしながら言う。

「また、届きましたね。これで本日、1000個目ですね」「メープルはおもしろそうに言う。

「全然うれしくないよ〜。はあ〜いつまでくるんだろ」「私はそう言うってプレゼントの山を見つめる。

私の気を引くためあらゆるプレゼントが贈られてくる。とって貰えないです。…お菓子はおいしいけど

「そういえば、今日は大臣さんに呼ばれていたんだっけ…」わたしは言う。

「そうだったんですか。でも…あやしいですね」

「私もそう思うから、こらしめようかな」

「あまりむちゃはしないでくださいね」

「お兄ちゃんほどじゃないから大丈夫だよ」

「ふふっ確かにシユウタは危なっかしい子供ですよ」

「うん、私が見てないと何するかわからないから」

「まあ、どっちが年上なんだか」微笑みながら言う。

「うん、いろんな意味でやっぱりお兄ちゃんだと思っよ」

「しっかりしているところもありますからね」

「そろそろかな〜じゃあ、行ってくるね」

「はい、いってらっしゃいませ」そう言って笑顔で見送ってくる。

「おまちしておりました。麻衣様」そう言って私を迎える…え〜と狸さん。

ガチャンつと扉が突然閉まる。

「…なんのまねですか？」私は冷たく言う。

「ぐふふ、あなたを私のモノにしようかね」そう言って下卑な笑いを浮かべる狸さん。

「そうですか、じゃあおしおきですね【束縛】」

私はそういつて魔法を放つ。

「ぐああー!!」そう言って狸さんは地面に倒れる。

「な、なぜだ。体が動かん」そう言ってもがこつとする狸さん。

「さあなぜでしょう？」ナイトメア【悪夢】

「ぐああああああー!!」そう叫ぶ狸さん。

「苦しいですか？」

「も、もう…やめてくれ。頼む!!」そう懇願する狸さん。

「心配しなくても大丈夫ですよ？外から誰も来ませんし」

「ど、どういふことだ!？」

「だってこの部屋に【防音】の魔法をかけましたから」笑顔で言うてあげる。

「た、頼む。悪かった!!!、殺さないでくれ!!!」顔を青くしながら言う。

「殺しはしませんよ?く・る・し・む・だけです」

「ギャーーーーー!!!!!!」

私は何回も【悪夢^{ナイトメア}】をしてあげました。

なんと、狸さん精神崩壊を起こしました。…やりすぎたかな?

かわいそうなので精神は治してあげました。

私は部屋を出てお兄ちゃんの部屋を訪れました。

「あ、麻衣。シユウタならまだ帰ってきていませんよ?」とメデイアが言ってくる。

「いや、今日はシロちゃんに用があったの」

「なんだ?私にか?」

「そうだよ。お兄ちゃんのことなんだけど」私も念話を使う。

「なんだ?シユウタのことか?」

『うん、そうだよ。…お兄ちゃんがこの国をでるって言うのはホント』

『さあ？なんのことやら』

『隠しても無駄だよ。お兄ちゃんがお金集めで依頼をしていたのも知っているから』

『…そうだったのか知っていたのか。それで私に何が聞きたい？』

『お兄ちゃんは何を探しているの？』

『…そこまでは知らん。だが危険なことだというのはわかる。本人には聞かないのか？』

『聞いても絶対に教えてくれないよ』

『ふふっ、まあシユウタらしいな』

『だからあなたにお願いする。お兄ちゃんがこの国を出て行くことしたら私に教えて』

『監視をすれば、いいのではないか？』

『監視の魔法はつけていたけど、依頼をうけた後消された』

『…うちの主人は規格外だな。私はそんなもの気づかなかつたぞ？』

『気づかないような魔法も一緒にかけたんだけどね』

『そうか…わかったお前の要望はしっかり受け取った』

『ありがとう。じゃあまたね』

『ああ、またあとでな』

「…麻衣、ずっとシロを見つめにきただけ？」怪訝な顔でこちらをみてくる。

「ち、違うよ。会話をしていたんだよ？」

「そ、そう…シロはしゃべっていなかったけど…」痛い人みたいな感じで見てくる。

「念話だよ。ね・ん・わ」

「えっ！？できるの念話？」

『こんな感じかな？』

「あっ！いま麻衣の音が響いてきた！」

「そういうことだよ。じゃあまた後で」

「はい、またね」

三城 秀太 視点

お風呂も食事も済ませて、さあ寝ましようかとなったのはいいけど…

シャル、王女三人、メープル、メディア、麻衣、シロがいるけどみんな僕のベットに入ってくる。…寝れないよ!?

「あの～みなさん。狭くて寝れないんだけど」

「いいではありませんか」

「レイ様もこうおっしゃっているから問題ない」

「シユウタお兄ちゃんだいぢゅき」

「シユウタさん、大丈夫です」

「あらあら、いいじゃありませんか」

「シユウタの隣はわ・た・し」

「お兄ちゃん人気者だね」

『シユウタ…次の日はないぞ?』

約一名怖い発言をしてきたけど…何か忘れているような?

「そういえば、今日、ギルドでグリーンドラゴンを討伐してきたと言う人が現れたらしいです」レイが言う。

「それは本当なのですか!?!レイ様」シャルが驚いて言う。

「ええ、しかしすごいですよね。Aランク10人でやっと倒せる相手を三人で倒すなんて」

「三人ですか…どんな人なんでしょう?」

「明日、謁見がありますのでそのときに見れますよ…えっ?」

「そうですか。楽しみですな～戦ってみたいですよ」シャルが言う。

「頼んだらできると思いますよ」

「そうですね。明日が待ち遠しいですよ」

『シユウタそういえばギルドの登録名はそのままだったよな』

『あつ。そういえば名前教えちゃった』

『シユウタはやっぱりシユウタだな』

『それどういう意味？』

『気にするな。おやすみシユウタ』

『ああ、おやすみ』

「みんな、おやすみ〜」

「「「「「おやすみ(なさい)」「「「「「」

明日は大変そうだな〜これじゃまだ国をでれないや。と思いながら眠りについた。

14話 仲間と秘密(前書き)

勉強なくなつてほしいと、この頃思います。

14話 仲間と秘密

三城 秀太 視点

「グリーンドラゴンを倒したと言っものをつれて参りました」と兵士さんが言う。

「うむ、通せ」王様が言う。

「ハッ！ではこちらにおこしてください」そう言って三人の人たちが入ってきた。

「お久しぶりです。王様、私はアレクス＝カースウエルです」

「おお、おおきくなったのアレクス。奴は元気にしておるか？」

「ええ、あいかわらず剣を振り回しています」

「ふふふ、そうかあいつらしいな。で、そちらの二人は？」

「はい、アレクスの妹のファンです」

「同じくライムです」

「おお、そういえば二人の娘がおると聞いたな」

「ええ、そうです。…王様聞きたいことがあるんです」

「おお、なんじゃ？」

「シユウタとシロと言う名前をご存知ありませんか？」

やめて、言わないでよ。王様空気よんでね？

「ああ、そこに黒髪黒目の奴がシユウタだが…それがどうかしたのか？」…言わないでよ」

「ええ、あの人がグリーンドラゴンを倒したのです」

「………ええええー！！！！！！！！！！」みんな驚く。

「シユウタ、それは誠か？」

「…間違いありません」…言い逃れできませんよね。

「そうか…まあ、お主なら何でもありだからな」呆れ顔でこっちを見ってくる。

「王様、個人的にシユウタとお話したいのですが」

「うむ、わかった…部屋に案内してあげる」王様はそう言つと執事さんが僕と三人を連れて部屋に案内した。

部屋に入るとアレクスが僕に頭を下げてきた。

「すみません、またご迷惑をかけたようですね」

「いや、いいよ。それよりも王様とどういつ接点が？」

「実は僕たちの家は貴族でね、そういう点で王様と知り合っているんだよ」

「貴族だったのか？なんかすごいね」

「それよりもシユウタ、君に渡したいものがある」アレクスがそう言って袋を渡してくる。

袋の中身は金だった。

「これはいったいなんだい？」

「これは、グリーンドラゴンの素材を売ったお金だよ。倒したのは君だし、もらってくれ」

そういつてくるが100金はいくらなんでも多いので、一人20金ということであけた。

「あんだ、本当に優しいのね。ムカツクくらい」ファンがそう言うてくる。

「ありがとう？」

「褒めてないわよ！…それよりも頼みがあるの」

「なんだい？」

「私を弟子にしてほしいの」

「僕も同じく」

「わ、私も」

「はい？どうしてまた？」

「あんたの強さに惚れたの！だから鍛えてほしいの！」

「でも、ライムちゃんは魔法でしょ？」

「わたしは…その、そばにいたいというか…」顔を赤くして小さく言う。

「ごめん、後半からまったく聞こえなかった」

「僕はあなたを越えたいのです」

「それなら、騎士団や宮廷魔法師になったほうがいと僕は思うよ」

「…本当は正直に言うと、シュウタ、あんたに恩返しをしたいの」

「恩返し？別にいいよ助けたくて助けただけだし」

「お願い！それでもしないとこの気持ちがおさまらないの！」

「僕からもお願いします！」

「私からも！」

みんなそう言って頭を下げてくる。

「…わかった。でも一つだけ条件をだすね」

「「「条件?」「」」

「僕と試合をして、僕が認めたら弟子にしてあげる」

「「「えー!」「」」

「何も勝てとは僕は言ってないよ。認めさせるだけだよ」

「わかったわ。場所はどこのの?」

「そうだね。訓練所を借りようかな。準備はいいの?」

「ええ、もう私たちはできてるわよ」

「それじゃあいごうか」

訓練所に着いて借りれたのはいいけど、観客多いな…

訓練所を囲むようにして騎士団や魔法騎士団の人たちで多いつくさ
れていた。

「さあ、はじめようかいつでもいいよ?」

「いきます!」

「いくよ!」

「いきます」

アレクスとファンは僕の横から攻めてきた。視界を潰すいい攻撃だ。「いいねその攻撃」僕はそう言ってバックステップして刀で両方受け止める。

【火よその姿をかえよ、ファイアランス火槍】

数本の槍が四方から襲ってきた。僕はそれを避けようとしたら後ろからファンが襲ってきた。

「おっと、危ない」ファンの剣を受け止めたら、次は火槍が上からきた。

それを横に避けてたら後ろからアレクスが横に剣を振ってくる。正面でファンを受け止めているので、懐からサバイバルナイフでアレクスに対応する。

【雷よその姿をかえよ、スパークガン雷砲】

雷をまとった砲撃が横から襲い掛かる。かなり早い。

…これはまずいね。本気を出さないと、僕は本気を出して抜け出す。

「すごいや、君たち。俺を本気にさせるなんて」

「コンビネーションだったらAランクの人に負ける自信ありませんから」

「なるほど、さすが兄妹だ。合格だよ」

「「「やったー！！」」」

三人ともかなり喜んでいた。…よかったね

観客からは驚いている人がほとんどだった。だって三人とも強かったもん。

「なんで、三人ともDランクの仕事をしていたんだい？」

「実はギルドのは昨日入ったばかりだったんですよ」

「えっ？そうだったの？」

「ええ、ですから。最初は他の人たちと一緒に行くとういう話になりました、そのとき、たまたまシウタさんを見つけたわけです」

「そうだったんだ。でもなんで僕たちを？」

「人が良さそうだったからに決まっているじゃない」「ファンが言う」

「へえ…でも、僕を変態扱いにしたのにな？」

「ッ！あ、あれは間違いよ。シロが、誤解することを言うから顔を真っ赤にして否定する。」

「ふん。まあいいけど、とりあえず三人ともよろしくね」

「「「よろしく」おねがいします」」」

こうして、弟子が僕にできました…国を出るときどうしよう

三城 麻衣 視点

「あゝ、お兄ちゃんどうするんだろ？」

お兄ちゃんが弟子をつくったのはいいけど…国を出るときはほったらかし！？

いくらなんでもそれはないよね。お兄ちゃん少しは後先考えてほしいな。

「麻衣さんは弟子をつくらないのですか？」

「麻衣様どうか私を弟子に…！」

「麻衣さん弟子ではなく恋人に！」

「私は嫁に…！」

ものすごくうんざりしてます。後半は関係ないでしょ！っと突っ込みをしたくなる。

「ふふっ早くどこかにいきなさい。灰になりたくなければ」メープルが笑顔で言う。

「ひい〜！！【火炎の魔女】！！みんな逃げろ…！」

ドタバタとみんな逃げていった。

「あらあら、ひどいですわね〜【火炎の魔女】だなんて」

「【火炎の魔女】？何それメーブル？」

「麻衣は気にしなくていいですよ？むしろ聞いちゃだめですよ？」笑顔で攻めてくるのが怖いので聞かないことにした。

部屋に戻ると誰か人がいた。

「誰ですあなたは」メーブルが警戒する。

「初めまして、僕は【七神柱】セブンスゴット水柱所属 ウォータータネス ケイブリッチ＝スワンです。どうぞケイブリッチとおよびください」

「セブンスゴット？なんですかそれは？」

「あら？どうやらお兄さんのほうから聞いていないみたいですね」

「お兄ちゃんが何か関係あるの？」

「ええ、それはもちろん。なんせあの人はこの世界に僕の上司がよんだもんですから」

「どういふことですか？」

「あの時は、お兄さんには話しませんでした。実はお兄さんはある人とつながっているんです」

「ある人？それはお兄ちゃんの魔法の力と関係あるの？」

「…ありますね、どこまでつながっているかわかりませんが」

「お兄ちゃんをどうするの?」

「わかりません。それは上が判断することですので…最悪の場合はお兄さんは殺されるでしょう」

「そこまでしないといけない人物って誰なの?」

「大魔女ローズ」エルキナスですよ」

「なっ!ほ、本当に実在するんですか?」メーブルが慌てる。

「ええ、しますよ。この人は世界の魔物、魔獣をつくりだし世の中に、はなった人です」ケイブリッチが言う。

「それは、ほんとうなんですか!」私は驚く。

「ええ、なかでも彼女が使う魔法は想像を越えていると言われていきますからね」

「あの魔法ですか?」

「あれは僕が見た感じでは未完成と言った感じですね」

「え!?!あれで未完成?」

「あくまで僕の見解です。そこまではさすがにわかりません」

「…お兄ちゃんには言わないの?」

「余計な刺激を与えるな」と上に言われているので、今回は麻衣さんと言つことですよ」

「私がお兄ちゃんに言つかもよ？」

「ご自由につと言いたいところですがこれは他言無用と言つことですのでお願いします」

「それは、わたしもですか？」メープルが言つ。

「もちろんですよ【火炎の魔女】さん」

「ッ！どうしてその名前を」

「情報はいくらでもありますよ。それでは僕はこれで失礼します」

「【束縛】」私は魔法を放つ。

バチャッと音をたてて水だけだった。…逃げられちゃった。

「どうやら、やかいごとにシュウタは巻き込まれたようですね」メープルは言つ。

「うん、私はお兄ちゃんを支えないといけないね」

「私も協力します」

「ありがとうメープル」

「お互い様ですよ。シュウタを助けたいのですから」

こうして、お兄ちゃんのお秘密を知ってしまったがこれからどうなるんだろっ？

14話 仲間と秘密（後書き）

王様とアレクスの名前が似ていることに気付きました。

15話 思わぬできごと

????視点

「報告は？」

「現在は、覚醒した様子はないとのことですよ」

「わかった。引き続き調査を頼む」

「承知しました」

そう言っただけで女の人が部屋から出る。

「...では会議を始めようか」

「やはり、あいつは殺すべきです」

「やめる、そんなことをしたらまたいつ来るか分からんぞ」

「しかし、あいつは中に化け物がかつていてるんですよ？」

「だが大魔女とコンタクトがとれたのは奴が最初だ」

「まだ三人目ですよ！？そう急がなくても」

「静粛に」

しーんと静まる。

「私はまだ様子を見ていたほうが良いと思っぞ？」

「それもそうですね。中の化け物についてもまだ詳しくはわかりま

せんし」

「あいつのファーストコンタクトは誰にする？」

「俺がいきます」

「レッドお前が行くのか？最初はやめとけ」

「ダメだお前は後先を考えない」

「私も反対だ」

「僕も君の性格を考えてダメだと思うよ？」

「反対が多数で否決だな」

「そ、そんな俺だってやればできるんだぜ！？」

「黙れ、低脳単細胞、お前のせいで今までの二人が死んだんだぞ！」

「そ、それは俺のせいじゃなくて、魔物のせいで…って単細胞は余計だろ…！」

「ほおー、なら低脳君？あくまで君のせいではないと？」

「えっと…まあそういうこと？」

「議長コイツは代えるべきです。本当にいりません」

「まてまて！俺だって真剣に「静粛に」ッ！」

「お前はいつまでたっても成長が見られんな…代えたほうがいいか？」

「ま、待つてください、議長！チャンスをご覧ください！」

「わかった。そこまで言うなら最後のチャンスだ。…失敗したらわかってるな？」

「承知いたしました！！では私がやってまいります！」

「期待している」

「今回はこれにて終了」

会議が終わりみんなでていく。

「さあ、君はどこまでくるかな？三城 秀太 君」

静かにそうつづやいた。

三城 秀太 視点

「起きて、おき…シユウタ」

誰？僕をよぶのは黒髪のロングヘアの女性のシルエットが見えた。

「お母さん？」

「残念、あなたのお母さんではないわ」

「えっ?…ローズ!？」

「しっ、声が大きいわよ」

「ごめん、どうしてここにいるの?」

そう、ここはシュウタの部屋であった。どう考えてもおかしい。

「実はあなたのブレスレットからきたの」

「えっ?ああ、本当だブレスレットがないや。でも、来れるならもつと早く来ればよかったのに」

「ごめんなさい、実はさっきできるようになって、これはあなたの【魔力】を通して来ているの。だからあなたしか見えないのよ」

「へえー、それならいつでも出てこれるっていうこと?」

「そういうこと、だからいつでもあなたの傍にいれるわ」嬉しそうに微笑む。

「でも、あなたにふれられないことが悲しいわね」

「いつかはふれられるようになるんじゃないの?」

「そうよね、シュウタの言うとおりだね。これからもよろしくね?」

「「ちら」ぞ、よろしく」

「じゃあ、またね」ローズはそういうと消えていった。

『ご主人さつきから何をぶつぶついつておるのだ？』

『いや、なんでもないよ。ごめんね起こしちゃって』

『気にするな、でも無茶はしないほしい』

『ああ、ありがとう。おやすみシロ』

『おやすみ、シュウタ』

とりあえず、国を出るのは明日だな。カースウェル兄妹はどうしよう？今日聞いてみようかな。僕はそう思いながら寝た。

「お兄ちゃん、今日は訓練所で修行じゃなかったの？」

「…ああ、そうだったね」

「早く起きたほうがいいよ。みんな待っているんじゃない？」

「今、何時？」

「正確にはわからないけどお昼前だよ？」

「…しまった！」

僕はそう言ってあわてて準備をして訓練所に向かった。

訓練所に着くと、魔法騎士団に混ざって三人とも訓練をしていた。

「あゝ!! やつと来たわね! 遅すぎよ!!」ファンはかなり剣幕な様子だった。

「いやゝごめんね、寝坊しちゃってさゝ」

「寝坊するな! あんたが午前中にやるっていったんでしょ!!」

「…今も午前中だよな?」

そう反論したがおもいつきり殴られた。…すみませんでした。

「えゝつといきなりですが、今日で免許皆伝です」

「」「えー! ! ! ! !」

「まだ何も教わってないわよ!!」

「いきなりどうしたんです! ?」

「シユウタお兄ちゃん…」

「実は明日から僕は旅にでるんだよ」

「」「」

「いくらなんでも急すぎるでしょ!」ファンが言う。

「これは、結構前から決まっていることなんだよ」

「いつ決めたんです?」アレクスが真剣に言うてくる。

「えっと…昨日！」

アレクスが殴ってきたので避けた…二度目はくらわないよ？

「シユウタさん結構前という言葉はご存知ですよね？」笑顔で言ってくるが青筋浮かんでいるよ？

「もちろんだよ。…そんなことより、君たちはどうする？ついて来る？」

「…考えさしてください。あまりにも急すぎて準備が…」

「わかったよ。期限は明日の朝までだから、みんなよく考えてね？」

「…わたしは行く！」ファンが言う。

「…明日まで考えていいんだよ？」

「どうせ、置いて行くつもりだったんでしょ？」

鋭いね。女の勘ってやつかな？めっちゃ置いて行く気満々でしたよ。

「本当ですかそれは！？」アレクスが言う。

「…正解だね」

「あ、あなたって人は…」めっちゃ呆れあれた。

「この旅はね危険を伴うんだ。だから、ここで迷っていたら、いざという時にだめだからね」

「試したの？」ライムちゃんが首を傾げて言う。

「そういうことだよ。…でも本当に危険だからね。親と相談して明日言いに来て」

「…逃げたりしないでしょうね？」

「逃げないよ」「…ごめん逃げます」

「まあ、逃げても地の果てまで追いかけて、半殺しにするから…前言撤回します。」

「大丈夫だよ。心配しないでも待っているから」

「ふ、ふん！わ、分かっているならいいわよ」「何故か顔を赤くしながら言う。…ツンデレ？」

「まあ、とりあえず、午後からはじめようか」

「結局、午後になるわけね…」「ファンが呆れながら言う。

「とりあえず、ご飯にしよう。みんなついて来て〜」

「あれが、持ち味ね」

「マイペースって言うんじゃない？」

「私より子供かも…」

こうして秀太と三人は食堂に向かった。

三城 麻衣 視点

とりあえず、【七神柱】セブンスコッドについてはわからなかった。

ほとんどは聞いたことない。暗躍組織とおもっがつかめない。末端の組織があると思うけどそれらしき様子はない。

ものすごく、頭のいい人がまとめていると思う。お兄ちゃんもやっかない人に目をつけられたね。

とりあえず、城の中には怪しい人はいないし、どうやってお兄ちゃんの様子をみているんだろう。

「麻衣さつきから何を思いつめているのですか？」メープルが聞いてくる。

「昨日のことだよ。あのことがどうも気になって……」

「気にしてもしかたありませんよ。わたしの方でも調べているんですが、手がかりがなくて」

「うん、私の方でも見つからないし、お兄ちゃんから目を離せないね」

「今は食堂のほうにいらっしやるとのことですよ。城総出で見張りに

あててますからね」

「それならいいけど…あまり派手なことはやってほしくないな」
「バンツといきなり扉が開いた。」

「た、たた、大変です！！」メディアがあわてて入ってくる。

「メディアノックは「レイ様が何者かに連れ去られました」えっ！
！」

「どういうこと？」

「それが、シャルさんを襲って堂々とさらっていきました！！」

「シャルは大丈夫なの？」

「気絶しているとのことですよ」

「メディア落ち着いて…興奮したら敬語なんだね？」

「あっ！いやこれは…癖で…」恥ずかしそうに顔を伏せる。

「落ち着いた？それで手がかりは？」

「あっ、うん手紙が置いてあって内容が」

「“ヴォイレス火山でシユウタを待つ”だそうよ？」

【七神柱】セブンスユツドと私は瞬間的に思った。

15話 思わぬできごと（後書き）

もしかしたら、水曜まで掲載できないかもしれません
勝手な都合で申し訳ありません

16話 火山までの道のり(前書き)

すみません、遅くなりました。

16話 火山までの道のり

三城 秀太 視点

「えっ！？レイが連れ去られた!？」

「はい、今全力で搜索部隊を編成しております。」兵士さんが言う。

実は今、騎士団は王国内に現れたドラゴンの討伐に行っているためいない。いるのは魔法騎士団だけなのだ。

「そうなんだ、どこに連れ去られたか検討はつくの?」

「実はこのようなものがありません…」

紙切れみたいなものに“ヴォイレス火山でシュウタを待つ”と書いてあった。

これは、【七神柱】セブンスコレットに関係がありそうだな。

「わかった。僕も行くよ準備はできているの?」

「はい、もう少ししたら完了いたします。作戦や詳細は行き先に向かいながらとのことですよ」

「わかった。すぐこっちも準備するよ」

「それとこのことですが、カースウェル家のみなさんご内密にお願いいたします」

「わかりました」アレクスが答える。

「それでは、失礼します」

兵士さんはそう言って、食堂を出て行った。

「ねえ、私たちはついていけないの？」ファンが聞いてくる。

「ダメだよ。搜索隊に組まれていなかったら迷惑をかけるだけだよ」

「でも！レイは親友で…」

「ダメだよファン、シュウタさんの言うとおりだ。迷惑をかけたらいけないよ。今回はやめておこう」

「…わかったわよ」俯きながら言う。

「じゃあ、僕は準備があるからこれで失礼するよ」

「はい気をつけてください」

「絶対助けてきなさい！！」

「シュウタお兄ちゃん絶対レイお姉ちゃんを助けてね！」

「ああ、絶対助けてくるよ」

僕はそう言って食堂を出た。

とりあえず、部屋に戻って、シロを連れて城の外に向かった。

城の外にはシャルと麻衣とメーブルがいた。…かなり辛そうな表情をしていた。

「もうみんな来ていたんだ」

「遅い！何をしていた！早く行くぞ！」シャルが切羽詰った感じでいった。

「シャル少しは落ち着いてください」メーブルが言う。

「いいからいくぞ！！一刻も早くレイ様を助けなければ！！」

メーブルは首を横に振って、シャルの頬を引つ叩いた。

パンつと音が響いた。

「ッ！何をする！」シャルがメーブルを睨む。

「少しは落ち着いてと言ってるじゃない！冷静さを欠いた状態ではまともな判断ができないわよ？」

初めて敬語を使っていないメーブルを見た。とても迫力があって周りの兵士たちは引いている。

「…すまないメーブル落ち着いたよ」

「それでいいんです」笑顔でメーブルは言う。

「では、改めて出発としよう」

こうして、ヴォイレス火山に向かうことになった。

三城 麻衣 視点

「ねえシャル、ヴォイレス火山ってどこにあるの？」

「ここから、一日歩いたところにある」シャルが答える。

「敵はどうやって逃げたの？」

「ドラゴンを使って逃げたよ…おそろしく大きかった。まあ、私を襲ったものはかなり強かったからな」シャルは苦い顔で答える。

「やっぱり、ドラゴンを使ってくるかな？」

「わからない、たぶん使ってくるとは思いますが…問題はないと思う。なんせ【火炎の魔女】様がいるからな」シャルが笑いながらいう。

「シャル！！そんな不名誉な二つ名でよばないでください！！」メイプルが怒りながらいう。

「名前には由来があるんだよ。メイプルは、し「何でもありません！！それ以上言うと燃やしますわよ？」おっと

こんな感じですよーっと二人はケンカ？している。とても仲が良くみえる。隊の雰囲気もかなりいい。

「二人は姉妹みたいだね？」

「絶対にない(です)」「二人そろっていった。

「とりあえず今日はここにテントを張ろう」「そうシャルが言う。

だいぶ歩いて来た。明日の夜明け前にここをでて、朝には火山に着く予定だ。

みんなテントを張ったり、食事の準備をしたりなど、いろいろ大変である。

「できました」料理をしていた兵士さんがそういうと、みんなが順番に並ぶ。

みんな、好きな場所に座って、騒いだり、談笑したりする。

「いいね、雰囲気がよくて」「お兄ちゃんが言う。

「ああ、こんな感じのほうが気を張らなくていいだろ?」シャルが言う。

「そうだね。∴ そうですねシャルとメーブルってどんな関係なの?」

「∴ 元冒険者だ」

「冒険者? いろんなところをまわっていたの?」お兄ちゃんが言う。

「ああ、二人でいろんな所に行ったよ。あの時のメーブルは・・・いや、なんでもない」メーブルの微笑でシャルの顔が引き攣っている。

た。

「冒険者か〜なんかいいな〜」私は本当にそう思った。

「基本、自由だから好きな場所、好きな時間、何も縛られずいけるからな」シャルがうれしそうに答える。

「でも、何で城に着いたの？」お兄ちゃんが言う。

「それはですね、シャルがレイ様に助けられたからですよ」メープルが答える。

「えっ？どうやって助けられたの？」

「ああ、それはな商人とお金のことと揉めていたんだ。あとあと知ったんだが、その人は奴隷商人だったんだ」

「またなんでそんなことを？」

「ある店のものを不意に壊してしまっただ。弁償代が50金とか言ってきたんだ」

「…災難だね」

「払えなかったら体で払えって言ってきたからどうしようもなくて…そんなときにレイ様が現れたんだ」

「レイ様はポンつと50金をおいて、私にこう言ったんだ」

「大丈夫です。私はあなたの味方ですよ？」って言ってきたんだ」

「すごいな〜レイは」

「私は見知らぬ他人なのにどうしてここまでするのか？と聞いたたら、目の前で困っている人を助けてはいけないのですか？」と言ったんだ」

「私はこの人は女神様？って思ったよ。たいていの貴族や王族は自分のことしか考えないで他人なんか普通無視だな」

「だが、レイ様は違った。どんな人でも困った人には手を差し伸べる。…だから、私は決めただ。レイ様を守るって」

「…そんな経緯があっただ。私は感動した。」

「…だが今回は守れなかった！それだけが悔しい！」シャルは悔しそうに言う。

「…大丈夫だよ。その気持ちがあれば取り戻せるよ」お兄ちゃんが笑顔で言う。

「そ、そうか。あ、ありがとうなシュウタ」顔を少し赤くしながら言う。…ナイスフォローだけど、罪作りですね〜お兄ちゃん。

「…じゃあ今日はもう寝ましようか」メーブルが若干怒りながら、そう言う。

「ああ、そうだな、おい、みんなもう寝ろ〜」シャルがそう言う。と兵士の間には寝る体制になる。

こうして、夜は更けていった。

三城 秀太 視点

夜が明ける前に僕たちは出発した。

朝になると僕たちは火山の麓まで来た。

「ここからは、火山特有の魔物が出てくる。みんな注意を怠るな」

「……はい！」「兵士たちが声をそろえて言う。

『シロ』僕はそう言いながら近くの岩場に隠れる。

『……なんだシュウタ、せつかく気持ちよく寝ていたのに』少し不機嫌に言ってくる。ちなみにシロは僕の胸の中にいる。

『そろそろ、人間になって』

『わかった』そう言うのと胸の中から出てきて、人間になる。火山はかなり道が狭いため大きくなると道を歩けないからだ。

頂上はかなり広いと聞いているが今は無理だろう。

そして、僕はシロに服を渡す。

「……またこれを着るのか」

「お願いだからきて、裸のままでもみんなの前にでたら僕がなんていわれるか」

「シユウタがそう言うなら着るが…」しゅしゅ了解して着てくれた。

「それじゃあ、みんな待っているし行こうか」

「…シユウタは裸をみせても反応しないんだな」なぜか不機嫌になつていた。

「あれ？お兄ちゃんシロ連れてきてたの？」

「そうだよ、道が狭いから人間になつてもらつたけど」

「なんでシロは不機嫌になつているのだ？」

「よく分からないが、裸を見ても反応しないとか」

「…お前はもう少し女心を理解したほうがいいぞ？」シャルが呆れて言う。

「理解ならしてと思うけど？着替えは見ないとか」

「…いや、すまない私が悪かった」なぜか謝られた。

登つて、頂上まであと少しのところまできたが、まだ魔物が現れていない。

「どづいことだ？いくらなんでもおかしいぞ」シャルがいう。

「あれ見て！」麻衣が頂上を指して言う。

「なんだ！あの数は！？」頂上付近にたくさんの魔物がいた。

「あれは、まずいね…僕がなんとかするよ」

【あの魔物たちをなかったことにする】

僕はそう言つて、魔物たちに向かって魔法を放つ。一瞬にして魔物たちが消えた。

僕はそのまま、頂上まで行く。

「ははははっ！すごいな報告以上の魔法だよ」赤髪赤目の青年が言う。

「お前がレイをさらつた。犯人か？」

「ああ、俺は【セブンスゴッド七神柱】ファイアネス火柱所属隊長 ファイルズ・ビットだよ
ろしくな」ファイルズは、にやりと笑つた。

16話 火山までの道のり（後書き）

戦いは次話になります。

テストが金曜まであるので、もしかしたら土曜になるかもしれない。

本当に申し訳ありません。

17話 VS ファイルズ(前書き)

テストがやっと終わりました。

三人称で頑張ってみました。

もしかしたら、今回から三人称にするかもしれません。

17話 VS ファイルズ

三城 秀太 視点

ファイルズと名乗った青年の腕の中には、レイがぐったりとした様子でいた。

「…レイに何をした？」

「あはは、そんなに怒るなよ。ただ単に眠っているだけだ。…さあ死合いしようぜ？」

「いくぞ！」秀太はそのまま突っ込んで行く。

「おやおや、特攻とは感心しねえな」ファイルズは片手をあげる。

「ファイアランス【火槍】」何十本の火の槍が秀太を襲う。

「なっ！」秀太は横に飛ぼうとしたが間に合わず数本くらう。

「ぐっ！」秀太は気にせず突っ込む。

「だから、何度もやっても…なに！」ファイルズが後ろを向いたと同時にシロが顔を殴った。ファイルズはそのまま数メートル吹っ飛ばす。

シロはその間にレイを確保してその場を退く。

「やるじゃねえかお前ら！！」ファイルズがそう言った瞬間、炎の壁が数十メートルに渡ってあらわれる。

「くそ！逃げ道が！」秀太はそう言う。

「はははは！無駄無駄！どこにも逃げ道なんてねえよ！俺が逃がすと思うか？おい、ドラゴン！敵の仲間が来たみたいだから相手をしてやれ」ファイ

ルズはそう言うのとドラゴンがファイルズの後ろからでてきて空を飛びながら少しずつ大きくなって壁をこえていった。

「くそ！シロ、君たちだけ外に出す！麻衣たちを手伝ってやってくれ」秀太はそう言うってレイとシロにふれる。

「待て！わたしは 」シロが何か言う前に魔法を使った。

「ほお、それが例の魔法か……てめえの強さみせてもらうぜ！くらえファイアガン！【火炮】」直径三メートルの火の弾がものすごいスピードで襲い掛かる。

「【その魔法をなかったことにする】」秀太がそう言うのと、跡形もなくなかった。

「すげえなおい！」ファイルズは興奮していた。

「【お前の存在をなかったことにする】」秀太は躊躇せず次の魔法を放つ。

「あ？今何かしたか？」ファイルズは何事もなかったように振舞う。

「なっ！そんなはずは」秀太はかなり驚いた。

「あははは！もしかして、俺を消そうとしたのか？バカだなくくら
うわけねえだろ！」ファイアボール【火柱】」

目の前に火の柱が地面からいくつも現れて秀太を襲う。

「はっ！」秀太は避けながら、ファイルズに近づく。

「もらった！」秀太はそう言って腰にかけてあった銃をとって撃つ。

直径二メートルのレーザーがファイルズに向かう。

「ファイアウォール【火壁】」ファイルズは自分の目の前に火の壁を現させて秀太の
攻撃を防いだ。

「これならどうだ！」秀太はレーザーを防いでいる間にファイルズ
の懐に近づいて刀を振るう。

しかし、それも読んでいたのいたのかひょいっと下にしゃがむ

「ファイアインパクト【火衝撃】」ファイルズは秀太の胸に火の手をぶつけてくる。

「がはあ！」肺の中に入っていた酸素を強制的にだされながら数十
メートル先にある壁にぶち当たる。

「げほあ！がはあ！」秀太は、血を吐いて立ち上がる。

「いってえな！」秀太はアイス【冷者】になっていた。

「あはは！！やっと本気になったかシュウタ！！これで心おきなく

殺せるぜ！！」

「あ？なんかいったか？」秀太はいつの間にかファイルズの後ろにまわりこんでいた。

「なんだつくぼっ！」ファイルズはそのまま殴られ上に吹っ飛ぶ。

「まだいくぜ？」秀太はそのままファイルズにおいて刀でそのまま腹を斬る。

「あぶねえなおい！！」ファイルズは、刀を素手で掴んで炎を出す。

「ぐっ！」炎は刀の柄まで秀太は熱くて思わず手を離れた。そして、二人は地面に着地して対峙する。

「いいね〜！今の攻撃。ちょっと腹が切れたぜ！」狂気に満ちた笑顔で言う。

「おいおい、何笑ってたんだよ。…もしかしてマゾ？」

「クロス」静かにそういつて詠唱なしで【火槍】ファイアランスを放ってくる。

「【その魔法をなかったことにする】」

秀太は急いで刀を拾おうとするが火の壁に阻まれる。

「おい、どこをみてんだ？」ファイルズがいきなり横から現れた。

「ちっ！」秀太は舌打ちをして、銃で攻撃しようとする。

「おせえよ！」ファイルズは秀太の手を掴む。

「燃えろ！」そのまま秀太の手を燃やした。

「ぐああー！」秀太は苦悶の表情を浮かべるがなんとか耐えてファイルズと距離をとる。

クソが！屋気楼かよ。秀太は心の中で毒づいた。

「【ケガをなかったことにする】」秀太はケガをすべてなかったことにした。

「…終わった？」ファイルズは、にやにやしなからこちらを見てくる。

「ああ、そうだな」秀太はそのままながした。

「いいねえクールすぎて、でもあと何回もつかない？」

「何回でももつけど、生憎、俺はお前と違ってマゾではないんでね」

「あははー！そんなに殺してほしいのかよー！」ファイルズは襲い掛かってくる。

秀太は銃を取り出して構える。

「あはは、そのままかよー！つまんねえなー！」ファイルズは手の中に炎を作りだしそれを秀太に向かって放つ。

「なにっ！？」しかし、秀太には当たったが偽者だった。

ドッパンつと音が聞こえたとおもったらレーザーが弾かれた。

「冗談だろ？」

秀太は腕がギリギリ吹っ飛ばない程度の威力を撃つたのだ。吹っ飛ばないが腕の骨はボロボロだ。腕が吹っ飛んだら回復するのに【魔力】を多く使う

からだ。

「【このケガをなかったことにする】」秀太は魔法をすぐに使った。ちっ！これでもう無理はできねえ…どうする？考えろ！秀太は必死に考える。

「あはは、待たせたな！！」ファイルズは火の粉を身に纏、真っ赤な二本の翼が彼の背中から生えていた。

「おいおい、俺は童話の世界でも来たのか？」

「余裕だねえ！！でもいつまでそうしてられるかな？」ファイルズはいきなり火の槍を数百本出してきて攻撃する。

冗談だろ！？これをどうやって避ければいいんだよ！！秀太は内心かなり焦っていた。策がない。何もなし。

恐怖？ないな。でも、いつ以来だ？こんなに追い詰められたのは？楽しい？ああ、そうか

ドンつと音が響いた。秀太を火の槍が襲った。

三城 麻衣 視点

「なに？この火の壁は！？」高さは5メートルはあるだろう。しかもその壁を越えて何かがやってきた。

「おい、あれはレッドドラゴンじゃないか！」シャルが驚きながら言う。

大きさは50メートルで全身が赤い鱗に覆われた竜がこちらに向かってきた。

「戦闘態勢！魔法は複数で行うぞ！」シャルが指示をだす。

麻衣はドラゴンを見つめていたがこちらに向かって誰かが走ってくる。

「シロ！そしてレイ！？」シロはレイを抱えてこちらまで走ってきた。

「シロ！無事だったの？」

「ああ、しかしそれよりも！シュウタが今危ない！」

「えっ！？お兄ちゃんがどうかしたの？」

「レイを攫った奴と戦っている。私も行かないと！」

「待って！どうやってあそこに行くの？」

「無論大きくなって「待って待って！！それじゃここが崩れちゃうよ！！」「むっ！しかし！！」

「今はこっちを手伝って！！こっちが終わったら向こうに行く方法を考えよう！！」

「わかった！…しかし、空を飛んでいるのはいかな」シロはそう言って空にいるドラゴンを見る。

「大丈夫私の魔法を使えば、【束縛】」そう麻衣が言うとドラゴンは力チンッと急に動きを止めて地面に落ちてくる。

「【浮遊】」麻衣は地面に着くすれすれで使った。

「あとはこれで倒すだけっ」と麻衣は満足げに頷く。

「…むちゃくちゃだな麻衣も」シロは呆れながら言う。

「うん！ありがとう」麻衣は照れながら言う。

「…寝めていないがまあいいか」シロはそう言ってドラゴンの方に走っていった。

「とりあえず。レイに異常がないか調べないと」麻衣はレイを魔法で異常がないか調べた。

「薬を飲まされているみたいだね【回復】」そう言って魔法をかけ

る。

「うっ…あれ？ここはどこですか？」レイが寝ぼけながら言う。

「ここはヴォイレス火山だよ？レイ、あなたはここまで攫われたんだよ？」

「あ！そうでした。麻衣助けに来てありがとうございます！」

「いや、私じゃなくてお兄ちゃんとシロが助けてくれたんだよ？」

「そうなんですか！？シロとシュウタはどこに？」

「シロは今ドラゴンを倒しているところだけど、お兄ちゃんは…レイを攫った人と戦っているよ。ほらあそこの火の壁の向こうで」

「早く助けないと！！シュウタが！」悲痛な表情で麻衣に言う。

「うん、もちろん！だから早くあの火の壁を調べないと」

「麻衣！こっちは終わったぞ！レイ様！良くご無事で私が不甲斐ないばかりに！」シャルが目には涙を浮かべながら言う。

「いえ、いいのですシャル。それよりも今はシュウタを！」

「うん！」麻衣は頷いて、火の壁まで近づいて調べる。

「これは…ちょっと時間かかりそうかな？」麻衣はそう言う。

この火の壁は一つ一つがつなぎ合わせられていて、一つだけ破壊し

ても復活するという厄介な魔法だった。

「なんとかならないのか？」シロが言う。

「大丈夫！やってみるよ」麻衣はそう言うとおちこち動いてスイッチ式の【解除】の魔法をかけた。

「よし！いくよ！」麻衣はそう言うとお魔法を放った。

そしたら、炎の壁が消え去った。

「よし、全軍！シユウタの援護をしろ」シャルがそう指示をした。

三城 秀太 視点

「あはははは！！死んだぞ！あつけないな！！」ファイルズは笑い声をあげる。

「そ、そんな！シユウターー！！！」シロが叫ぶ。

「次はお前たちの」

ザンっといきなりファイルズの右腕が斬られた。

「ぐああああ！！」ファイルズが声をあげる。

「誰が死んだ？お前か？いや、お前は今から死ぬな。いや、もう少しだけでもう少しだけ」秀太がファイルズの右腕を刀で刺しながらぶ

つぶつ言っていた。

「てめえ!!!ふざけやがって!殺しつ　ぎゃああああ!!!」次は左腕を斬られた。

「クロス?いや、苦しめる。楽しむ」秀太は恍惚な表情を浮かべてファイルズを攻撃する。

左足、右足と次々に奪っていく。

「終わり?いや、もう一回」秀太は魔法を使ってファイルズの手足を復元させる。

「な、何をした!?なぜ!?」ファイルズはもう力が残っていないのか

「もう一回、もう一回」秀太はぶつぶついいながらファイルズに近づく。

「や、やめろ!やめてくれ!!!もうやめてくれ助けてくれ!!!」ファイルズは恐怖で顔を真っ青に染めていた。

「消す。いや、苦しめる。楽しむ」秀太は右腕をまた斬り落とした。

「ぐああああ!!!」ファイルズは苦悶の表情を浮かべて叫んだ。

「あはあはははは!!!面白い!!!面白すぎる!!!」秀太はすべてを解放した気分だった。こんなに最高なら最初から

「お兄ちゃん!?!いつたい何があったの!?!」秀太は声が聞こえる

方を向いた。麻衣が悲痛な表情を浮かべていた。そして隣を見ると

「うっ…ひっく！シユウタ…もう…いいから！」シロが泣いていた。

秀太は自分の中にあるものが急速に冷めていった。

「おい」秀太は言う。

「ひっ！」ファイルズは声をあげる。

「二度とこんな真似をするなしたら、次は容赦しねえ」

「わ、わかりました。次か」ぼとつとファイルズの首が地面に落ちた。

「あ？」秀太は上を向く。

「次はないよ。役立たず君」空中に浮かんでいる緑髪緑目の少年が言う。

「誰だ？てめえは？」秀太は睨みつけながら言う。

「ああ、それはまたのお楽しみ。それでは」にこにこしながら消えていった。

「やっと、終わった…か」ばたつと秀太は倒れた。

18話 真実

三城 秀太 視点

あれ？僕はどうなったんだっけ？

秀太はそう思いながら周りを見渡す。

『秀太、気がつきましたか？』ローズが秀太に声をかけてくる。

ああ、ここは【狭間】なんだね。

『そうよ。そして、あなたに話したいことがあるの』ローズはそう言って秀太を真剣に見つめる。

なんだい？話したいことって

『それは、あなたの中にあるものについてよ』

僕の中にあるもの？もしかして【戦者^{ファイブ}】に関係ある？

『そうよ、人格変化についてなんだけど…実はね、秀太の中には【神の力】があるの』

【神の力】？

『【神の力】は人間にはコントロールなんてできないわ。だから、秀太には枷があるの』

枷？それはいったいどんなもの？

『…感情をある程度なくしたの』

感情をなくす？どういうこと？

『人並みの感情を失うことで、一般の人よりも感情が薄い』

そうなんだ。それはやっぱり5歳のときからなの？

『そうよ、その力が発覚して、押さえ込んだの』

なんでローズがそんなことを知っているの？

『私はもともと、向こうの世界の住人なの』

えっ？そうなの？

『ええ、昔の話になるんだけど、私はこの世界にきたのは日本と言う昭和初期の時代なの』

そうだったんだ。でもどうやって元の世界にもどったの？

『力の半分を失う条件で戻れたの。でもね失敗する可能性もあったのよ』

でもなんでそんな賭けを？

『追われていたの。私の力のほしさに。私は疲れていたのだからね死んでもいいやうって言う気持ちになっていたのよ』

そこまで追い詰められていたなんて…一体誰に追われていたの？

『セブンズエッセイ
【七神柱】よ。』

またあの連中か。でも地球にもどったんだよね

『ええ、私がもどった時には平成の時代になっていたのよ。そして、私は転移のせいで力尽きてその場に倒れたの。そして、目が覚めたらあなたのお母さんがいたわ。なんでも私は秀太の家の前で倒れていたのよ』

すごいね。奇跡なんだね。

『ええ、私はよく平成の世の中についてよくわからなかったし。落ち着くまでここで暮らしていいよって言うてくれたの。でもね、私が来て二年後事件が起きたの』

事件？

『ええ、あなたが暴走したのよ。』

『ファイズ
【戦者】にでもなったの？』

『いいえ。神の力を出したのよ。制御しきれない感じで危ない状態だったの。だから私が押さえ込んだのすべての力を使って』

ごめんね。ローズ。

『いいのよ。私はやりたくてやったんだから。それにねこれで借り

は少しは返せたかなって思ったの』

そうなんだ。ありがとうね。僕を守ってくれて。

『どづいたしまして。でもね、お別れの時がきたのよ』

お別れ？そういえばなんでローズは捕まったの？

『実は召喚魔法で私をまたここに召喚されたの』

えっ？いつたい誰に？

『セブンスコトド
【七神柱】よ。私の力の半分を使ってね』

力の半分は失ったはずじゃなかったの？

『地球に戻るときに使った力はどうやらこの世界に残っていたらしいの。だからリーダーがその力の半分を受け継いで私を呼んだの』

どうしてそんなことを？

『私の力のもう半分を手に入れるためよ』

そんなことのために？ローズを？

『そうよ。だからね私は抵抗したんだけど、そのとき私は力がなくてね捕まったの』

僕のせいなんだね…

『そんな悲しい表情をしないで決して秀太のせいではないわ』

うれしいよそんなことを言ってくれるなんて。それと、やっと僕の名前をちゃんと正しい発音してくれたね。

『同じ日本人だからね。ごめんねこんなことになっちゃって』ローズは悲しそうに言う。

いいよ。そしてもうひとつ目標もできた。

『目標？』

ローズを絶対助けること。それに本当の名前も知りたいしね。

『いいのよ私のことは、それに本当の名前を教えると枷がはずれるわ』ローズが驚くことを唐突に言う。

ありゃ〜そうなんだ。そしたら力の制御の修行もしないといけないね。

『そうね。その力は制御しないといけないけど…できるの？』

僕には頼もしいローズって言う師匠がいるからね。

『くすっそうなんだ。これからもいろいろとよろしくね』

よろしくローズ

『当面の目標だけど、あなたをまた狙ってくる可能性があるわ。あまり長居はしないほうがいいと思うわ』

ああ、僕もそう思っていたんだよ。しかもあんなことがあったんだし、僕なんていないほうがいいよ。

「…秀太がどう思っているか知らないけど、ちゃんと考えて行動してね？」

わかってるよ。それじゃ行こうかね。

「またね、秀太」

秀太はそのまま意識を手放した。

「おはようでいいのかな？」

秀太は起き上がって周りを見渡す。どうやら自分の部屋のようだ。

「すうー…お兄ちゃん…」

麻衣がベットに頭を預けて眠っている。どうやら看病してくれていたみたいだ。

「…行くか」

秀太は服を着替えて黒の軽装備、刀、銃、お金とローブを羽織る。そして一枚の手紙を書いて机の上において別れを告げる。

「みんな、いままでありがとう。でも僕は行かなくちゃ。あいつらを倒して、戻る方法を」

ガチャンつと扉が開いた。

「秀太?…何をしているんです?」レイは不思議そうにこちらを見ていた。

「おっと、タイミングを間違えたみたいだね…レイありがとう。そして、さようなら」

「えっ?秀太?」何を言っているか分からないという状態のレイを見ながら秀太は瞬間移動を使った。

19話 旅先の出会い

三城 麻衣 視点

「マイ起きて下さい！マイ！」

「ん〜…どうしたの？」麻衣は目をこすりながら言っ

「シュウタがこんなものを！！」レイが慌てながら、手紙を渡してくる。

「お兄ちゃん？」

麻衣は手紙の内容を見た。

みんなへ

とりあえず、旅に出ることにしました。理由は元の世界に帰ることと、この世界に僕たちを呼んだ元凶を倒すためです。

みんなに黙って出て行った理由はこの間の僕の姿をみて、怖がっていることを配慮しての行動です。

一人で旅に出る理由はみんなを巻き込まないためです。

P・S

麻衣のことをどうぞよろしくお願いします。

「うん、とりあえず縛りあげないとね」「麻衣は笑顔で言う。

「そうですね」「レイも麻衣に賛同した。

とりあえず、秀太のお見舞いに来たカースウェル兄妹にも報告した。

「やはり、シユウタさんらしいですね」

「地の果てまで追いかけること決定」

「…魔法つかってもいいよね？」

三者三様の言葉を並べた。

とりあえず、秀太を追いかけることを決定したため、会議をするこ
とになった。

「それでは、会議を始めることにしよう」「サーシャル改めシャルが
言う。

とりあえず、行くメンバーは、レイ、シロ、麻衣、カースウェル兄
妹、シャル、メープル、メディアになった。

「とりあえず、ものすごい秀太の勘違いだと思っが、シユウタのこ
とが嫌いになった奴はいるか？」シャルが言う。

しーん…誰も反応をしなかった。

「私もシユウタのあの姿を見たが…特に何も思わなかったぞ?」シャルは呆れながら言う。

「そういえば、最初は惑いましたが…特には」レイは言う。

「マイ、シロはどうしている?」

「今は、人の姿になってお兄ちゃんの【魔力】を探っているよ?」

シロの人の姿になるスキルは秀太にもらったものなので、秀太の【魔力】を感じるのにいいらしい。

「見つかるのですか?」レイが言う。

「わからないけどたぶん」おい、秀太の居場所がわかったぞ」見つかったらしいよ?」シロが扉を開けながら言う。

「早かったね」麻衣が言う。

「もともと、契約していてある程度の居場所が分かる。それに秀太からもらったスキルでより正確にわかる」

「場所は?」

「国の国境付近の村あたりに滞在している」

「とりあえず準備をして、明日から行くか」シャルが言う。

居場所はいつでもわかるし、焦ることはないということになった。

「シユウタはいつも勝手だね〜会ったら一発殴らないと」メディアが笑顔で言う。

「それはそうですね〜私は燃やしますけど」メーブルも笑顔で言う。

「縛り上げて好きなことをするでいいんじゃない？」ファンも悪乗りする。

「各人好きなことをするで、いいと思いますよ」レイが言う。

「私はずっと胸の中に入れることを条件としてもらおう」シロが若干顔を赤くしながら言う。

「…シロさんはそんなことをできるからいいよね」ジト目でメディアが言う。

「…ずるいかも」ライムが言う。

「わ、私はこの前みたいに一緒に寝てもらいます」レイも顔を赤くしながらとんでもない発言をする。

「……………この前？」

シロ以外レイをジト目で見ながら言う。

「シユウタよ、とうとうレイ様に手を出したか」

「…お兄ちゃん奥手だと思っていたのにな〜」

「へえ〜あいついい度胸してるじゃない」

「あらあらいけませんね〜シユウタ」

「…許せないな、シユウタ」

「…シユウタお兄ちゃん大胆かも」

「うむ、この間攻撃したが、許せなくなった」

みんな黒い笑みを浮かべて言う。

「えっ？いや、その違うというか…」さらにレイが顔を赤くしたため

「斬る、いや分解だな」

「束縛じゃあ、たりないかもね」

「半殺し決定…」

「焦げ肉ですわね」

「…ダメだな、もうだめだ」

「シユ、シユウタお兄ちゃん獣？」

「うむ、この間と同じでいいだろう」

ごめんなさい、本当にごめんなさいシユウタさん、この様子から見てシユウタさんが無実だと言うのは僕にはわかりますよ。でも、止めれません。こんな僕を許してください。

妹たちの証言は素直に受け取るアレクスだが、いつもの冷静に物事をみて判断した結果、今回は無理だと思った。

三城 秀太 視点

「とりあえず、どうしようかな」秀太はぶらぶら歩きながら言う。

『秀太、本当にあの別れ方でよかったの？もう少し考えたほうが…』
ローズが心配そうに言う。

「問題ないよ。たぶんみんなあの姿をみて怖がっていたし、シロな
んて泣いていたからな」

『そうなの？でも拒絶的ではなかったんでしょ？』

「分からない。でも、嫌われているならこれでいいよ」

『麻衣ちゃんのこととは良かったの？』

「麻衣は確かに心配だけど、大概のことは一人でできるし、麻衣に
近づく輩は排除したから問題ないよ」

秀太は麻衣に近づく男どもを秘密裏に、嫌がらせをしていたのだ。
そして、麻衣には近づかなくなった。いつか話してみたい。

『そう、でもこれからどうするの？』

「とりあえず、国を抜けて情報収集といきたいね」

『瞬間移動は使わないの？』ローズはもっともな疑問をぶつける。

「あれはあまり使いたくない。いきなり敵に襲われたらひとたまり
もないしね」

『詮索スキルがあるじゃないの？』

「残念ながら今の僕じゃ有効範囲が一キロしかない。大きな町に飛ぶのはいいけど、さすがに人間以外の国にいきなり入って捕まりました〜ってというのは洒落にならないよ」

『確かに他の種族が入国するのは厳しいからね』

この世界の国々は結構他の種族に対する偏見が大きい。王族たちや貴族は表面上親しくしているようにみえるが実際はそうでもない。

あのテリユート魔国も、戦争はしませんよアピールであるのパーティーを開いたのだ。

「という訳で案内人が欲しいところなんだけど…あつ丁度いい所に馬車が」

傭兵らしき人を二人連れて、何故か道のハズレを走っていたが、とりあえず声をかけてみようと思つた。

「すみません〜街に行くなら連れていつて欲しいのですが…」

「はっ！じよ、冗談じゃない！とりあえずどこかに消えてくれ！」
商人さんみたいな人は挙動不審に答えた。

秀太は何か隠しているな〜と悪い考えが浮かんだ。

「いいじゃないですか〜。ここで会ったのも何かの縁ですし〜では失礼しますね〜」秀太はそう言いながら、馬車の中に入った。

「あつ！！コラ！勝手に入るな！！」一瞬で中に入ったため反応できなかつた様子だ。

「おいおい、これは犯罪じゃないの？」秀太は手首や足首を拘束されている獣人の四人の少年少女達を見た。

「クソ！バレたならしかたねえ！お前らコイツを殺せ！！」商人のおっさんが言う。

「わかりやしたよ」
「了解した」

秀太はとりあえず馬車から降りて傭兵の二人から距離をとる。

「君たちは犯罪に加担しているのをなんとも思わないの？」

「はっ！金がいいから雇われたまでよ！！」大柄な男は大剣を振り回しながら言う。

「彼に同じだ。君はどこかの聖人君子か？」細いが、がっちり筋肉のついた優男が言う。

「うーん、小さい子供がこうなっているのにちよつと許せないかも」秀太はそう言いながら、大剣を躲して、大柄な男の顔を殴った。

「ぐあああ！」大柄な男はそのまま数メートル吹っ飛んで地面に倒れる。立ってこなかったので気絶してしまったようだ。

「あはは…強すぎでしょ君」優男が顔を引き攣らせながら言う。

「生憎、腕には少々自信があるよ？まだやる？」

「いや、普通なら諦めるが、今回は護衛だからしないよ！」優男はレイピアを秀太の顔に突きつけてきた。しかし、秀太は首を横にずらして避けて、そのままレイピアを持っている右手を殴った。

「ぐっ！」バキッつという音がして優男は秀太と距離をとった。

「右手折れているよ？次は意識を刈るよ？」

「あはは…やばいねこれは」優男はそれを言った後、秀太に意識を刈られた。

「さて、最後はお前だけだが…殺そうか？」秀太は商人を思いつきり睨んで言う。

「ひいひいひい！！い、命だけは、命だけはー！！！！」商人は馬車から転げ落ちながら言う。とりあえず、うるさいので秀太は

意識を刈り取って縛り上げた。ついでに傭兵の二人も縛り上げた。

馬車のなかの様子を見たが、ものすごく怖がられていた。とりあえず、手足についている枷を外してあげた。

皆、驚くような表情をしていた。

「とりあえず。お腹は空いていないかい？」秀太は笑顔で子供たちに言った。

皆、戸惑いながら頷いた。

「【ステーキが四つあったことにする】」

すると子供たちの目の前にいきなりこんがり焼きあがった大ぶりのステーキが出てきた。

「「「はっ!? (えっ!?)」」「「子供たちはかなり驚いていた。」

「えっと…好みが分からなかったからステーキにしたけどダメだったかな?」秀太は少し困りながら言った。

ブンブンっと皆首を横に振った。

「そう!ならどうぞ召し上がれ!」秀太は無邪気な笑顔で言った。

皆、恐る恐るステーキを食べた。

「おいしい」

「今まで食べた物よりもいいかも」

「最高!」

「美味しいです」

皆、笑顔を浮かべて喜んで食べていた。

良かった。さっきまで沈んでいた目が虚ろだったからな。秀太はそう思いながら、笑顔で子供たちが食べるのを見ていた。

19話 旅先の出会い（後書き）

フラグ立てすぎですかね。回収できなかったらたいへんですね。

20話 神様になる

三城 秀太 視点

獣人の少年少女の四人はステーキを食べ終えて、満足している様子だった。

「皆の名前を教えてくださいいな？」

「エマです」

「ユウだよ」

「スウです」

「ジャン…です」

みんな頭から茶色の耳、茶色の尻尾が生えている。髪の毛と目も茶色だ。

「皆、兄妹だったりする？」

「「「「「そうです」「」「」」」」」

「お兄ちゃんの名前は？」スウが聞いてくる。

「僕は秀太はよろしくね」

話を聞くと、エマが長女で10歳、スウが次女で8歳、ユウが三女で6歳、ジャンが長男で5歳らしい。

「どうして、みんな捕まっていたの？」

「みなんでお母さんにプレゼントを買いにいったら捕まりました」
エマが言う。

「それは…みんな同時にかい？」

「お店の人がいい物があるよって言って行って行ったら捕まりました」

「…そうかい。そしたらお母さん達は心配しているだろうね」

「早くお家に帰りたいよ」ジャンが涙を浮かべて言う。

「大丈夫！僕がちゃんと連れて行くし、お母さんに会えるよ」秀太はジャンの頭を撫でながら言う。

「ありがとう…お兄ちゃん」目を細めて安心している様子だった。

「君たちの服は汚れているし、まともな仕打ちじゃなかった感じだね」

「はい…体も一週間近く洗っていませんし…その…気になりますか？」エマは恥ずかしそうに顔をふせる。スウとユウも気にしているようだった。

「心配しないで、僕が魔法で服と体を綺麗にしてあげるよ。…じゃあいくよ」

「【四人の体に付着する不純物をなかつたことにする】 【四人の服をあつたことにする】」秀太は続けざまに唱えた。

四人は体中ピカピカになった。そして四人に似合う上質なワンピースと上下の服がでてきた。

「とりあえず、僕は外にいるからみんな着替えてね」秀太はそう言う
うと馬車から降りた。

「やあ、ようやく起きたみたいだね」秀太はそう言いながら、傭兵の二人を見る。

「あんた何ものだ？」大柄な男が秀太を睨みつけながら言う。

「まずは自分から名乗るべきじゃないかな？」秀太はさらりと流しながら言う。

「ふん！そつだな俺はアッシュだ。そんでコイツがサラんだ」

「どうもサランです」優男のサランが言う。

「僕は秀太、よろしく？なのかな？」

「お前はバカか？俺たちはやっちゃんいけねえことをしたんだぞ？」

「ふん、そうなんだ。もともとあの商人の傭兵なの？」秀太は言う。
う。

「いや、ただの用心棒として雇われただけだよ。お金がよかつたらねまさか奴隷商人だと知ったのは護衛についた直後だけど」サラ
ジュが言う。

「それでもやめなかったのは…やっぱりお金ほしさあまり？」

「ああ、どうしてもお金がいるんだよ！俺たちには！」アッシュが怒鳴りながら言う。

「…実は僕たちにはね病気にかかっている村人たちがいるんだ」サランが言う。

「なるほど、そのためにお金を集めていたのか。ちなみにいくら？」

「3000金だよ。…無理だよこんなお金は」サランが落ち込みながら言う。

「治る保障はあるのかい？」

「わからない、だがこの国で有名っていう医者に頼んだら3000金用意しろっていうからな」アッシュが言う。

「…僕が無料で治そうか？」

「ハア！？お前バカか？そんなことできるわけねえだろ！！」アッシュが怒ってくる。

「シユウタさん着替え終わりましたよ」エマが笑顔で言うてくる。

「そうかい、そしたら皆一度、降りてきてもらっていいかい？」

「」「」「はい！」「」「と saying 皆降りてくる。

「ど、どづいづことだ？さっきまでガキどもは汚らしい姿だったのに…」アッシュが啞然として言う。

「まあ、見ててよ僕が今から魔法を見せるから」

「【この馬車を最高のものであったことにする】」

すると馬車が王族たちが使うような広々としたものになった。

「なっ！？じよ、冗談だろ！？」アッシュはかなり驚いていた。

「…もはや神ですね」サランは呆れながら言う。

「うーん、この大きさじゃ馬は足りないから【馬を六頭であったことにする】」

馬も六頭出てきた。

「い、生き物まで…」アッシュはうな垂れていた。

「神に確定ですね」サランは一人で頷いて言った。

きついな〜でも少し【魔力】は上がった感じだね。秀太はそう思っていた。

「おい、顔色悪いが大丈夫か？」

「問題ないよ少し派手にやりすぎただけで…」

「そ、そうか…それで、俺たちの村に来てくれるのか？」

「ああ、ここから近いのかい？」

「ああ、半日で着くが…ガキどもは大丈夫なのか？」アツシユは顎で示しながら言う。

皆、こつちを見て震えていた。

「あはは、皆、大丈夫だよ。皆に悪いことしないように約束してもらったから」

「…まだして　　痛っ！」秀太はアツシユの顔を摘み横に引つ張った。

「ほら、こつちでも抵抗してこないでしょ？」

「…」あはははは！」「…」皆、楽しそうに笑っていた。

「おまひえほほいへほほ！（お前覚えてるよ！）」「ものすごい変顔で言われた。

サランは肩を震わせながらこつちを見ないようにしていた。

とりあえず、二人は縛ったままのほうがいいかな？って秀太は四人に聞いてみたところサランだけ外していいと言った。

その時、アツシユがものすごく抵抗したが、すぐに身動きを取れないように縛り付けた。…今は子供達のおもちゃになっている。

サランと奴隷商人のことはどうするのか相談したが国に送りつけることにした。多分、斬首刑は免れないとのこと。

自分たちはこれでいいのだろうか？と言っていたが、子供たちが許してくれた。サランはお礼を述べていた。

子供たちはアッシュが弄れるならそれでいいらしい。本人は泣きながら諦めて受け入れていた。

色々しているうちに、アッシュとサランの村、アルバ村に着いた。

「とりあえず、村長のところに行こう」サランがそう言った。

そろそろ、アッシュがやばそうだったので、縄を解いてやった。怒る体力もない感じだった。

「ようこそ、おいでくださいました」そう言って村長さんが出迎えてくれた。

「村長、この人がタダで村の病気を治してくれるらしいです」サランが言う。

「な、なんじゃと！？それは誠ですか？」村長が秀太を見ながら言う。

「ええ、そうなんです。それとお願いなのですが、今夜泊まる宿とありますか？この子たちも一緒なんですが」

秀太はそう言って、馬車の中にいた四人を紹介する。

「うむ！わかりました。私の家の客間を使ってよろしいですよ？」
村長は笑顔で言った。

「ありがとうございます。さっそくですが案内してもらっていいですか？」

「わかりました。私が案内します。どうぞこちらです」村長はそう言って案内する。

「皆はここで待っていて、サランの言うことを聞いて大人しくしていてね？」

「……はい！」「」「」

こうして、秀太は一軒の小屋に案内された。

「ここです。ここに病気にかかった人たちがいます」村長がそう言った。

「…感染する恐れを考慮して隔離したんですね。何人いるんです？」

「四人です。それにみな子供なんです。お願いしますどうか助けてやってください」村長はそう言って頭を下げる。

「もちろんですよ。そのためにここにきたんですから」秀太はそう言って扉を開いた。

中は清潔とは決して言えなかったが、それなりに整えてあった。看病をしたのだらう。子供達の様子は呼吸が荒く、咳をしていた。肺

炎かもしれない。

と秀太は考えた。

「【この四人の体の異常をなかったことにする】」「この小屋の中を清潔であったことにする」秀太は続けて魔法を唱えた。

すると、子供たちは落ち着きを取り戻し、今は静かに寝ている。小屋の中も新品同様ピカピカになった。

「これで、もう大丈夫ですよ」秀太は笑顔で村長に言った。

「…こりやたまげた。あなたは神様だったのですか？」村長が秀太を崇めるよう見ていた。

「いや、僕は普通の人間ですので…神様ではありませんよ？」秀太は苦笑いで言う。

「今宵は宴じゃ、みなのもの〜！！ここにいる神様が子供達の病気を治してくれたぞ〜！！」村長は秀太の話をまったく聞かなかった。

「」「」「わああああ！！！！」「」「」

そして、ものすごく村人に崇められて秀太は苦笑いをするしかなかった。

21話 宴（前書き）

平日なので時間がなくて短いです。
言い訳ですいません

21話 宴

三城 秀太 視点

「さあ、今日はこの神様であるシユウタ殿がこの村の難病から救ってくださった。シユウタ殿に感謝を示して乾杯！」村長はそう言っ
てグラスを掲げる

「……かんぱい！！」村の人たち全員がグラスを掲げて
そう言った。

「あはは、乾杯」秀太も苦笑いしながらグラスを掲げた。

今の秀太はどこかの王様みたいな扱いをうけている。そして、子供
たち四人は神様の使者いわゆる天使みたいな感じで崇められている。

みんなものすごく恥ずかしそうにしている。

「ねえサラン…どうしてこうなったの？」秀太は隣にいるサランに
声をかける。

「どうかしましたか？神様」サランは何気ない顔で言ってくる。

「…やめてよ、居心地悪いからさ」秀太は困った顔で言う。

「あははっ、ごめんよ悪気はないんだ」サランは笑いながら言う。

「…意地悪なんだなサランって」秀太はジト目で言う。

周りの視線がサランに突き刺さる。「クロス」とか言うのが聞こえてきそうな感じだった。

「そ、そんなことないよ！さあさあ、飲んで飲んで！」サランは慌てて秀太に言う。

「…僕、お酒飲んだら周りの人を巻き込むからダメって家族に言われているんだけど」

「酒癖が悪い？飲んだらケンカでもするのかい？」

「家族が言うのは、人に絡むらしい、特に女性を」

「…ものすごく見てみたのだが」サランはそう言って飲ませようとする。

「まって、まって、さすがに迷惑をかけるかもしれないからダメだよ」秀太はそう言ってグラスを押し返す。

すると、お酒も入り、女性と話して上機嫌になっていたアッシュが秀太に近づいて背中をバシーンと叩いた。秀太はそのままサランの持っているグラスに口をつけお酒を飲んでしまった。

「うぐっ！…」秀太は思わず苦い顔をした。

「あはははは！お前まだまだ子供だな！」

すると、秀太はいきなり立ち上がり、さっきまでアッシュと話していた女性のところに行く。

「おっおい、俺の女に手を出すのか？」アツシユは少し怪訝な顔をした。

「あ、あの何か御用ですか？」女性は少し緊張した感じで言う。

すると、シユウタは片膝をついて女性の手の甲にキスをする。

「えっ！？」女性は顔を真っ赤ににして驚いた。

「お嬢様、もしよろしければ僕とお話をしませんか」秀太は女性を見上げて少し首を傾げて笑顔で言った。

「えっと！あの、その…」女性は片手を顔の頬にあてて迷う。

秀太は立ち上がって彼女の耳もとで囁いた。

「お話をしてくれたら、私を好きにしてくださいですよ」

ボンッと音を立てたように女性の頭から湯気が出た。

「よ、よ、よろこんで…」恍惚とした表情で女性は言った。

「はい、でわ行きましょうか」秀太はそう言って、女性を抱き寄せ
る。

「ひゃ！」女性の高い声が聞こえた。

「……ごめんなさい、もしかして嫌でしたか？」秀太は悲しい顔を
して言う。

「そ、そんなことはありません！…もしよろしければ向こうの川までいきませんか？」秀太を見つめて言う。

「ええ、よろこんでお嬢様」秀太はそう言う。

無論、村中の女性の視線を一気に集めた。多くは嫉妬の眼差しだ。

秀太はそれに気づいたのかこう言った。「もし、よろしければ皆さんもどうです？」

「よろこんで！」

「もちろんいきます！」

「どこまでも」

「ずっと一緒にいます」

そんな声がしてすべての女性を連れて、森のほうに秀太は消えていった。

サラン 視点

「…なあ、サラン俺の女が連れて行かれたんだが」アッシュは秀太が消えた方を睨みながらそう言う。

「そうですね。けど、あなたには女なんていませんけど」サランはさっぱりと言った。

「うぐっ！確かにそうだが…お前の女も連れて行かれたぞ？」アッシュはサランを見てニヤニヤしながら言う。

「そうですね…愛が足りなかったのでしょうか？」サランは遠くを見つめながら言う。

「…普通怒らねえか？」

「いや、怒るを通り越して、呆れたよ」サランは苦笑いで言う。

「…確かにそうだな。なんか集団催眠にかかったようだったな」

「言葉に一種の能力でもあるのかな？」

「そんなのだったら、詐欺し放題だぞ？」アッシュは呆れながら言う。

「そうだね、でも男性には効かない感じかな？自覚がないだけまだいいよ」サランは言う。

「自覚あっても詐欺なんてあいつはしないと俺は思うが…」

「あはは、そうだね秀太はしないと僕も思うよ」サランは笑いながら言う。

「アッシュ、遊ぼう！」一番下の男の子ジャンがアッシュに抱きつきながら言う。

「」「私も！」」「みんなアッシュに飛びつく。

「どわっ！お前らいきなり飛びついてくるな」「アツシユはそう言いながらも少し嬉しそうだった。

「サラン！アツシユと遊んできていい？」「エマは嬉しそうに言う。

「ああ、もちろんだよ遊んでおいで」「サランは笑顔でこたえる。

「うん！」「エマはそう言ってみんなとアツシユと一緒に鬼ごっこを始めた。

「あく本当によかった」サランは呟いた。最初みんな緊張をして敬語を使っていたが、だんだん仲良くなって今では敬語なしで話すようになった。

子供たちの親見つかるといいな〜とサランは思いながら一人で酒を飲んだ。

22話 リムール王国へ行くこと(前書き)

すみません遅くなりました。

22話 リムール王国へ行く

三城 秀太 視点

「シユウタ殿、この村を救っていただき本当にありがとうございます。ごまました」村長は頭を下げながら言う。

「あはは、そんな大したことはしていませんよ」秀太は笑顔で言う。

「そんなことはありません！村にとって一大事でしたので…そんな謙遜なさるなんて、やはりあなたは…！！」村長は拝むように秀太を見る。

「前も言ったように違いますよ。それよりもいいんですか？アツシユとサランを護衛に連れていっても？」

「いいんですよ二人はもともとついて行くみたいな感じですし、シユウタ殿がご迷惑でなければ…」

「いえ、ご迷惑なんてありませんよ。むしろ頼もしいですよ」

「でも、お前には負けたけどな」

「本当にそうですよ」

アツシユとサランはジト目で秀太を見る。

「こら！お前たち村を救ってくれた方に何たる無礼を！！本当に申し訳ありません」村長はペコペコしながら秀太に謝る。

「いいですよ。僕はこのくらい気にしませんし、こっちの方が話しやすいですし」

「おい、そろそろ行くこうぜ。いつもでもこうしちゃいらねえだろ？」「アツシユが言う。」

「馬車はサラン頼んだよ。僕は道詳しくなし」

「わかった。それでは行くこうか」「サランはそう言って、たずなを持つ。」

秀太とアツシユも馬車に乗り込む。

「それでは、皆さんお元気で」「秀太はそう言って村の皆に言う。」

「シユウタさんこれをお持ちください」村の女性がネックレスを渡してくる。

「これはなんだい？」

「これは村の女性たちからプレゼントの精霊の加護があるネックレスです。ご迷惑でしたか？」上目遣いで女性は見てくる。

「いいえ、ご迷惑なんてありませんよ。ありがとございます皆さん」秀太はさっそく身に付けて村の女性たちにお礼を言う。

「絶対にまたきてくださいね！」

「またお話聞かせてください！」

「できれば、村に住んで欲しいです！」

「私の家でも構いませんよ！！」

女性達が黄色い声を出して盛り上がる。

馬車はゆっくりと動き始めた。

「そういえば、ここからリムール王国までどのくらいかかるの？」

「ああ、二日位だろう。急ぐ旅でもないしな」アッシュは手を後ろに組みながら言う。

「そういえば村の女性はみんな優しくったね。僕にこんな素敵な物をくれるし村の女性たちは恵まれているね。また行きたいよ」秀太はアッシュを見ながら言う。

「…なあお前昨日のこと覚えていないのか？だとしたら女どもは哀れだわ」アッシュはふうふうとため息をつきながら言う。

「昨日のこと？僕は何かしてのかい？」秀太は首をかしげる。

「…お前それ女の前でやらない方がいいぞ？それにあの反応をみたら大体想像はつくだろ？」

「やらないほうがいい？想像がつく？」秀太はどんどん表情が険しくなる。

「シユウタ…乙女心わからないんですか？」エマは何故か呆れていた。

「…エマこいつに言っても無駄だ。まったく羨ましい限りだぜ」アッシュはため息をつきながら言う。

「お姉ちゃん達はさっきから何を話しているの？」スウが言う。

三人はまったく分かっていない様子だった。

「スウとユウとジャンはまだ分からないかもしれないですけど…シユウタの年齢ならわからないとダメです！」エマは頬を膨らませながら言う。

「そうなんだ〜ごめんわからなくて」秀太はエマの頭を思わず撫でた。

「…ま、まだ分からなくてもいいです」エマはそっぽを向きながらも受け入れていた。

「いや、分からないとダメだろ」アツシユはエマにツッコミをいれた。

しばらくしたら、エマ以外の子供たちとアツシユは揺れ心地が良くふかふかのソファのせいで夢の中に旅立った。

エマは優しく皆の頭を撫でていた。

「エマは寝なくていいのかい？アツシユも寝てるし」護衛の意味ないなつと苦笑いしながら秀太は言う。

「いえ…私は眠くないしそれにこの子達の面倒をみなくちゃ」エマはそう言って皆の頭を撫でる。

「さすがお姉ちゃんだね。しっかりしてるよ」

「そんなことはないです。捕まったときは怖くて何もできませんでしたし…」 エマは落ち込みながら言う。

「あたり前だよ。それはいきなり捕まるし、ひどい扱いだったんでしょ？」

「そうです。まともな食事はくれないし、まるで動物扱いでした！ エマは怒りながら言う。

事件のことをぽつぽつと話してくれるのは信頼されてくれることでもあり秀太は嬉しかった。

「…ひどいね。やっぱり間違っているよ。そんな人が居るなんて許せないよ」

「どうしてそんなことを人間はするんでしょうか？ シュウタはこんなに優しいのに」

「そうだね。みんなが優しくかったら本当にどんだけいいことか…」
秀太は遠くを見つめながら言う。

「…シュウタどうかしましたか？」 エマは心配そうに見つめてくる。

「いや、何でもないよ。そうだね、エマも人に甘えてもいいんだよ？ 困ったら相談してね？」 秀太は笑顔で言う。

「その… だったら二人のときだけお兄ちゃんと呼んでもいいですか

「？」上目遣いでエマが言う。

「もちろんいいよ」秀太は笑顔で言う。

「じゃあ、お、お兄ちゃん…抱きしめてもらってもいいですか？」
エマは顔を真っ赤にして言う。

「いいよ」秀太はそう言って静かにエマを抱き寄せる。

「う、ひっぐ…ッ」エマは秀太の胸の中で泣き出した。

「辛かったね」

「うっ、うっぐ…は…いッ」

「大丈夫だよ僕や皆が居るし、今はおやすみ」秀太がそう言うとエマは静かに眠った。

23話 リムール王国

三城 秀太 視点

あれから二日がたち、秀太達は獣人の国リムール王国についた。

「その馬車止まれ！」王国の衛兵に止められる。

秀太はドアをあけて衛兵に話しかける。

「実は僕たちは獣人の子供達を保護したんですが」

「むっ！その子供たちは馬車にいるのか？」

「ええ、みんな降りてきて〜」秀太がそう言うと、子供たちが降りてきた。

「この子供達はどこで保護したのだ？」

「奴隷商人に捕まっていて、それを僕が助けました」

「なんだと！また人間共の仕業か！」衛兵はかなり憤慨していた。

なるほど、どれだけ人間が嫌いかわかるな〜と秀太は思った。

「すまない、あなた達を侮辱したわけでは…」衛兵は申し訳なさそうにしていた。

「いいえ、気にしないでください。それよりもこの子達の親を探し

てほしいのですが…」

「うむ！了解した。案内人を呼ぶから少々待っていただきたい」

「ええ、わかりました」

十分くらいしたら、案内人がきた。

「どうも初めまして、案内人を務めさせていただきますレイナとい
います」レイナは銀色の耳、尻尾をもっている清楚な女性だった。

「ご丁寧にも、僕は秀太です」

「アツシュだ」

「サランです」

「よろしくお願いしますね。シュウタさん、アツシュさん、サラン
さん」レイナは笑顔で答えた。

（なあ、シュウタめちゃくちゃ美人で胸でかくねえか？）アツシュ
がシュウタに耳打ちをする。

（ねえサランなんかアツシュがレイナさんのこと…）秀太はサラン
に耳打ちをする。

（シュウタ、ここはアツシュがそのことを言ったとレイナさんに言
ってみては？）

（それはいいね。どんな反応するか楽しみだ）

「レイナさん、めっちゃくちゃ綺麗で胸も大きいって」…もうっ！シ

ユウタさんのえっちら」「…うん」レイナは頬を膨らませ照れている様子だった。

アッシュとサランは背を向けて肩を震わせていた。

あゝなるほど騙されたわけか…許せないかも秀太はそう思いながら笑顔で拳を握った。

「…シユウタ、胸が大きいほうがいいんですか？」エマはそう言うて俯く。

「そんなことないよ、胸があってもなくてもどうでもいいよ？」秀太は笑顔で言った。

「そ、そうなんですかよかったです」エマは安堵している様子だった。

「皆ちよつと後ろ向いていてね？」皆を後ろに秀太は向かせた。

「レイナさんと衛兵さん達は城のほうを向いていただけます？」

「一体どうしたんですか？」レイナは言う。

「すぐ終わるからちよつとだけ、ねっ？」秀太は言う。

「分かりました！さあ衛兵の皆さんも！」

「」「はっ！」「」そう言う掛け声とともに衛兵たちは城の方を一齐に向く。

「…さて覚悟はできたかな？」秀太はそう言う。

「…待つてシユウタあれは事故だよ！？さすがぐぶつち！」サランはそのまま腹を殴られて数メートル先の壁にぶち当たる。

そして秀太はくるっと方向転換をしてアツシユをみる。

「おいおい待て待て！俺は関係がへぶつす！」アツシユはそのまま腹を殴られてサランと同じ目にあう。

「二人は仲良くでしょ？ああ、皆さんもういいですよ？」

「えっと…あれは何ですか思わず音がして振り返りましたが…」レイナはそう言う。

「あそこにいるのは僕をそそのかした変態たちです。気にしなくていいですよ？」秀太は笑顔で言う。

「そうなんですか…ならいいですね。では行きましようか」

秀太は子供達を馬車に乗せて、秀太とレイナが運転をする。さすがに置いていくのは可哀想なので、倒れているサランとアツシユは縄でぐるぐる巻きに

して詰め込んだ。子供達がそう言ったからしかたなかった。

ここはある部屋の中での話し合いである。

「お兄ちゃんは、リムール王国に向かっているって本当？」麻衣が言う。

「ああ、どうやらそんな感じみたいだ。スムーズに入れるようにできないか？」シロが言う。

「そうですね。私が使いつと言う名目で行けば大丈夫だと思いますよ？」レイが言う。

「なら、そうしよう」シロが言う。

「でも、リムール王国は普通の人では入れませんよ？シユウタはどうするのでしょうか？」レイは心配そうに言う。

「あつ！大丈夫だよ。お兄ちゃん普通じゃないもん」麻衣は笑顔で言う。

「…まあ確かにあのかつこよさは普通じゃないですよ」レイは両手を頬にあてて、くねくねする。

「…あいつは一体ベットで何をしたんだ！！」シャルがブチ切れる。

「落ち着いて、それは後でお話の時に聞けばいいから」麻衣はそう言いながらも額に青筋を浮かべる。

「…それもそうだな、それでは旅の準備は言いとして、とりあえず通行許可証があるな」シャルはそう言うと言いつつ部屋から出た。

「…それよりも、シユウタさんは何に巻き込まれているのですか？」
アレクスが言う。

「…ごめん、それはまだ言えないの。信用していないっていうわけじゃないけど…ごめんね」麻衣はアレクスに申し訳なさそうに言う。

「い、いえ！こちらこそ申し訳ありません！」必死でアレクスは謝った。

しばらくして、シャルが許可書を持ってきた。麻衣達は城の外にて馬車に乗り込んだ。

「では、いくぞ」シャルがそう言うのとゆっくりと馬車が動き出した。

お兄ちゃん待っててね。麻衣はそう思いながら外を眺めていた。

23話 リムール王国（後書き）

すみません、誠に勝手ながらネタが尽きたためつくります。
もしかしたら、時間がかかるかも知れません。

24話 感動の再会（前書き）

どうも皆さんお久しぶりです。どうもテストの成績が悪すぎて親にPC禁止令が出されていました。不幸ですね…いや自分が悪いんですけど…

とりあえずこれからもぼちぼち頑張っていきますのでよろしく願います。

24話 感動の再会

三城 秀太 視点

「ねえ、なんかさつきから注目されている気がするんだけど…」秀太は周りを見ながら言う。

「仕方ありませんよ。だってこの馬車見たこともなければ、この大きさもありえませんから」レイラは苦笑いしながら言う。

秀太が作った馬車はこの世界において、確立されていない技術なのだ。ゴムのタイヤ、サスペンション、そして、10人は余裕で入る大きさ、さらにもものすごく乗り心地良いなどかなり目立つのだ。

「少しやり過ぎたかな…作らなきゃよかったかな？とりあえず自重しなきゃ」

「…この馬車はシュウタさんが作ったのですか！？」レイラが驚きながら言う。

「え？そうだけど…何かまずかった？」

「いえいえ！この馬車の技術教えてほしいなと思いましたが…ダメでしょうか？」

「まあ別に良いけど…いつがいい？」

「そうですね…明日の朝、城に来て頂けませんか？」

「城?...いいけど」

「わかりました!では、明日、城の門の前にいますので」目をキラキラしながら言うてくる。

そんなに乗り心地がよかったのかな?秀太はそんなことを考えていた。

「あつ!場所聞いてないや」秀太はそう言って小窓を開ける。

「エマ、君の家はどこにあるんだい?」

「はい、家は住宅街の一角にある一軒家です」

「了解。んじゃ着くまでゆっくりしててね」

「わかりました」

「住宅街にいきますか」秀太は言う。

「行っくっていう距離でもないですがね...」

うん、目の前にあるのが住宅街だね。秀太は心の中で呟いた。

とりあえず、エマたちの家に着いた。エマ達の家は庭が広がった。

秀太は庭で花の世話をしている女性を見つける。見るからに元気がない様子だった。

「お母さん！！」エマがそう言いながら馬車から飛び出した。

「え、エマ！？本当にあなたなの？」お花の世話をしていた女性がエマを抱きしめながら言う。他の子供達も向かう。

「お母さん！！」

「母さん！！」

「ママ！！」

「ユウ！、スウ！、ジャン！みんな良く無事で……！！」エマ達のお母さんはみんなを抱きしめながら泣く。

「おうおう、良かったじゃねえか」アッシュが言う。

「そうだね〜家族愛だね〜。……すいませんそろそろ、ロープを切る。サランが言う。

「……仕方ないな」秀太はそう言ってナイフでサラン達のロープを切る。

「……なあ、自由っていいな」アッシュが唐突にへんなことを言う。

「……今なら僕も分かる気がするよ」サランが言う。

「まあ、とりあえず会えてよかったと思いますよ？……それでは私はこれで」レイラが言う。

「…僕達を監視しないでいいのかい？」秀太が言う。

「くすっ、気づいていたんですか。あなた達は危害を加える人達ではないと判断しましたからいいんですよ」レイラは笑みを浮かべて言う。

「…わかった。そういうことならいいや」

「それではまた明日、シュウタさん楽しみにしていますよ？」妖艶な笑みを浮かべてレイラは帰っていった。

「…てめえ！また女を捕まえたのかよ！」アツシュが秀太にキレる。

「女の人を捕まえたことなんて一度もないんだけど…」

「くそ！くそ！なんて世の中は理不尽なんだ！俺にもチャンスくれよ！」orzこんなポーズをしながらアツシュが言う。

「あの…あなた達は一体…」エマ達のお母さんが不審の目を秀太たちに向けながら言う。

「お、お母さんあの黒髪の方が私達を助けてくれたの！」エマが言う。

「まあ…！この子達の恩人さんだったのですか…！」

「ええ、私はシュウタと申します」秀太は一礼をする。

「…丁寧にごうも、私はこの子達の母親のランと申します」

「護衛のアッシュです」

「同じくサランです」

二人も一礼する。

「とりあえず、中に入ってお話を聞かせてくれませんか？」

「ええ、わかりました。アッシュ、サランもちろん君達もだよ？みんなは遊んでいていいからね」分かれているよね？てきな視線を秀太はサラン達に送る。

子供達は元気よく返事をして、庭で遊ぶ。

サランとアッシュは無言で頷いた。

家の中に入ってテーブルにつく。

「お茶です」そう言ってランはお茶を秀太達に出す。

「ありがとうございます」

「どうも」

「どうもありがとうございます」

「それで、あの子達はどこにいたんです？」

「僕が見つけたときには、商人の馬車に奴隷として乗っていたんで

すよ
「よ」

「ど、奴隷としてですか!!」ガタンと音を立てながらランさんは立ち上がる。

「…そうですね。話によると一週間捕まっていたそうです」

「…人間は本当にひどいですね！腹が立ちます」

「路地裏で捕まったと言っていたんですが、この城下町にいたんじゃないですよ？」

「ええ、確かにそのときはここにいませんでした。あのときは別の町にいたんです」

「なぜそんなところに？」

「あの子達は城下町以外の町のところに行きたいと言ったものから比較的安全なところを選びました。まさかこんなことになるとは…もうこんなことにならないようしっかりいつけます！」

「そうだったんですか…でもあの子達を責めないであげて下さい」

「どうしてですか？」

「あの子達は、ランさんにプレゼントを買ってあげたかったらしいです」

「プレゼントですか？でも何でまた…あっ！」「ランさんが何か思い出したように声をあげる。

「たぶん、ランさんの誕生日プレゼントに城下町にはない珍しいものを探したかったんじゃないですか？」

「…ふふふ、そうだったんですか。まったく心配ばかりかけて…」
ランさんは目に涙を溜めながらいう。

「あと、もう一つあります」サランが真剣な表情で言う。

「一体何ですか？」ランは少し不安な表情を見せる。

サランは自分達が傭兵として奴隷商人に雇われていたこと、いけないことと分かっていること。お金がどうしても必要だったことなどを話した。

「本当に申し訳ございませんでした！」

「申し訳ございませんでした!!」

サランとアッシュは誠意を表した土下座をした。

「顔を上げてください二人とも」

二人は顔を上げてランを見つめる。

「確かにあなた達がしたことは許されることはありません。しかし…」

「くすっ、どうやら子供達には好かれているようですね」ランはそう言って玄関の方を見る。

子供達がドアに隠れてじーっとこちらを見ていた。

「お母さんサランとアツシユは優しいよ」

「いい人だよ」

「遊んでくれるよ!」

「…一緒にいると楽しいよ!」

みんなランに向かって言う。

「あらあら、これじゃまるで私が悪者みたいね。二人を私は許すわ」
そう言いながらランは微笑む。

「あ、ありがとうございます」

「ありがとうございます!」

「ねえ!そんなことよりも向こうで遊ぼうよ!」

「勇者ごっこがいいな」

「じゃあ!アツシユが悪役ね!」

「サランは騎士ね」

「あつ、ちょ!おい!」アツシユは子供達に引っ張られて連れて行かれる。

「ふふふ、じゃあ僕もいこうかな」そう言ってサランは子供達についていった。

「本当に仲が良いんですね」

「ええ、そうですよ。やっぱり笑顔が一番ですよ。…エマは行かなくて良かったのかい?」

「わ、私はその…」こがいいんです!」そう言って秀太によっかる。

「?そうかい、ならいいけど」

「あらら、エマもしかして…」その光景を見てランは微笑んだ。

夕方になり秀太達は宿を探すために、ここを出ようとしたが、泊まっていたほしいと言うみんなの要望があったので今は夕食である。

「さあ!いっぱい食べてくださいね」

そう言ってたくさんの料理が並んでいく。

「うわ〜美味しそうですね」秀太はそう言ってハンバーグを食べる。

「美味しいですね。中は肉汁がたっぷりです」

「ふふふ、実はそれエマが作ったんですよ?」

「え?エマが?」秀太はそう言って隣にいるエマを見る。

エマは顔を真っ赤にしていた。

「ふふっ、美味しかったよ。エマはいいお嫁さんになれるね」秀太はそう言っけてエマの頭を撫でる。

「え、えっと、あの、そ、そのシユウタさんがよければ毎日作ってあげますよー!」

「ありがとう。そう言っけてくれて嬉しいよ」

「え、えっ!?!じゃあ私とけ、けけ、けけけ」頭がオーバーヒートしたみたいで湯気が出ている。

「大丈夫かい?何かすごいことになっているよ?」

「…シユウタあなたのせいだけど」サランが言う。

「ん?どういうこと?毎日作っけてあげるのは無理だけど気持ちだけ受け取るよみたいなの?感じで言っただけだけど…」

「いや…もうシユウタ殴っけていいか?」アツシユがそう言っけて立ち上がる。

「なんで?意味わからないよ」

「あら〜シユウタさんっけて鈍感なんですわ〜エマ、直接言わないといけないよだけど…?」

「い、い、いや、あの、その、好きです!!大好きです!!」真っ赤になっけてエマは言う。

「うん、僕もエマのこと好きだよ」

「ほほほ、本当ですか!!」

「本当だよ。あと、ユウもスウもジャンも大好きだよ」秀太はそう言って皆をみて微笑む。

「どうせそんなことだろうと思ったよ」

「そうだね。期待を裏切らないよね」

「残念ねエマ」

「もういいです！シユウタさんなんでわからないんですか？」エマは頬を膨らませていう。

「何が分からないか知らないけど、エマのことは好きだよ？」

「…もういいです」「エマはそう言ってそっぽをむいた。

25話 思わぬ出来事（前書き）

今回はあまり進展がありません。
それでも、見てくれると作者は嬉しいです。

25話 思わぬ出来事

三城 秀太 視点

夕食後、秀太達は秀太が用意したトランプで遊んでいた。みんな初めて見るのもでとても興奮していた。

コンコンつとドアを叩く音が玄関から響く。

「あら、誰かしら？」ランはそう言って玄関に向かう。

「待ってください」秀太がランを止める。

「一体どうしたんですか？」

「…気配を感じないんで怪しいですよ」玄関を示しながら言う。

「…盗賊？もしかしてまた子供達を…！！」そう言ってランは顔を青くする。

「ランさん、子供達を連れて奥に行ってください。サラン、アッシュ 戦闘態勢」

ランは子供達を連れて奥へ移動する。サランとアッシュは剣を抜いて構える。

「僕が合図するまで動かないで」秀太はそう言ってドアのほうに行く。

「【透視スキルがあったことにする】」

秀太はそう言っただけでドアを透視して見るが誰もいない。

どこかに移動したのか？それとも…

コンコンつとまた音がする。

やっぱり玄関にいる。秀太はそう確信した。

「敵は認識できない魔法を使っている。もしかしたら肉眼じゃ見えないかもしれない」

「了解どうする？」サランが言う。

「大きな光を出して目をくらませる。サラン、ドアを合図したら開けてくれ」

「【閃光玉をもらったことにする】」

秀太は手に収まる閃光玉を作り出した。

「わかった」サランはドアに近づく。

「目痛くなるから、ちゃんと目をつぶってね。いくよ。3・2・1
今だ！」

サランはドアを開けた瞬間にシュウタは閃光玉を投げる。

ピカッと閃光玉が光る。

「……キヤー……!!」「……」つと女性特有の悲鳴が響く。

「くっ！目が！」

「誰です！こんな悪戯をするのは!!」

「…もしかしてお兄ちゃんかな？」

「痛いですね〜お仕置きが必要のようですね〜」

「…許せないかも」

「う〜む、眩しいも朝か？」

麻衣たちが黒いオーラを出して目を押さえていた。

「【回復】」麻衣がそう言うともみんな目を押さえるのをやめた。

「お久しぶりですね？シユウタ、これは歓迎の挨拶だったりするんですか？」レイが黒い笑みを浮かべながら言う。

「やあ、僕的にはお久しぶりではないけど…話をきいてほしい」

「はい？何ですか？O H A N A S H I Iですか？」

「いや、そんな愉快なものじゃないんだが…待ってくれシャル剣を降ろしてくれ」秀太は両手をあげて秀太の首筋に剣を当てているシャルに言う。

「なんだ？これは挨拶なんだが？」シャルはにやりと笑う。

「…悪かったでも聞いほしい。気配がまったくしなかったんだ」

「気配？ああ！そういえば認識阻害の魔法使いっぱなしだった！」

麻衣が慌てて言う。

認識障害か…僕の魔法で見えなかったのも関係があるかもしれない。まずいな…ますますこの魔法に依存できないぞ秀太は思う。

「閃光玉にびつくりして大声あげたから効果は切れたみたいだね」

「うん、ってそれよりも！お兄ちゃんどうしてあんな手紙を残して去ったの？」麻衣が秀太を真剣に見ながら言う。

「それはあんなこともあつたし…嫌われているとおもったから」

「なんでそんなこと勝手に決め付けるんですか！私はシユウタのことは嫌いではありません好きですよ！！」レイが顔を真っ赤にしながら言う。

「私も！」

「私もです」

「私もだ」

「あたしも！」

「僕も」

「私…も」

「無論私もだ」

「妹の私は言うもでもないよね？」

みんな秀太を見ながら言う。

「あはは、そうだったんだ。僕の勘違いだったんだ」秀太は苦笑いする。

「そうですね！そして危険なところに行くのであればどうして私達に相談してくれないんです？」レイは頬を膨らませながら言う。

「…みんなを危険な目に合わせたくないから」笑顔で秀太は言う。

「そんなの構いません！どうして仲間を頼らないのです！？」レイは目に涙を溜めながら言う。

「自分に危険を及ぶのは構わないよ…でもね自分の都合で他人を巻き込むのは嫌なんだ」

「それは自己満足です！！シユウタが傷つくことで誰かが悲しむんですよ！！」

「…そうだったんだ。うん、確かに自己満足だね」

「…そうですねもう少し、もう少し頼ったっていいじゃないですか…」
「うっうっ」レイは泣き出した。

「ごめん、今度はもう少し考えて行動するよ」秀太はレイの頭を撫でる。

「うっうっ！そ…う、ですよ…」レイはそのまま秀太に抱きついた。

秀太は抱きとめてそのまま頭をゆっくり撫でる。

「どっちら今回はレイの勝ちだね」

「あんなに幸せそうなレイ様の顔みたことがないな」

「ふふふっそうですね。でもちよつと嫉妬しますわ〜」

「レイ様いいな〜私もしてもらいたいな〜」

「…ずるいかも」

「別に羨ましくなんかないし!〜!」

「もう少しフアンは素直になろうね?」

「まあ、私は胸の中に潜るといふ特権があるし」

みんな思い思いの言葉を述べた。

一段落ついて、ラン、子供達、サラン、アツシュに紹介をした。

「シュウタさんを追ってここまで来たんですか〜ご苦労様です」

「いえ、そこまで大変なことではなかったですよ」麻衣が言う。

「居なくなった時には流石に慌ましたけど…」シャルが秀太を睨みながら言う。

「そう言えば罰を与えていませんでしたね…シヨタ化?でしたっけ?」メーブルが首をかしげながら言う。

「そうそう！お兄ちゃんシヨタ化計画だよ。これはあくまで罰だからね？」麻衣が笑顔で秀太に言う。

シヨタ化？おいおい、まさか、僕を小さくするんじゃない…逃げる！

秀太は瞬間移動を使って逃げようとする。

「【魔法無効化】さらに【束縛】」麻衣が逃がさなかった。

「ふふふっシユウタが小さくなってあんなことやこんなことを…えへ、えへへへへ」レイが恍惚な表情を浮かべる。

秀太は周りを見渡すとみんなレイと同じ表情をしていた。

「【縮小】」麻衣がそう言うのと秀太は見る見る小さくなって170後半あつた背が120まで縮んだ。

「か、かか、かわいい！！」レイはそう言って秀太に抱きつく。

「レイ、苦しい」秀太はジタバタ暴れるがどうにもならない。

「ああ、声も可愛くなっていますわ。もう離しません！さあ、このままベットであんなことや…」レイは恍惚な表情を浮かべたまま二階に移動しようとする。

「ダメです！いくらレイ様でもそれは許しません！」メディアがレイを止める。

「メディア邪魔をしないでください！今から秀太と私は甘い一夜を過ごすんです！！」

「シユウタは私のご主人様です私のご奉仕します!」

「待て!それなら私もシユウタをご奉仕するぞ?」シロものってくる。

「それなら、弟子である私も!」ファンが言う。

「わ、私も...!!」

「お兄ちゃんは私ものもだよ?誰のものでもないんだけど...」

みんなそんな感じですよーつと言い争う。

秀太はサランとアツシユに助けを求めるが二人は首を竦めて苦笑いするだけだった。

いつまでこの争いが続くんだ?秀太は笑いながら眺めていた。

次の日の朝、秀太はぐったりした様子でレイナさんの約束を守るために城を訪れていた。: 無論みんなを連れて

「ここがお城ですか、綺麗ですね」レイがそう言って城を見る。

城は銀色を主体とした色で、そびえ立つ高い塔、豪華な柱など、か

なり鉄壁な感じである。

「お待ちしておりましたよシユウタさん」レイナが腰に剣をぶら下げ、騎士の軽装姿で現れた。

「ああ、うんレイナさんは騎士だったんだ」

「ええ、王族直属の騎士団の副隊長ですわ」

「…すごかったんだね。驚いたよ」

「ありがとうございます。それよりも…後ろの方々はもしかして…」

「ええ、スフィード王国から参りました第一王女のレイ＝スフィードと申します」

「ああ！これは失礼しました姫様。私は案内人を務めさせていただくレイナと申します」レイナは軽く一礼をする。

「ええ、よろしく願います」

「では、皆さん私についてきてください」

城に入っただけでしばらくすると大きな扉が目の前に見えた。そしてレイナはその前に止まる。

「こちらで王が待つております。今回はスフィード王国と技術交換と言うことで先ほど伝えました。みなさんにそのように対応してもらつと助かります」

「わかりました」

「では、行きましょうか」

こうして秀太達は王との謁見が始まった。

25話 思わぬ出来事（後書き）

誤字脱字の修正をしました。

指摘してくださったカイウス様、本当にありがとうございます。

26話 最悪な出来事

三城 秀太 視点

「シャル、アレクス、大丈夫？なんかそわそわしているけど…」

「あ、ああ、大丈夫だ問題ない」

「え？あ、はい大丈夫です」

アレクスとシャルは何故か落ち着かない様子だった。

まあ、今気にすることじゃないか。秀太はそう考えた。

「…シロそろそろ胸から出て欲しいんだけど」

『私の寝床をシュウタは取るのか！？私はここがいいに決まっています！！誰にも譲らんぞ！！』高々に念話で宣言する。

「…わかったシロがそこまで言うなら…いいよ」

『ふふふっ 最高だ！これほど最高なことはないぞ！』シロはものすごく興奮しながら言う。

まあ、いいか。秀太は苦笑いしながら受け入れた。

「陛下、昨日お話しした人物をお連れしました」レイナがそう言って王の前で膝つく。

「うむ、ここに来るように申せ」重く低い声が響く

「承知しました。ドアを開ける！」レイナの声が響く。

すると兵士が扉を開けて秀太達を入れた。

「黒髪黒目の男そなたが馬車を作ったと言う人物か？」金色毛並みの荘厳な王が壇上の椅子に座っていた。

「ええ、私がそうです。名前はシュウタと申します」

「うむ、シュウタ殿お主の後ろにおるのはスフィード王国の姫なのか？」

「申し遅れました私、スフィード王国第一王女レイニスフィードと申します」

「おお、そなたが第一王女なのか噂どおりで綺麗じゃのう」キツイ視線をレイに送る。

「お褒めの言葉ありがとうございます」どこかレイは不快そうだった。

「さて、今回はシュウタ殿お主の作った馬車の技術を我々に教えて欲しいのだ」王はどこか見下したような感じだった。

「人間嫌いは本当のようだねしかしどうしてここまで…？シュウタは考える。」

「構いませんが交渉と言う形でとってもらいたいのですが…」

「ふむ、いいだろう。お主は何を望む。金か？女か？それとも権力か？」毒を吐くように言ってくる。

「いいえ、ある情報について教えて欲しいのです」

「ほう、よっぽどの情報なのだろうな…申してみろ」

「ええ、それは」

「王様大変です！！おい！その黒髪の少年を捕らえろ！！」兵士がそう叫ぶとみんな慌てて秀太を囲み出す。

「一体どうしたというのだ！！些か無礼であるぞ！！」王が激昂する。

「申し訳ございません！しかし、このものが、あの大魔女ローズ＝エルキナスと繋がりとあるとのことです！」

「なんだと！それは誰からの情報だ？」

「はい、スフィード王国に仕えるもの二名からです。二名は今、そこで妹を捕らえています」

秀太はそつちを見る。アレクスとシャルが麻衣に剣を向けていた。

二人の剣先が震えている？どういうことだ？…まさか誰かの命令で？秀太は考える。

「こいつが大魔女と繋がっているのは本当なのか？」王が秀太を指

しながら言う。

「はい、間違いありません。大魔女が使っていたとされる魔法を使っていたとされています」シャルが言う。

「ぐぬぬ！この悪魔め！私の命を狙おうとしてもそうはさせんぞ！
！この悪魔を殺せ！！」

「しょ、承知しました…や、奴を殺せ！」レイナは戸惑いながら言う。

とりあえず麻衣を助けて逃げるか。秀太はそう考える。

【身体強化スキルと粒子を操れるスキルがあつたことにする】秀太は心の中で言った。

秀太は一瞬で10m離れた麻衣を救い出して、入口まで移動した。

「お兄ちゃん！？…この格好は恥ずかしいんだけど」麻衣が顔を真っ赤にしながらかう。

秀太は麻衣をお姫様抱っこをしていた。その様子はまるでお姫様を救い出した。どこかの王子様のようなのである。

「あれ？まずかった？でももう少し我慢してね？」

「なっ！貴様！追え！奴らを逃すな！捕らえろ〜！！」王が叫ぶ。

30人ほどの兵士がいつせいに襲いかかる。

「…恨まないでね？…いや、それは無理かな」

秀太の周りに光を纏った粒子が集まるそして大きな二つの翼を作り上げた。

「いけ」

いつせいに何百ものの光の刃が兵士たちに向かっていく。

「……うわああああああああ！！」「」「」

兵士がバタバタと倒れていくしかし不思議なことに血が一滴も出ていない。

「手加減はしたよ？」

「ひっヒイイイー！！」王が怯える。

ヒュンつと音が響いたと思ったら王が気絶していた。

「シユウタさん！どうしてこんなことをするんです！！何故、大魔女なんか…！」

「ローズが何をしたのか知らないけど、決して他人に迷惑かける人じゃないよ」

「ですけど！大魔女は魔物をこの世に放ったんですよ！？」「レイナが悲痛な表情で叫ぶ。

…なんだ？どういうことだ？魔物をローズが放った？いや、今、考

えることじゃない秀太はそう判断する。

「彼女は僕の命の恩人なんだ」秀太は笑顔で言う。

「命の恩人!？」

「そう…だからその恩を返すためにも、しなくちゃいけないことがある」

まあ、復讐っていうのもあるけどね。秀太は心の中で言う。

「それはなんです!？そこまでする必要が」

「【七神柱】セブンスコイル僕たちをここに呼び、利用しようとする者たち…許せないよ」秀太が遠くを睨みながら言う。

「…じゃあ行くね。たぶん会うことはもうないんじゃない?」

「シユウタさん!!待ってください!!置いていかないでください!!」レイが泣き叫びながら秀太のところに来る。

「ごめんね?レイ」

「待って!!…いや!いや、いや!!いや!いや!…」レイが追いついた時にはもう秀太は消えていた。

秀太は麻衣を抱えて王国からかなり離れた森に瞬間移動した。魔法で誰も居ないことを確認したが念には念をだ。秀太はそう思って周囲を警戒する。

「あつ…やばつ」秀太は麻衣を降ろした直後、ふらふらしながら地面に膝をついた。

「お兄ちゃん大丈夫!？」

「ああ、大丈夫だよ」

使ったことのないスキルを二つも使い、瞬間移動もして秀太は疲れていた。

「でも…」麻衣が心配そうに見てくる。

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫だから」秀太はそう言っ
て立ち上がる。

それほど難しいスキルじゃないからなんとかコントロール出来たけど…難しくなったら無理かなと秀太思った。

「お兄ちゃん本当にあれでよかったの？」麻衣が心配そうに見つめる。

「問題ないよ。僕たちのリスクが上がるなら切り捨てるし、関わることで危なくなるなら断ち切るよ」

「…でもそれじゃあ」

「いいよ、僕のことは気にしないで、それとごめんね危険な目に会わせて」秀太は申し訳なさそうに言う。

「いいよそんなことくらい！でも…あまり自分で抱え込むのはやめてね？困ったときはちゃんと私に相談してよね？」

「ああ、その時はよろしく頼むよ…ねえシロ〱そろそろ出てきて〱」

『…む…うむ…』シロはそう言って秀太の胸の中から顔を出した。

「やあシロ。…何が起こったか分かってる？」

『…ここはどこだ？一体何をしているのだ？』シロはそう言って周りをキョロキョロ見る。

「…はあ〱」秀太と麻衣は同時にため息をついた。

とりあえず秀太はシロにこれまでの経緯を説明した。

『なるほどな、ばらされてここまで逃げてきたというわけか』

「そういう事、だからねこれから脅したと予想される【七神柱】セブン・スエム・ピラーを探さないといけないんだ」

「でも検討つくの？」

「ふうん……ないや」

ズルっとこける音が聞こえた。

『そ、そうか、なら情報収集と

秀太！！よける！！』

「おっと」秀太はとつさに横によける。

秀太がいた場所は直径1mのさら地になっていた。

「おお、今のをよけるのか。ふうんまあいいや」

そんな声の上から聞こえて来たので秀太は上を見る。そこにはファイルズを殺した緑眼緑髪の少年が空中に浮かんでいた。

「初めましてではないけど風柱所^{ウインディネス}属副隊長のザンス＝ライド。よろしく」

27話 それぞれの道

三城 秀太 視点

「君にひとつ聞いていいかい？」秀太はそうザンスに言う。

「君じゃなくてザンスって呼んで欲しいな」ザンスはにこにこしながら地面に降りてくる。

「攻撃してきた相手になんで、馴れ馴れしくしなきゃいけないんだい？意味がわからない」秀太はそう言うってザンスを睨みつける。

「そう警戒しないでほしい。さっきの攻撃は君を試しただけだよ」にこにこしながらザンスは言う。

「そうだとしても、いつ攻撃されるから分からない。だから警戒は解くつもりないよ」秀太、麻衣はザンスを囲むようにして警戒する。

「そうかい、まあ別にそれでもいいや。それで？聞きたいことって何？」

「シャルとアレクスを脅したのは君の仲間かい？」

「ふふっなぐんだもう気づいていたのかそれは失敗だったね」ザンスは笑みをこぼしながら言う。

「…何でそんなことをした？」

「君に関する情報収集と孤立をさせるためさ」

「やっぱり下衆だな君らの組織は」

「あらら、裏切られた感想はどうだったって聞こうと思っていたのにな」

「何が言いたい？」

「君は人が嫌われることをしない逆に言えば人に嫌われたくないと思っているんじゃないか？」

「最後に聞く！脅した奴は誰だ！」秀太は刀と銃を構えながら言う。

「ああ、脅しな奴？…僕に決まってるじゃないか」ザンスの周りに3mくらいの竜巻が5個現れる。

「くらえ」ザンスが片手を横に振ると竜巻が秀太達を襲う。

「【この竜巻をなかったことにする】」そう言って秀太は竜巻を消した。

しかし、竜巻を放った本人は居なかった。

「お兄ちゃん！上！【束縛】！」麻衣は束縛の魔法を放つが魔法が効かなかった。

「魔法は僕には効かないよ。また会おう」ザントはそう言った瞬間、消えた。

「…逃げられたか」

「魔法が効かなかったって…何で!？」麻衣はかなり慌てていた。
「僕にも分からない。けど物理攻撃は効くよ。ファイルズがそうだった」火山で戦った時の相手を秀太は思い出していた。

「武器かゝでも私これしかもってないよ」麻衣はそう言って黒い刀身の剣を見せる。

「麻衣は創造すればいくらでもつくれるから…いいんじゃない?」

「それもそうね…それは置いといて、これからどうするの?」

「情報収集するしかないよ。変装して近くの町へ行こう」

『私は胸の中に居ていいか?』シロはキラキラと目を輝かせながら言う。

「シロが【白銀狼】シルバールーフって言うのがバレるから人間になって」

『…面倒だな』シロはそう言って秀太の胸の中から出てきて人間の姿になる。

「さあ、秀太、麻衣、町へ行くぞ!」

「「いやいや、服着ようよ」「秀太と麻衣は揃って言った。

レイ 視点

秀太達が去ってから城中大騒ぎになっていた。大魔女が復活したとか、スフィード王国は大魔女に脅されていたとか色々噂がたった。

レイ達は城の中にある部屋に案内されて皆そこに集まっていた。

「シャル、一体何があったのかはなしてください……」

レイは泣き続けたせいか、目が赤くなっている。

「はい、わかりました。実は……」

秀太搜索、出発前日

シャルは城の警備の人がいつまでたっても交代に来ないので不審に思い、警備の場所まで向かっていた。

辺りはすっかり真っ暗で明かりがないといけない状態だった。

「なんだこれは！」シャルが目当たりしたのは警備の奴が全員気絶していたのだ。

20人だぞ！？誰かに入られたのか！？しかし、音も立てず、気配も出さずどうやって？まさかプロの暗殺者！？王女様達が危ない！

シャルは急いで王女達が眠る部屋に移動した。

「くっ！やはりいない！！」シャルは三つの部屋を調べたが誰も居なかった。

「おや？やつと来たのかい？案外城の中の警備もザルだね」

シャルは声が聞こえたほうを向くと、緑眼緑髪の少年が三人の王女達を空中に浮かせて佇んでいた。

「貴様！王女様達を離せ！！」シャルはそう言って剣を抜く。

「おっと、立場を理解して欲しい。こっちが有利なのは…わかってるよね？」にこにこしながら言う。

「まずは自己紹介だね。僕はザンス＝ラント、よろしく」

「よろしくするつもりは私にはないんだが」

「ふふふっそれは無理だよ。この子達がどうなってもいいのかい？」

「…要件はなんだ？」シャルはザンスを睨みつけながら言う。

「簡単だよ。ミシロ＝シユウタの情報と彼を畏にはめて欲しい」

もまた聡明だったよ。そして君と同じでシュウタに憧れている」

「お前のおかげで全てめちゃくちやだがな」シャルは思いつきりザンスを睨みつける。

「お、すごいね。今すぐにも僕を殺しそうな感じだよ」

「戯言はいい。さっさと用件をいえ!」

「ああ、そうだね。やって欲しいことは」

「これが全容です。私は王女様達を守るためにシュウタを売りました。この罰は如何なるものでも受けるつもりです」

「僕も彼女とやったことは変わりありません。僕にも責任が」

「いえ、もう過ぎたことです。∴それよりも私はそのザンス＝ラントの素性が知りたいです!」

「姫様、一つだけ思い当たる節があります」

「それは一体なんですか!?メープル!」

「【七神柱】セブンスコッド そう名乗る人がシュウタを狙っていました」

「【七神柱】ですか…聞いたことありませんね」

「私もそのとき初めて聞きました。調べても情報がありませんでしたし…」

「それを国総出で調べることにします！」

「れ、レイ様！？お待ちください！そんなことをしたら狙われてしまいます！」シャルが慌てて言う。

「そんなこと問題ありません！シユウタを助けるためです！それがせめてもの償いだと私は思います！」

「し、しかし！」

「僕は姫様に賛成します！」

「私も！」

「私…もです」

カースウエル兄妹がレイに賛成した。

「それでは私もです」

「私も！」

メーブルとメディアも賛成した。

「シャル？あなたはどつするんです？」「レイがシャルにそう言う。

「…わ、わかりました。私も賛成です！」

「よし！それでは早速、城に帰って調べましょう！」

シユウタ：あなたにまた会えることを私達は願っていますよ？私達は私達でシユウタを微力ながら応援します。

レイはそう思いながら窓の外を見つめた。

27話 それぞれの道（後書き）

評価の方よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8541w/>

勇者の妹と温和な兄

2011年10月30日00時27分発行